

ながたの民話



長田区役所

ながたの民話

田辺真人 編

発行 長田区役所

発刊にあたって

幼い頃、父母や祖父母たちから昔の話を聞いて育った大人たちが、いまでは、昔の懐かしい思い出や民話を子供たちに語り聞かせるということが少なくなってきたように思われます。

時の流れは、私たちの意志にかかわらず、物の見方、考え方の背景を変えてしまいます。日々の生活に追われ、うしろを振り向くゆとりすらない——これも時代の風潮だと言う人もいます。でも「温故知新」という言葉があるように、昔の姿を知ろうとすることは、私たちが生きて行く明日の姿を探るための道標を見ることではないでしょうか。

永い歴史を持つ長田区には、昔の名残りをとどめた街並や名所旧跡があり、そして、遠い昔から、人から人へと語り継がれてきた数々の民話があります。ところが、その民話も時代の移り変わりとともに、忘れ去られようとしています。

そこでは、こうした長田の昔の姿を、形あるものとして一冊の本にまとめました。この本がみなさんに潤いとゆとりと豊かなひとときを提供することになれば大変幸いです。

おわりになりましたが、この冊子の発刊にあたり、調査・執筆いただいた県立御影高等学校教諭の田辺真人先生、表紙絵と挿し絵を快く引き受けて下さった日本漫画家協会会員の丘あつし先生に厚くお礼申しあげます。

昭和五十八年三月

長田区役所

まえがき

昭和四十年代の高度経済成長の時代に、日本の社会は大きく変容し、有形の文化財や自然環境とともに、伝統的行事や民俗芸能なども急速にすたれていった。しかし、四十年代の末になると、このよ
うな動きに対する反省から、各地で民俗行事が復活し、歴史や民話に対する人々の関心も急速に深ま
っていった。このブームのなかで民話はテレビや漫画などにも取りあげられて、愛好されている。

民話、伝説、昔話——私たちがよく耳にすることはただけれども、民話とは何か。伝説とはどちらが
うのか。初めにこのようなことを少し考えてみたいと思う。

一般に民衆の間で語り伝えられている説話、つまり民間説話をよくみてみると、その中には型式の
定まった話がある。例えば、「昔々、ある所に、おじいさんとおばあさんが……」で始まり、「……め
でたしめでたし」と結ぶような話である。それらは、特定の時も場所も人物も指定せず、日本のどこ
の土地に伝えられても話されうる内容で、民俗学ではこのような民話を昔話むかしばなしとよんでいる。一方、民
話の中には、この場所ですごうという名の人物が、こんなことを行ったというように、昔話とは逆に、話
す型式は定まっていなくても、内容となる時や所や人物が限定された説話がある。これを伝説と
よんでいる。一般に、昔話では話者は「……だったとき（……だったと言うことだ）」と自らその内
容を信じているわけでもないのに対して、伝説の方ではその伝え手は、内容をあくまで信じていると
いうような差も指摘される。こうして、昔話はやがて文学化してゆくし、伝説は民間の歴史として信

じられてゆくことになるとも言われる。もちろん、昔話と伝説の境はそれほど厳然とした一線で画されるものではなく、昔話化した伝説や、伝説化した昔話も多く残っているが、本書ではそれらを総称した意味で、「ながたの民話」という名称を採った。

これらの説話をわたくしたちの祖先が信じて伝えてきたことは事実であるが、当然、その内容はそのまま史実とは言えない。この点を充分理解して読んでいただきたいと思う。

長田区は神戸市九区のうち、最も早くから都市化の進んだ地域であり、人口密度も最も高い。そこで、ふるさと感覚も郷土意識もうすいのではないかと思われるのだが、この長田区内にどのような民話が伝わっているのか。区の広報相談課の依頼で区内の民話を採集したのは、昭和五十五、五十六年であった。

調査に当っては近世以来の地誌類による予備調査のうえ、近世区内にあった七つの集落ごとに調査担当者を決めて、聞き取り調査を実施した。その担当者・話者は別記のとおりであり、採集された民話は、合計百話にのぼった。本書では、それらの成果をもとに、中学生にも読めて、ふるさと長田を考えるうえで有意義なものを選び収録した。

最後に、調査にご協力下さった話者の方々や楽しい絵を描いて下さった丘あつし先生に心から感謝するとともに、この調査および本書の企画・編集に際して区役所広報相談課の方々からかけがえのない援助を頂いたことを銘記して、まえがきにかえたいと思う。

昭和五十八年三月

田 辺 眞 人

もくじ

発行にあたって

まえがき

絵 地 図

長田のあゆみ

高取山と神撫山

一、高取山の由来(旧西代村)

二、神 撫 山(旧西代村)

三、天 狗 岩(高取山町・旧西代村)

神功皇后伝説と長田神社

一、長 楽 の 浜(旧野田村)

二、御船の森の黄金の船(御船通一丁目・旧長田村)

三、長田の里と鶏の宮(長田町三丁目・旧長田村)

四、天 神 山(長田天神町・旧長田村)

五、七度半の使い(旧池田村)

六、長田神社の青鬼の面(旧西尻池村)

七、駒ヶ林の由来(旧駒ヶ林村)

八、射場 八幡宮 (東尻池町一丁目・旧東尻池村)

九、野 田 村 (旧野田村)

行基と蓮の池

一、蓮池のはじめ (蓮池町・旧池田村)

二、蓮の宮の丑ノ刻詣り (旧池田村)

三、雨乞いに使った卒塔婆 (旧西代村)

四、明 泉 寺 (明泉寺町二丁目・旧長田村)

五、真 野 山 (旧東尻池村)

菅原道真の話

一、匂の梅と真野の里 (東尻池町一丁目、荇藻通三丁目、梅ヶ香町・旧東尻池村)

二、真野の継橋 (東尻池町二丁目・旧東尻池村)

源平合戦と長田

源 平 合 戦

一、失敗した人柱あつめ (旧西代村)

二、忠度の胴塚 (野田町八丁目・旧野田村)

三、腕 塚 (駒ヶ林町四丁目・旧駒ヶ林村)

四、駒止めの石 (駒ヶ林町三丁目・旧駒ヶ林村)

五、義経の力団子（明泉寺町二丁目・旧長田村）……………

六、盛俊卿の陣（旧長田村）……………

七、源平勇士の碑（五番町八丁目・旧長田村）……………

足利尊氏と宝満寺……………

一、宝満寺の縁起（東尻池町二丁目・旧東尻池村）……………

二、宝満寺と足利尊氏（東尻池町二丁目・旧東尻池村）……………

三、御蔵通のいわれ（旧東尻池村）……………

社寺の伝説……………

一、房王寺（房王寺町・旧長田村）……………

二、常福寺の持ち上げ地蔵（大谷町三丁目・旧西代村）……………

三、粉寺の観音様（旧野田村）……………

四、高福寺（西尻池町四丁目・旧西尻池村）……………

五、妙楽寺（池田寺町・旧池田村）……………

六、駒ヶ林神社（駒ヶ林町三丁目・旧駒ヶ林村）……………

七、長福寺（長田町四丁目・旧長田村）……………

八、長田の薬師（西山町一丁目・旧長田村）……………

九、鬼ヶ平と鹿松峠（旧西代村）……………

十、満福寺（海運町四丁目・旧野田村）

けものたちの話

けものたちがいた頃の池田付近（旧池田村）

一、かんのん山のきつね（東丸山町三丁目・旧長田村）

二、きつねのいたずら（長田町三丁目・旧長田村）

三、西尻池のきつね（西尻池町四丁目・旧西尻池村）

四、苧藻川河口のきつね塚（苧藻通七丁目・旧西尻池村）

五、きつねに会った話（旧西尻池村）

六、双子池の河童（海運町二・三丁目、本庄町二・三丁目・旧野田村）

七、高神滝の大蛇（旧西代村）

八、蛇持の池（旧池田村）

九、五位ノ池のサギ（五位ノ池町・旧西代村）

十、駒ヶ林の海坊主（旧駒ヶ林村）

池や川にまつわる話

池のたくさんあった池田村（旧池田村）

一、東尻池村のいわれ（旧東尻池村）

二、七つ井戸（旧西代村）

三、水 笠 川 (旧西尻池村)

石にまつわる話

一、長田の夜泣き石 (長田町三丁目・旧長田村)

二、六字名号石 (六地藏) (駒ヶ林町一丁目・旧駒ヶ林村)

三、大阪城の石 (旧駒ヶ林村)

四、西代のチリンさん (旧西代村)

木にまつわる話

一、西代村の楠さん (西代通二丁目・旧西代村)

二、柳 の 木 (旧駒ヶ林村)

三、源 氏 松 (駒ヶ林町二丁目・旧駒ヶ林村)

四、盗 人 松 (旧野田村)

五、伏拝みの松 (山下町四丁目・旧西代村)

橋にまつわる話

一、淀の継ぎ橋 (駒ヶ林町一丁目・旧駒ヶ林村)

二、八雲橋の欄干 (長田町三丁目・旧長田村)

三、滝 見 橋 (明泉寺町三丁目、長田天神町五・六丁目・旧長田村)

かくれ里

一、火吹き竹（堀切町・旧長田村）……………

二、小屋の谷（旧西代村）……………

三、長者町（高取山町・旧西代村）……………

昔の行事……………

一、野施行（旧野田村、西尻池村、池田村）……………

二、常福寺のつきりさん（大谷町三丁目・旧西代村）……………

三、わんない（旧西尻池村）……………

四、亥の子（旧西尻池村）……………

五、いれあげ（旧西尻池村）……………

六、駒ケ林八幡宮の祭（駒ケ林町三丁目・旧駒ケ林村）……………

七、ザコネ堂（駒ケ林町五丁目・旧駒ケ林村）……………

八、葬式のあとで（旧駒ケ林村）……………

九、駒ケ林に伝わる昔の風習（旧駒ケ林村）……………

十、駒ケ林なまり（旧駒ケ林村）……………

十一、左義長（旧駒ケ林村）……………

史話・昔話……………

一、行商の人々（長田区南部・旧西尻池村）……………

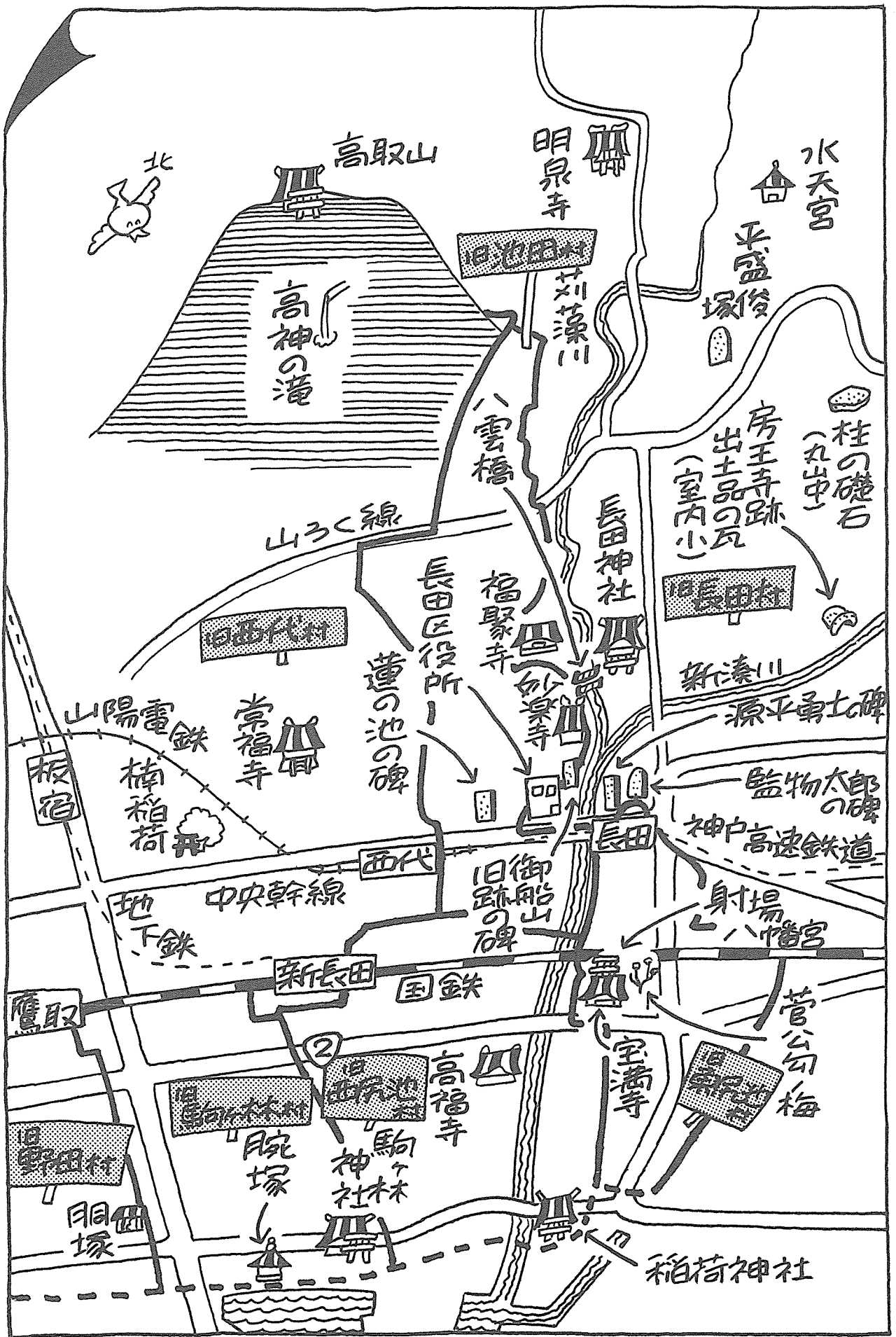
二、青山幸利公報謝碑（旧東尻池村）	153
三、水争い（旧東尻池村）	153
四、吉田新田（旧東尻池村）	155
五、金平町のいわれ（旧東尻池村）	155
六、もりぞう（旧西尻池村）	156

長田神社の神幸祭(26) / 団子祭り・八朔祭り(36) / 追儺式(41) / 甘酒祭り(45) / 茅の輪神事(58) / 駒ヶ林の獅子舞(71) / 念仏踊り(78) / 子供の遊び(81) / 数珠くり(100) / 高取神社の獅子舞(120) / 雨乞い(123)	
---	--

話者および地区別調査担当者	159
参考文献抄	160

表紙絵・挿し絵 丘あつし





長田のあゆみ

長田区は神戸市の中央部西よりにあつて、東は兵庫区、北は北区、西は須磨区に囲まれ、東西約三キロメートル、南北約六キロメートル。十五万人の人口を有している。

先史時代

旧石器が会下山^{えげやま}で、縄文時代の遺物が名倉町^{なぐら}で採集されているが、弥生時代には荻藻川^{かろも}流域の沖積平野に水稻耕作による農耕社会が展開しており、長田神社境内など各地で弥生式土器が採集されている。『日本書紀』には神功皇后^{じんくう}による長田神社創建の説話があり、すでに「長田ノ国」という地名が明記されているが、川沿いに長く大きな水田が続いていたのであろう。

やがて集落も拡大し、各地に豪族が成長する。三世紀末以来、彼らは古墳を築き始めた。荻藻通七丁目付近にあつた中期古墳・念仏山古墳も、荻藻川口や池田の山手・大塚町などにあつた後期古墳も、今では消滅してしまった。

古代

このような古墳を築いた豪族の長に姓^{なば}とよぶ称号を与え、氏族単位に支配圏を拡大した大和国家は、やがて七世紀になると天皇中心の集権体制を築くことになる。六四五年以降の大化改新と律令の制定

によつて中央集権国家が実現するが、律令制の下では、この地は当初、雄伴郡とよばれていた。平安初期にはこのあたりは摂津国八部郡と改称される。この八部郡は旧生田川から須磨に至る摂津西端の郡で、郡内には生田、神戸、宇治、八部、長田の諸郷があつた。八部郡の郡役所は会下山西麓の室内地方にあつた。当時その近くにあつた房王寺という寺も地名に残っている。当時の瓦が室内小学校に、建物の柱の礎石が丸山中学校に残されている。

律令国家が実施した班田收授にともなう、条里制（一町四角の碁盤目状の土地制度）の地割りのあとも、区域の道路などに残り、区内には一ノ坪く六ノ坪、九ノ坪、十ノ坪など条里制の名残りの字名も数多い。

しかし、奈良時代には公地公民制も動揺する。すでに天平十九年（七四七年）に、会下山は宇奈吾岳の名で法隆寺の所領として記されており、初期の荘園が出現する。

平安時代には区の中央部に長田の庄、東部に兵庫中之庄、西部に兵庫下之庄などの荘園が経営されていた。当時、都と大宰府を結んだ山陽道は、中道通から長田交差点に出、大道通を西へと区内を横断していたが、『平家物語』には「湊河・苅藻川をも打ち渡り、蓮の池をば馬手（右）に見て駒ヶ林を弓手（左）になし、板屋ど・須磨をも打ち過ぎて」と、その道沿いの地名が描かれている。

律令政治がゆきづまり、荘園制が発展し、やがて地方から武士が成長する。

平安末期になると、武家として初めて政権を握った平清盛は、治承四年（一一八〇年）六月二日に福原（兵庫区平野の南方）遷都を断行。その後、更に会下山の西方に内裏を置き山陽道を朱雀大路とする

西向きの和^わ田^だ京^{きやう}という新都造営を計画した。ただ、その年の内に東国で源氏が相次いで挙兵したため、清盛は新都造営を断念し、十一月に京へ都をかえし、長田地方が日本の都となる計画は挫折した。

中世

治承五年（一一八一年）、清盛は死に、北陸からは源義仲が京に迫ってきた。こうして、ついに寿永二年（一一八三年）平氏は西国へと都落ちした。しかし、上京した義仲は京の貴族社会と対立し、後白河院は鎌倉の源頼朝に義仲追討を命じた。そこで頼朝は弟の範頼、義経を京に上らせた。この源氏の分裂の中で平家は都の奪回をねらって、再度福原に上陸し、東の生田の森と西の一の谷に砦を築いて、神戸を上京のための拠点とした。一方、寿永三年（一一八四年）義仲を破った義経たちは、余勢をかって平家が陣を敷く神戸に向かった。範頼軍は山陽道沿いに生田の森を、義経軍は丹波から加古川筋を迂回して西から一の谷を攻撃することとし、二月七日を戦いの日と決めた。この一の谷の戦いの際、義経自身は三木付近で自分の本隊と分れ、鴨越の山道を通って兵庫の背後を衝こうとした。義経は、鴨越道から、古明泉寺に陣取っていた平盛俊の陣へとかけおりて長田へ出、平家の内部をかく乱、平家は混乱して、再度西国へと逃れ去った。

鎌倉時代には、区域の開発もますます進み、長田や駒ヶ林に次いで、貞応元年（一二二二年）の長田神社の文書に、中村（西尻池）・尻池村（東尻池）・野田村などの村名も登場する。

山陽道に沿い、兵庫の湊に近い長田地方は中世しばしば戦乱に巻きこまれた。

建武三年（一三三六年）五月二十四日の湊川の戦いに際しても、会下山に陣取った楠木正成に対して、足利方の陸兵は須磨から山陽道沿いのコースと、高取山の北の鹿松峠越えのコースから攻めかかった。この時、楠木軍の退路を断つため、鶴越道には足利方についた長田神社の社人が備えを固めていた。

室町時代になると、明との勘合貿易で兵庫の津は栄えた。しかし応仁の乱に巻きこまれて兵庫は戦火にかかったが、長田地方もそのあおりを受けたであろう。戦国時代に畿内・東海を征した織田信長は、中国の毛利に対する拠点として花熊城を築かせた。しかし逆に花熊城が毛利と結んだため、天正六年（一五七八年）十一月二十八日、織田信長は花熊城を攻め、この時の兵庫から須磨までの地が焼き払われたという。

その頃までには、区域には海辺に東から東尻池、西尻池、駒ヶ林、野田の村々、長田神社の一带に長田、その西の山麓に池田、西代の村々ができていた。

近 世

信長を継いで天下を統一した豊臣秀吉は、文禄三年（一五九四年）にこれらの村々に検地を実施したが、当時、この地方は豊臣家の直轄領であった。

元和元年（一六一五年）、大坂夏の陣で豊臣家が滅亡すると、この地方は徳川氏の支配下に入り、やがて長田、東尻池、西尻池、駒ヶ林の四カ村は尼崎藩主戸田氏鉄に与えられ、池田村と野田村は旗本

村々所領変遷表

(『ながたの歴史』より)

	元和3年(1617) 摂津一國高御改帳	正保3年(1646) 正保郷帳	享保20年(1735) 摂津國高調	明治元年(1868) 旧高日領取調帳
長田村	808石12 蔵入(村上孫左衛門預り)	808石12 青山大膳知行	852石612 本多中務大輔知行	852石617 土井大炊頭領
池田村	316石93 蒔田権介知行	316石92 蒔田数馬知行	320石194 蒔田和泉知行	323石6981 蒔田国之助領
東尻池村	624石77 蔵入(片桐主膳預り)	626石579 新田13石149 青山大膳知行	661石734 蔵入	706石156 兵庫県
西尻池村	227石86 蔵入(村上孫左衛門預り) 545石4 杉原伯耆知行	227石86 青山大膳知行 545石35 蔵入(中村奎右衛門預り)	228石089 63石181 蔵入 480石975 鈴木兵九郎知行	294石054 兵庫県 480石975 鈴木正右衛門領
駒ヶ林村	398石103 蔵入(村上孫左衛門預り) 200石55 佐久間河内知行	398石103 青山大膳知行 200石55 蔵入(五味備前知行)	410石378 197石025 蔵入	608石339 兵庫県
野田村	372石099 長谷川式部知行	372石097 長谷川式部知行	372石097 長谷川喜内知行	372石907 長谷川為次郎領
西代村	454石65 杉原伯耆知行	454石65 蔵入(中村奎右衛門預り)	455石471 蔵入	455石826 兵庫県

領となった。西尻池村、駒ヶ林村、西代村の一部は、天領でもあった。

やがて寛永十二年(一六三五年)、戸田氏に代つて青山氏が尼崎藩主となるが、その善政に對して、農民たちが建てた報恩碑が東尻池の宝満寺や駒ヶ林の海泉寺に残っている。

正徳元年(一七一一年)、松平(桜井)氏が尼崎藩主となった時、区域の尼崎領の多くは天領として収公され、幕府の直轄領になつて、幕末に至っている。

中世以降、兵庫の町が発展すると、交通路の道筋も変わり、江戸時代の西国街道は兵庫の町中を通つて柳原から旧山陽電車のルートを通り、西代から大田町の交差点へと松並木が伸びており、西代村の西には一里塚もあった。

人々は、春には駒ヶ林の左義長や長田の

鬼追いなどを行つて、その年の幸福を祈り、秋には村々の鎮守に感謝の祭を行つた。干ばつの夏には高取山上で雨乞いをして農業にいそしんでいた。村ごとに檀那寺があつて村人の信仰生活を左右していた。村同士の紛争も起こつたが、正徳年間には中一里山の入会権をめぐつて長田・池田・東尻池・西尻池の四カ村が白川村と争つている。また、東尻池村は東方の和田山をめぐつて同じ頃、兵庫津の人々と争つている。

海辺の開拓も進み、天保十年（一八三九年）には、西宮の吉田喜右衛門が和田岬一帯を開き、六十石余の吉田新田を完成させた。

幕末には、高取山は居留地の外国人からコール・ヒルと呼ばれていた。それは山中から質の悪い石炭が出たためで、当時、勝海舟によつて設立された神戸海軍操練所は、船の燃料として、ここの亜炭を使おうとしたという。

近代以降

大政奉還の後、明治元年（一八六八年）五月、近在の天領は新政府の下に入つて兵庫県とされ、初代知事に伊藤博文が就任。他の村々は明治四年（一八七一年）の廃藩置県後、兵庫県に吸収された。やがて複雑な地方制度の変革ののち、明治二十二年（一八八九年）に市制、町村制が施行されると、長田・東尻池・西尻池・駒ヶ林・野田などは東方の今和田新田・御崎・吉田新田などと共に一村を形成することとなった。その内の大きな村、駒ヶ林村の林と長田村の田をとつて林田村を名乗つた。こ

明治時代の村勢一覧 (明治16年1月調)

村名	戸数	人口	物産
長田村	戸 368	人 1392	米穀・菜種・えんどう
西尻池村	108	466	米穀・菜種・えんどう
東尻池村	105	277	米穀・木綿・西瓜
御崎村	49	133	米穀・えんどう・甘藷
吉田新田	6	11	麦・西瓜・甘藷・大根
今和田新田	35	82	麦・甘藷
駒ヶ林村	599	1273	米穀・えんどう 綿じゆうたん
野田村	63	242	米穀・えんどう
池田村	42	162	米穀・菜種・えんどう
西代村	49	205	米穀・えんどう

(『ながたの歴史』より)

の時、池田・西代は西方の西須磨・東須磨・大手・板宿・妙法寺・車^{くるま}・白川・多井畑^{たいのばた}の村々とともに須磨村を形成している。

同時に誕生した神戸市は、国際港都として発展し、ついに明治二十九年(一八九六年)には林田村および須磨村内池田村の地を合併した。つまりこの時、長田の地は神戸市に編入されたわけである。

近代化の進む中で、明治二十一年(一八八八年)十一月、私鉄山陽電鉄の兵庫―明石間が開通。翌年には兵庫―神戸間も結ばれ、その直前に完成していた国鉄東海道線に直結された。また、長田の地にも近代的な風景が現われ始め、明治二十八年(一八九五年)には東尻池の東部に鐘紡兵庫工場が建設され、明治三十二年(一八九九年)になると兵庫運河が開通して、駒ヶ林と兵庫港を直結している。一方、旧湊川の改修も明治二十九年(一八九六年)から五年がかりで行われ、会下山の下をトンネルでくぐって東の湊川の水は長田の荻藻川に流しこまれ、明治三十四年(一九〇一年)新湊川が完成した。

日清・日露戦争をへて、産業革命の進行する中で長田の人々にとって交通の便を特に進めたのが、明治四十三年の兵庫電気軌道「兵電^{ひょうでん}」の開通である。同社は、後に宇治川電気に吸収されて「宇治電^{うじでん}」と呼ばれ、やがて独立して山陽電気鉄道となるが、区内に長田・西代などの駅を設けて、市民の生活

に大きな役割を演じてきた。

神戸市はその後も発展を続け、大正九年（一九二〇年）には須磨町を併合し、昭和六年（一九三一年）には市内に区制を実施した。この時、長田の地には林田区が置かれたが、当時の区民は一八八、二〇〇人であった。

やがて神戸市は昭和十六年（一九四一年）に人口百万を突破するが、同時に昭和十三年（一九三八年）の阪神大水害や昭和二十年（一九四五年）の第二次世界大戦中の米軍の空襲など、悲惨な歴史も体験した。

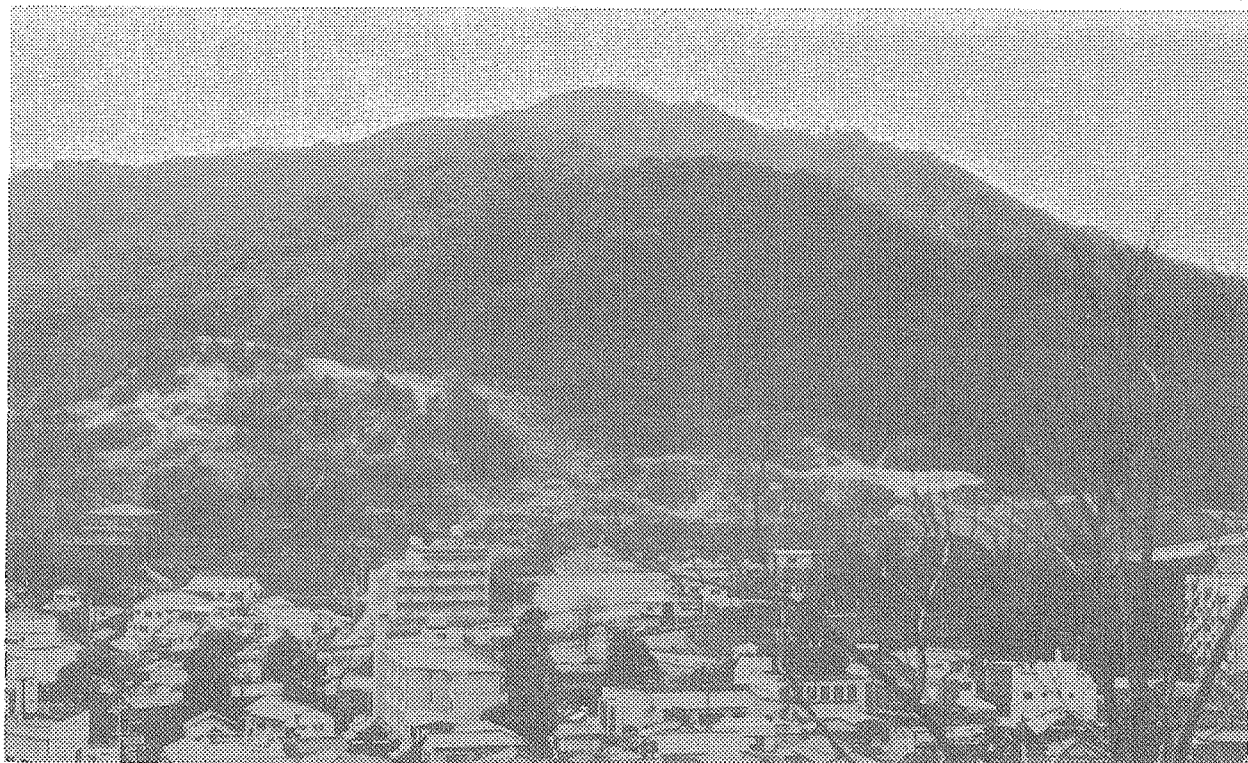
空襲のさなか、昭和二十年五月に区制の改訂が行われ、林田区は長田区と改称されたが、昭和十九年（一九四四年）二月の区の人口、二〇九、四四六人に対して、敗戦直後の二十年十一月には区の人口は一一二、九九二人と半減するありさまであった。

戦後、長田も大きく復興し、ケミカルシューズの生産を中心に経済的に発展した。北部の丸山地区には宅地開発も進んだ。古代以来の港である駒ヶ林には長田港が整備された。

しかし同時に駒ヶ林の松林の浜も姿を消し、高取山の深い緑も失われつつあり、われわれをとりまく環境の問題も無視することはできない。これからも明るく豊かな長田のまちづくりを進めていくためにも、長田の歴史を今一度ふり返りたいものである。

長田区の通史に関しては、本書の姉妹編落合重信ほか著『ながたの歴史』（長田区役所刊）を参照して下さい。

高取山と神撫山



高取山（神撫山）

一、高取山の由来（旧西代村）

ずっと昔、ものすごい洪水があつて、長田や須磨のあたりでは、山の頂近くまでがごとごとく水に没したことがあつた。ようやく水がひいたあと、人々が高取山の頂に登ってみると、山の上の大きな松の木に、たくさんの蛸が八本の足をからませていた。

その話を聞いたふもとの人々は、息をはずませて山に登り、松の木から蛸を取って帰った。人々はこの時から、その山を「タコ取り山」と呼ぶようになった。それが後に高取山と書くようになったそうである。

ノート

高取山は古くは鷹取山とも書かれ、多くの鷹がその山に住んでいたことによるともいわれている。海拔三二一メートル、長田で一番高い山である。

尻池しりいけの地方では、この洪水は大地震のため起こった
津波のせいだと伝えている。



二、神 撫 山（旧西代村）

高取山は江戸時代まで、神撫山と呼ばれていた。長田に上陸した神功皇后は、そばにあった大きな石を席にして座わり、憩われた。この時、皇后がたわらの大きな石を撫でられると、その石は急にむくむくと大きな岩になり、ついには高い山になった。神功皇后が撫でて出来たので、この山は神撫山と名付けられたのだという。

ノート

神戸市側のどこからでも遠望できるこの姿の良い山は、古来信仰の対象となった山である。高取山中には数多くの民間信仰的な祠堂があり、長田神社境内には、今でも高取山遙拝所がある。古代の長田の人々が神体として崇拝した山だと落合重信氏は説かれる。

女性である皇后が撫でて大きな山になったというこの説話から、高取山を生殖崇拝に結びつける人もある。

松宿寺
神昌寺



200年前の高取山（『摂津名所図会』より）



三、天 狗

岩（高取山町・旧西代村）

昭和の初め頃、高取^{たかとり}山上の神社の建築工事をして
いた時であった。山中にいくら手をつくして工事を
しても石が崩れて石垣工事の進まない一画があった。
不思議に思っつて崩れた地面を調べてみると、くずれ
た土の中から一つの岩が頭を出していた。それを掘
り出して人々は驚いた。

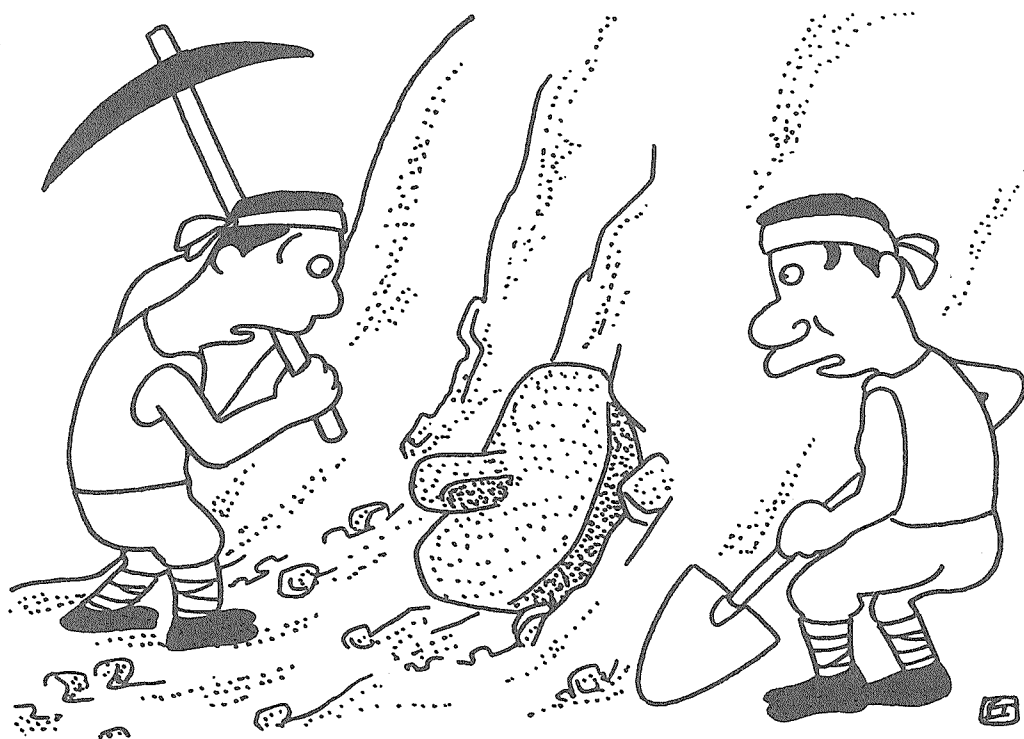
「なんと天狗^{てんぐ}の顔の形をしている。この場所は、
これまでもよく地崩れした所だが、きつとこの岩の
せいだったのだ。」

この岩が掘り出されてからは、そこは山崩れを起
こさなくなったという。

第二次世界大戦中、一人の兵士がある夜、夢を見
た。

岩の上に座わった神様から、

「おまえを必ず生きて帰らせてやろう。」





とお告げを受けたのである。その兵士は何とか無事に帰国できたので、

「あの岩は、一体どこにあるのだろう。」

と夢に出てきた場所を捜していた。ある日、電車の窓から高取山を眺めていた時、突然、

「あれっ、どうもこの山の中にあの岩がありそう
だ。」

という気になり、高取山に登っていった。そして夢に見たものと同じ形の岩を見つけた。それからは毎月参拝しては、この岩を見て安心するそうである。

長田神社の神幸祭

毎年十月十九日、長田神社では神幸祭（神体がみこしに乗御して神殿などに渡御すること）が行われる。長田神社の十五部の氏子地のうちから一部、または数部が順々に当番となって奉仕する。

祭りは猿田彦を先導にして、担ぎ手が千年も万年も長生きできるようにとの願いをこめて「千歳楽じゃ、万歳楽じゃ」と声を合わせ、みこしが氏子地をねり歩く。

猿田彦は、天孫ニニギノミコトが降臨した際に道案内をした神だとされ、この祭りでは、面をあまりにかぶり足元がよく見えるようにした猿田彦が舞いながら進む。この猿田彦にまたいでもらうと、元気で良い子に成長すると信じられているため、子供が路上にズラリと寝て、その上を猿田彦がまたいでお被いをする。



神功皇后伝説と長田神社

一、長 楽 の 浜（旧野田村）

野田の長楽の浜は、昔から砂浜の美しい所として有名であった。

神功皇后が朝鮮侵略からの帰途、この浜に船を着けられた。皇后は無事に帰り着くことができたことを喜ばれて、以後この地を長く楽しむことができるようにと、「長楽」と名付けられたという。



御船山旧跡の碑

二、御船の森の黄金の船

（御船通一丁目・旧長田村）

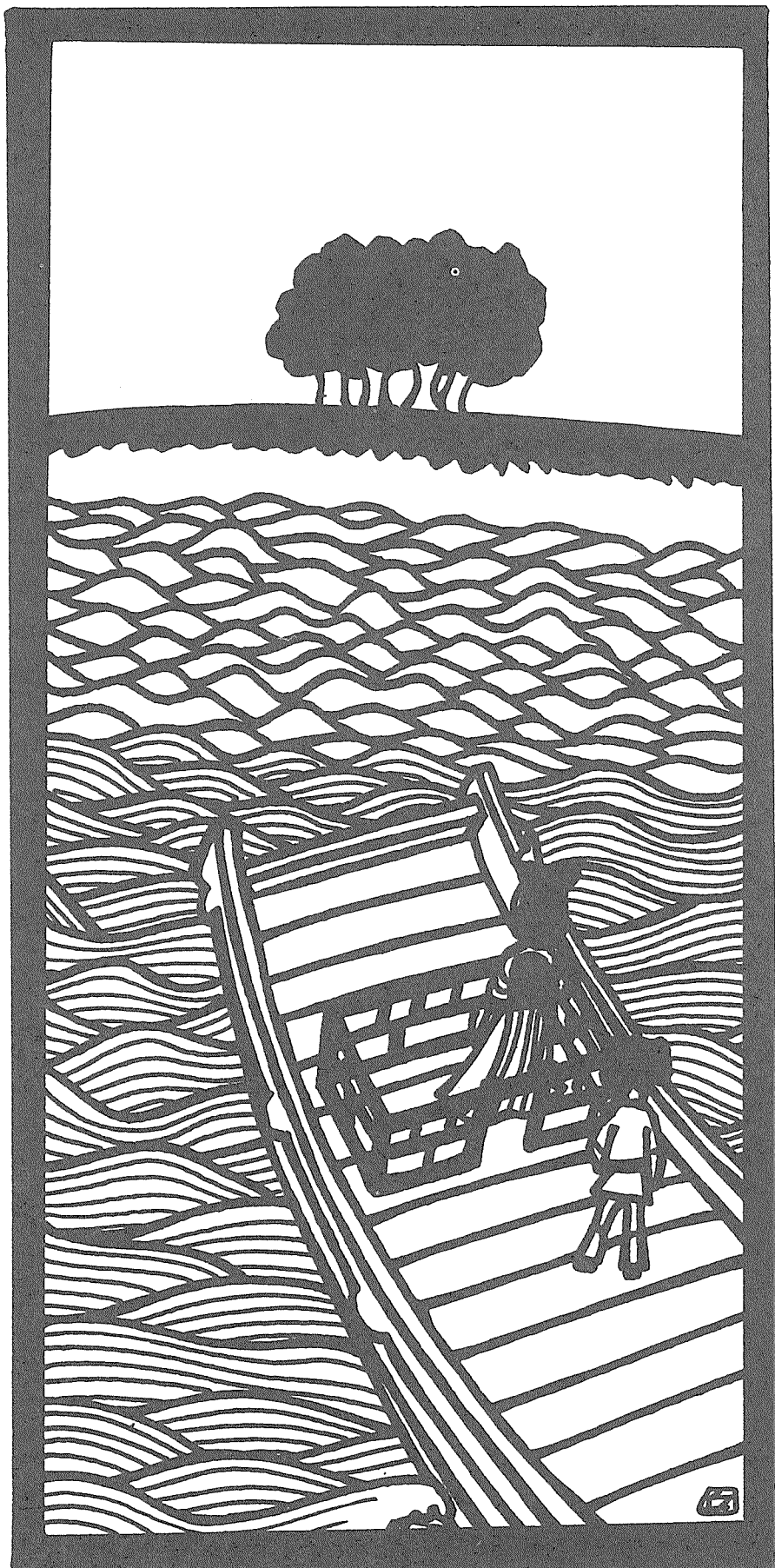
昔、長田の里に、御船の森と呼ぶ小さな森があった。

これは朝鮮への侵略から帰国してきた神功皇后が荻藻川をさかのぼって船をつけた所だとい、その場所に後に皇后の船の船具や黄金の船を地下に埋めた

という。

ノート

御船の森と伝えられる丘は松森とか、船山ともよばれており、今の長田区役所の東方にあり、十三坪（約四十二平方メートル）ほどの長方形の丘だった。市内には何カ所か、このような黄金の宝物理蔵伝説がある。御船通の町名は、この説話にちなんでいる。



三、長田の里と鶏の宮（長田町三丁目・旧長田村）

朝鮮半島への侵略から帰国した神功皇后の船団が九州から瀬戸内海を通って、難波の津へと航海していた。務古の泊を出たあと、大阪湾の海上で突然船がぐるぐると同じところをまわりはじめて、前進しなくなってしまった。そこで務古の泊にひきかえし、占いをするようになった。この時現われた神々の中に事代主の神があり、

「われは、そなたの船を守護してきた神である。われを御心長田の国の鶏鳴のきこえる里に祀れ。そうすれば、今後の船旅も、またその地も守って恵みをたれよう。」

とお告げになった。神功皇后は、山背根子の娘の長媛という女性をつかわして、神を祀らせるために長田の里に送った。しかし長田に来た長媛は、長田のどこに神の社を建てるかよいかがわからなかった。長田の里を歩きまわり、長媛がひとつの森に足をふみ入れたときであった。

「クークー、クー」「コケコツコー」

するどく鶏の鳴き声がきこえてきた。

「あ、ここが神さまのお告げになった土地にちがいない。」

こうしてその森に長媛の建てた社が、今の長田神社の起りだという。

こうして祀られた因縁で、長い間この神社に対して祈願をする人も、お礼参りの人々も、鶏を持参して奉納し、境内に放し飼いにした。昔は、ここの氏子は決して鶏の肉は食べなかつたと伝えられて



長 田 神 社

いる。

また、淡路^{あわじ}の上山村に皮膚病にかかって苦しんでいる千太郎とのおといという若い夫婦がいたが、一生、鳥の肉を絶つと願をかけて長田神社に参った結果、ついには二人の病はいえたという。

一方、兵庫新在家^{しんざいけ}の明石屋喜兵衛^{あかしやきへえ}は、酒に酔い、長田の松林の中で、たわむれて鳥を殺したために、突然重い病気になってしまったという。

この神社の氏子地だった須磨では、ハトのフンを肥料にしてウリを育てていたところ、ハトの形をしたウリが実ったという話がある。

このように、この神社には鳥にまつわる不思議な出来事が伝えられていた。

さて、長田神社には、神功皇后が韓の国から持ち帰り納めた不滅貝^{ふめつがい}という貝があつたが、これは安産のお守りとして女性のあつい信仰を集めるようになった。

また、航海にゆきづまった皇后の手で祀られたため、長田神社は海上の波浪をしずめたり、漁業に関する願いごとに、殊に靈驗があらたかだと信じられてきた。

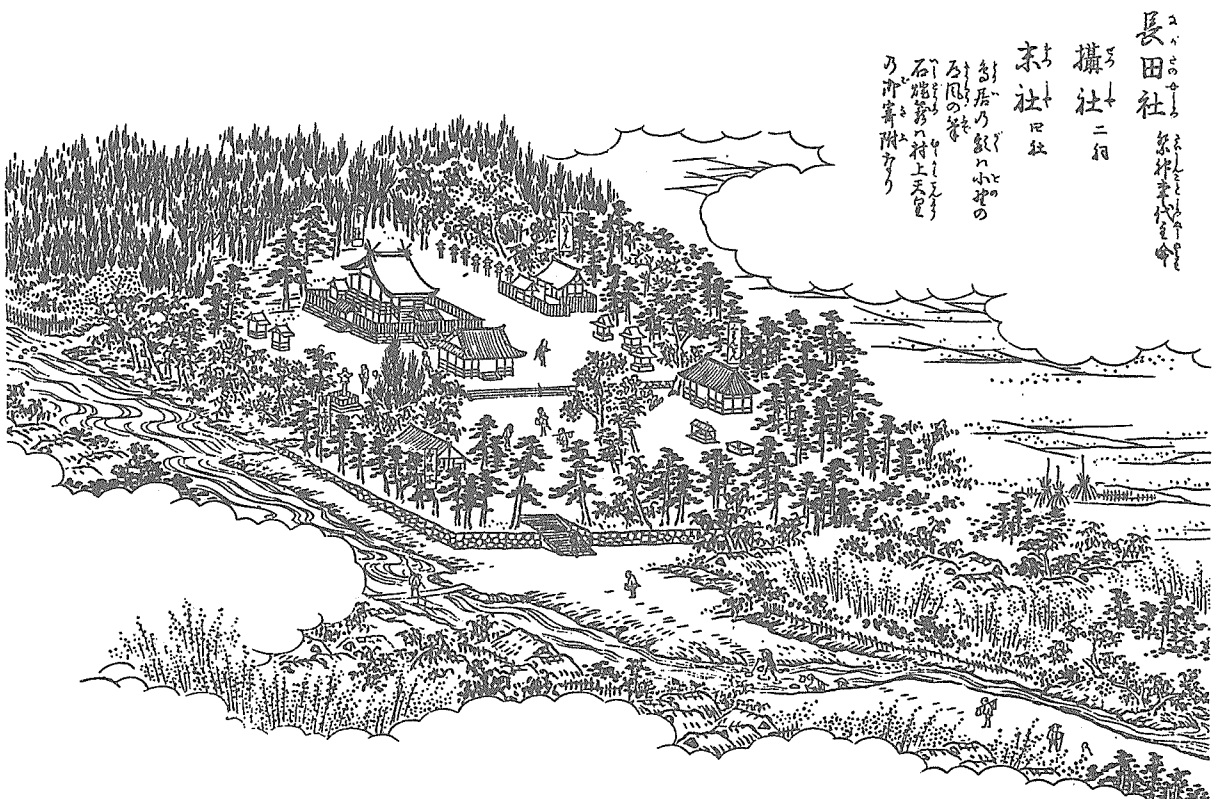
ノート

神功皇后による「御心長田国」への事代主神の創祀は、『日本書紀』にみえる。苧藻川流域に弥生時代から発展した水田のつづく農耕社会が、御心長田国であろう。神功皇后説話は長田にも数多い。

四、天神山（長田天神町・旧長田村）

神功皇后の手で長田神社が創建された時、神様が最初に長田の里に降りたたれたのは、長田の里から苧藻川をさかのぼった上流の天神山の地だという。

神聖な霧困気の天神山に降りられた神は、そこが



200年前の長田神社（『播州名所巡覧図絵』より）



宮 天 水

人里離れたさみしい土地であるため、ふもとのにぎわいをご覧になり、やがてご自分も山を下りてしまわれた。それが長田神社の土地だという。

ノート

この説話からすると、古代には天神山が長田神社の神体山だったのではないかと考えられるが、古代神祭りを行う場所を意味するカンナビ、カンナデ（神撫）山、つまり高取山との関係が興味深い。

長田天神町五丁目には、今も水天宮があり、ここには安徳天皇、建礼門院、二位ノ尼が祀られている。この社は大正三年に建てられた。それまでは名倉小学校のあたりに名倉池という池があり、その南に水天宮の祠があったという。

五、七度半の使い（旧池田村）

明治維新の頃まで、祭りが始まる前に、まず長田神社の宮もとの村、長田村からの使者は池田村へ行き、

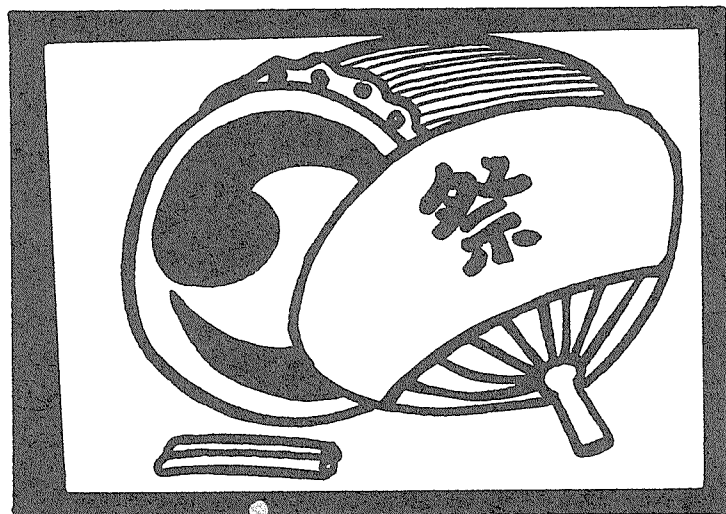
「祭りを始めますので、どうぞいらして下さい。」
と挨拶した。それでも池田村の者は誰も行かない。

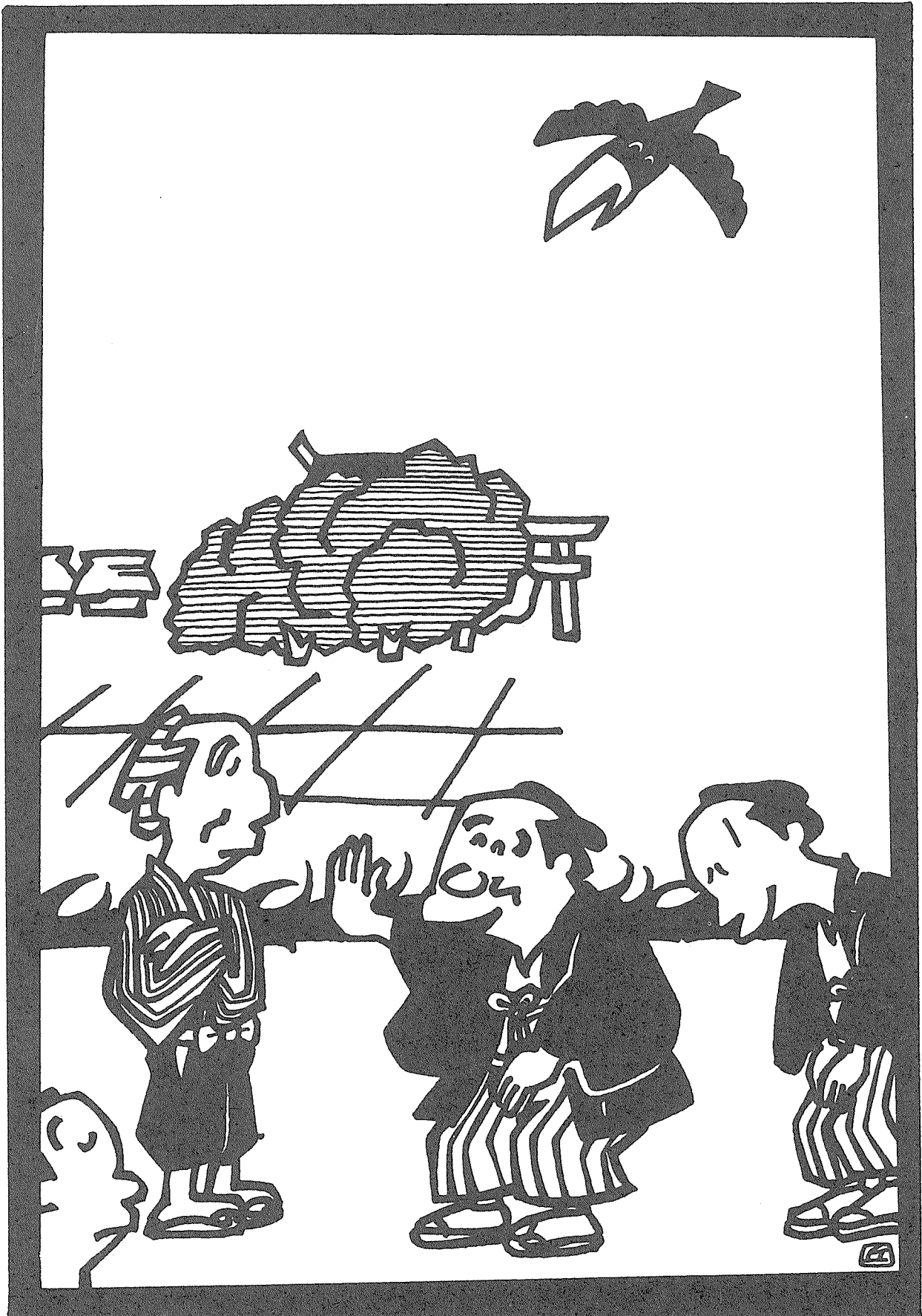
すると、また迎えがやってくる。それでもまだ行かない。これを七度繰り返して、やっと八度目に池田村の人々は長田村からの使者を村境まで出迎えて、一緒に長田神社へ向かった。こうして、池田村の村人が到着して、やっと祭りが始まったという。

これを七度半の使いという。



旧池田村は、今は閑静な住宅街が多く、昔からさほど大きな村ではなくて、にぎやかで大きな旧長田村とは比べることも出来ないが、池田村は長田村の親郷おやごうだったという話もあり、池田村ではこの七度半の使いのしきたりが、池田が長田の親郷だった証拠だと伝えられている。





六、長田神社の青鬼の面（旧西尻池村）

明治の初め頃、西尻池の伝福寺にあった池の底から、青銅の鬼の面が見つかった。この鬼の面は、きれいに磨かれて、長田神社に奉納されたという。

団子祭り・八朔祭り（旧長田村）

長田神社の祈禱祭は春と秋に行われる。もとは長田村の農業について、春は五穀豊穰、秋は豊作感謝の祈念として行われていた。

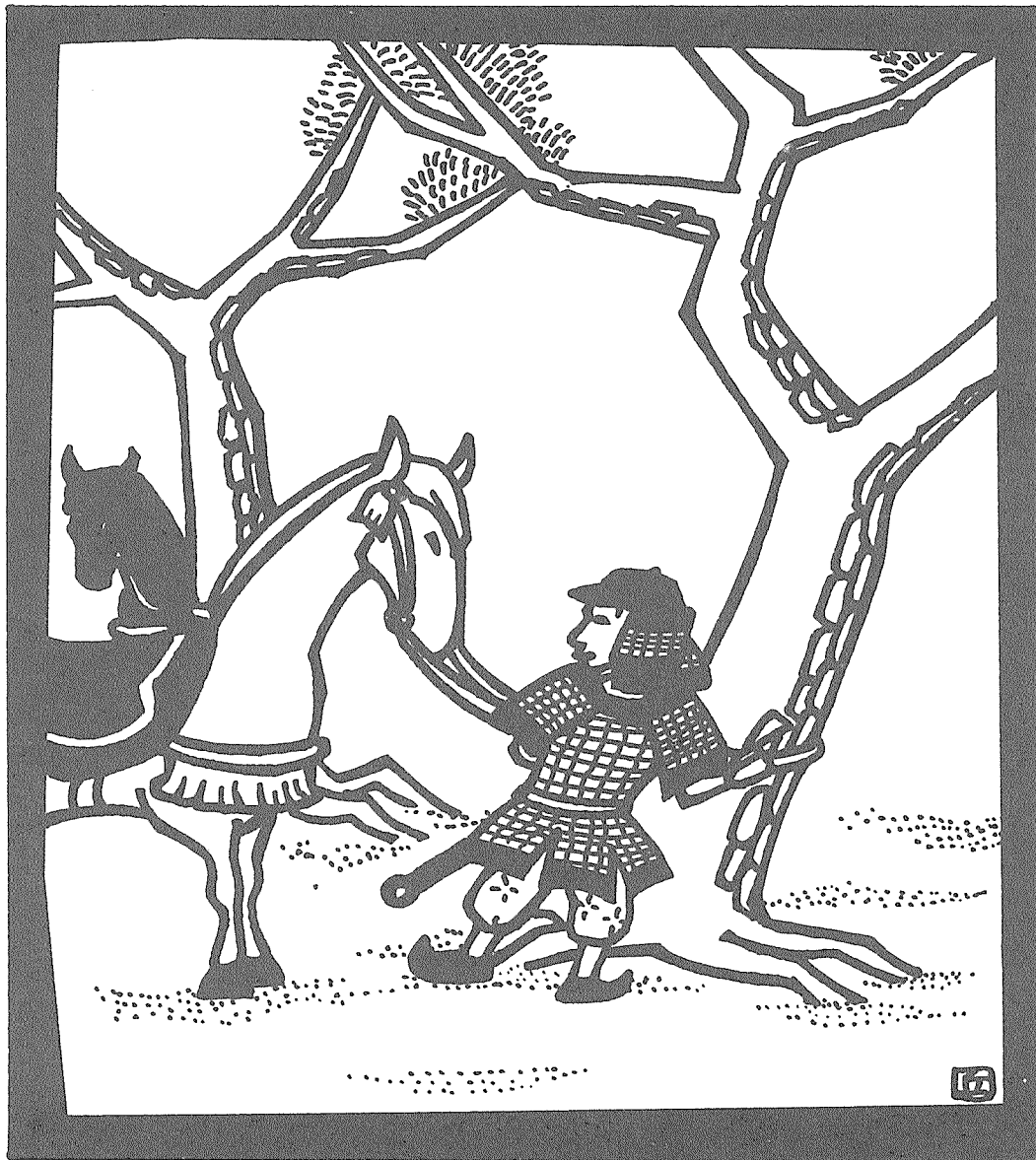
二月二十一日に行われる春の祈禱祭は、米の粉で作った団子を奉納していたところから、団子祭りとも呼ばれている。

秋の祈禱祭は九月の日曜日に行われ、八朔祭りとも呼ばれているから、もとは旧暦八月初めの行事だったのだろう。

七、駒ヶ林の由来（旧駒ヶ林村）

朝鮮半島から帰国した神功皇后の船団は、長田の西の浜に船を着けた。これにちなんで、以後、三韓の国々から貢ぎ物を持って日本に帰る使節は、必ずこの港で上陸するようになったといい、そこからこの地を高麗の泊とよぶようになった。そして、神功皇后の朝鮮への出兵後に始まった高麗との貿易の際に、多数の船がここに碇泊して、その柱がまるで林のように見えたことから、「こまがばやし」の地名が起こつたという。

他の説では、ここでは高麗の



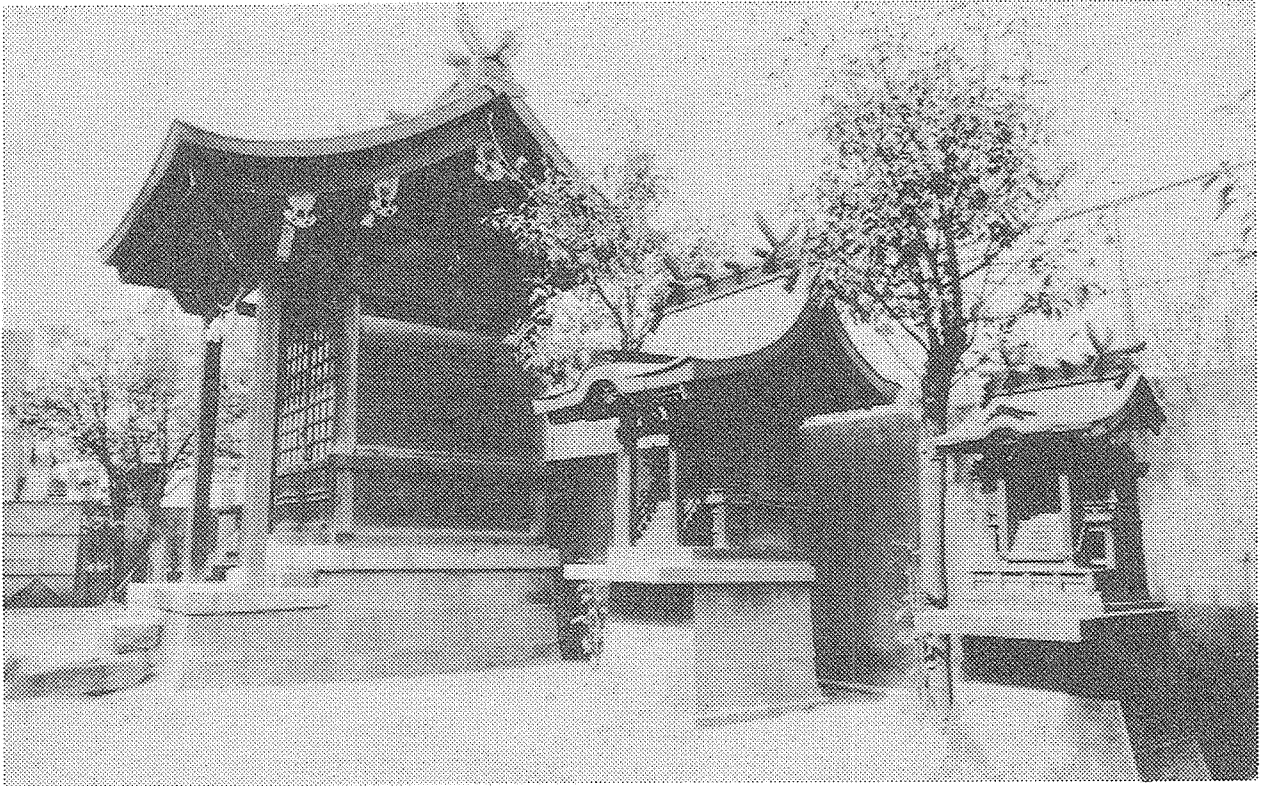
船の検問を行って、貿易にふさわしくない船を上陸させないようにしていたため、「こまをかえす」「こまがえし」「こまがばやし」となったともいう。

また、源平争乱の時に平氏が多くの馬をこの地域の松林にとめたことから、駒ケ林と名付けられたという説もある。

朝鮮半島からの貢船がしきりに来日した時代には、唯一の船泊所であり、遊女が多く住んでいたことから、女郎隣にようろうがわらの地名も残っているという。その他、大水の子、小水の子、出水の子などの地名が残っているのは、いずれも水夫が居住していたためだともいう。

ノート

駒ケ林の地名は、『平家物語』にも見え、平安末期にまでさかのぼれる古い地名で、説話ではいずれも高麗まが林の「高麗」が「小馬」↓「駒」と転化したといわれる。古くからここは明石あかしの林と兄弟村ともいわれるが、ともに林は早洲はやすの訛なまり、潮の流れの速い浜辺が語源だと思われる。



射場八幡宮

八、射場八幡宮

(東尻池町一丁目・旧東尻池村)

東尻池の八幡神社を射場八幡宮という。

さて、神功皇后が朝鮮半島に出兵しようとした時、ここで弓初めの式をあげたと伝えられている。そのため、大同二年（八〇七年）に宇佐八幡宮を勧請して、この地に神社を建て、名を射場八幡と名付けたという。

ノート

射場八幡の六月八日の祭では、屋台芝居が盛んで、地元の人々も義太夫や浄瑠璃を演じていた。

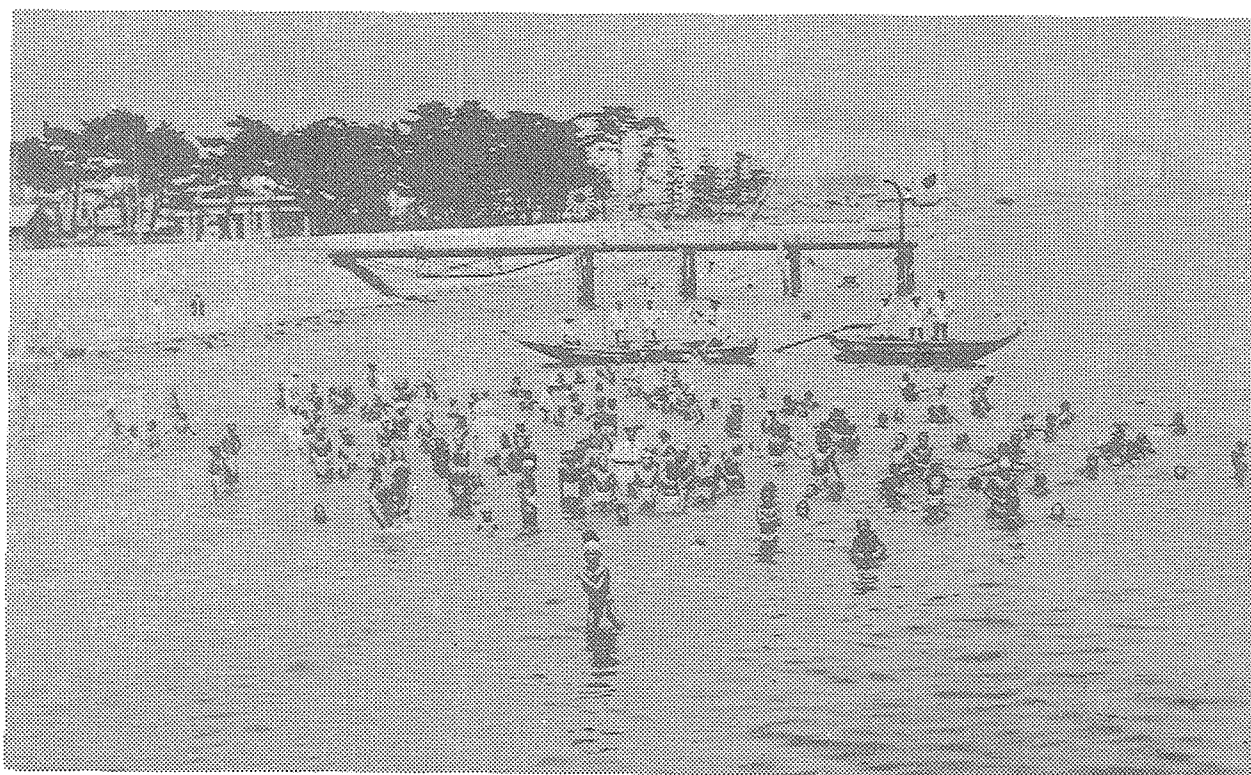
九、野田村（旧野田村）

野田は真野田の略称だという。この地の海岸を長楽の浜と呼んでいるが、長田の祭礼には、菅で作った三千三百三十三体の人形をこの浜で打ち払う儀式が古くから行われていて、神功皇后が朝鮮へ出兵した時の残酷な戦さを表わしたものだといわれていた。

ノート

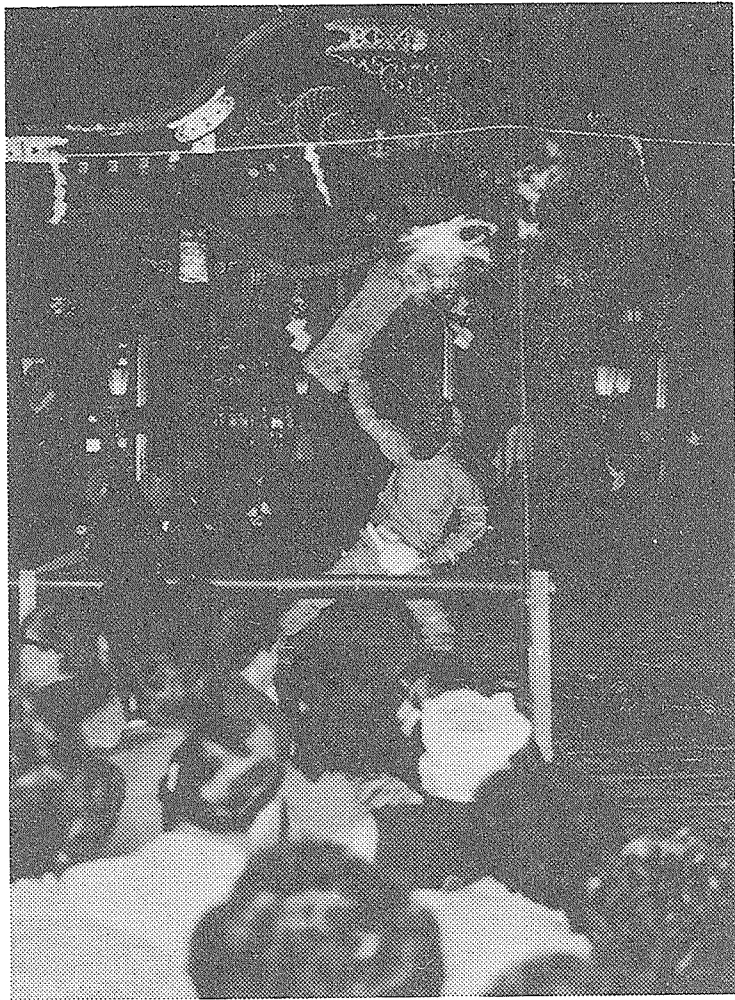
長楽の浜には古来、祭礼に際して長田神社の神幸が続けられてきた。

海辺で人形を焼くのは、古代の厄や病を防ぐための祓いの行事ではないかと思われる。人形に不幸や病をのりうつらせて、焼き払った行事に、神功皇后説話が結びついたものであろう。



大正8年の野田の浜

追 儺 式



追儺とは、悪鬼を追い払って来たるべき年の幸福と健康を願う年中行事で、通称、おにおい、おにやらいともいう。現在各家庭で行われている豆まきも同じ行事である。

室町時代から薬師堂の行事として続けられ、明治になって長田神社で受け継がれた、この追儺式の鬼は、神々の使いと伝えられ、神々に代って災いを追い払い、良い年を迎えることを祈って踊るものだ



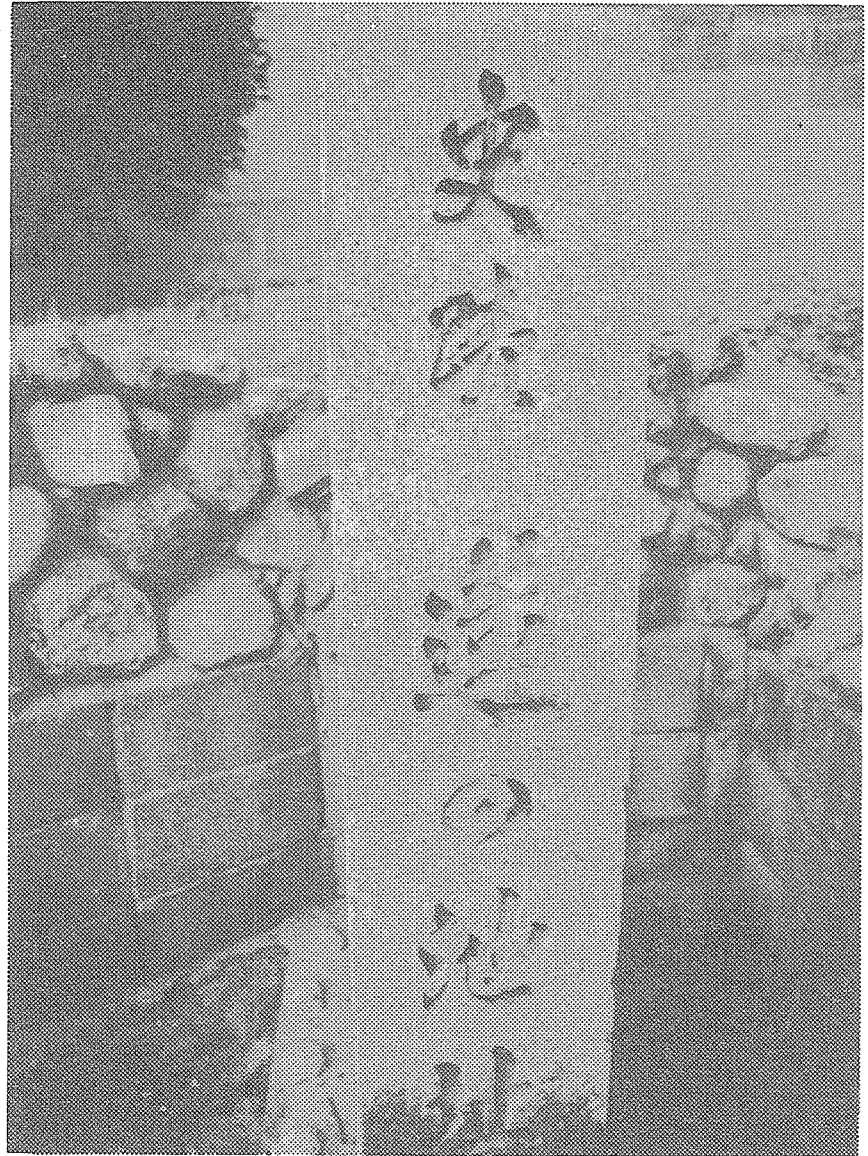
いう。

この行事は、七匹の鬼と五人の太刀役（十歳前後の子供）、十数人の肝煎り（世話をする人）により構成される。

七匹の鬼は、一番太郎鬼、赤鬼、姥鬼、呆助鬼、青鬼、餅割鬼、尻くじり鬼と呼ばれ、松明、斧、大矛、太刀等を持って乱舞し、最後に餅を斧で割る。

元来、大晦日に行われていたというこの行事は、今日では毎年二月三日の節分に行われ、長田区以外からも多くの見物客が集まる。

行基と蓮の池



史蹟蓮の池址

一、蓮池のはじめ

(蓮池町・旧池田村)

千二百五十年ほど昔、奈良時代に仏教を広め、庶民を救済しようと畿内を巡回していた行基が、この地にやってきた。

高取の山すその農民がいつも水不足に悩まされていることを知った行基は、

「ここにため池を築いて、人を救ってあげよう」

と考えた。

彼の指導で、荻藻川の水を八雲橋あたりで引き取り、今の山陽電鉄西代駅の北方に広大なため池ができた。その堤の上ののぼった行基は、

「極楽浄土には、美しい蓮の花が咲き乱れる八功德の池というのがある。この池も極楽の池のように、これから蓮が咲くであろう。そして、その水でまわりの村は豊かになるであろう。」

と、一株の蓮を池の中に投げこんだ。

まもなく池には、毎年美しい蓮が咲くようになり、人々はこの池を「蓮の池」と呼ぶようになった。また一説には、源平合戦のときに平重盛の家臣の蓮池権頭家綱が、この池のほとりで討死したことから、蓮池という名が起こつたともいう。

ノート

後世、この池のあたりにできた集落は蓮の池のそばであったことから、池田村と名付けられた。

蓮の池は昭和六年に埋め立てられ、そのあとに市民グラウンドや蓮池小学校などが建っている。埋め立てた当時は、蓮ではなく菱が多く繁っていたという。秋には、近くの人がたらいを池に浮かべてそれに乗る、菱の実をとったという。

甘酒祭り(旧池田村)

九月十五日に長田神社で池田村祈禱祭が行われている。

甘酒をそなえるところから甘酒祭りとも呼ばれ、戦前は当番の家が自家製のものをそなえた。甘酒のほかに枝豆やミョウガなど、季節の野菜もそなえた。

二、蓮の宮の丑ノ刻詣り（旧池田村）

昔、蓮池が深緑色の水をたたえていた頃のことである。

池の北岸に小さな祠ほくらがあつて、蓮の宮と呼ばれ、土地の人々は行基ぎょうきが祀まつられていると信じていたり、お稲荷いなりさんだと言つていた。蓮の宮の周囲の森は昼でも薄暗く、近づく人も稀だった。

草木も眠る丑うしの刻、誰かを呪う女性が、高下駄をはいて白衣を身にまとい、頭に鉄の輪をかぶつてそれに三本のろうそくを立て、髪を後ろにふり乱し、胸には鏡をぶら下げてこの蓮池の南側の堤の上に立つと、池の水は左右に分かれて中に道ができたという。わずかにうねるその道をたどつて蓮の宮の祠に向かい、蓮の宮の森の中に入った女性は、呪う相手のワラ人形の胸に五寸釘ぐきを打ちつけるのである。

実際にここで五寸釘とワラ人形を見たという人も多いという。

ノート

このように、弱い女性の怨念を晴らす場所が市内の各地にあつた。

十五年ほど前に、六甲八幡神社はちまん境内で見つかった二体のワラ人形は新聞紙上をにぎわせたし、十年近く前に西垂水町なるとみの共同墓地の中で、同様のワラ人形が見つかったことがある。

この蓮池は川池とも言われており、大きな池なので風が強くなると大波によつて堤防が切れかけることがあつた。それを防ぐため、中央に「波切り」という、しきり状の洲があつた。池が減水すると、この「波切





常福寺の板卒塔婆

り」が水面に現われたので、それが蓮の宮に続く池の中の道のように見えたらしい。

三、雨乞いに使った卒塔婆（旧西代村）

天平年間に高取山南麓の村人のため、ため池・蓮池を造った僧行基は、木製の樋をたくさん作り、池への導水や田畑への配水に使ったが、樋を作った木がいくらか余った。

そこで行基は、その木に仏さまを彫り込んで板卒塔婆を作り、蓮池のそばにあった蓮華寺という寺に納めた。

昔から、

「日照りが続いて川の水も蓮池も干上がるようなことがあれば、この板卒塔婆を高取山の頂に持って登り、帝釈天にお祈りすると雨が降る」

と信じられてきた。

ノート

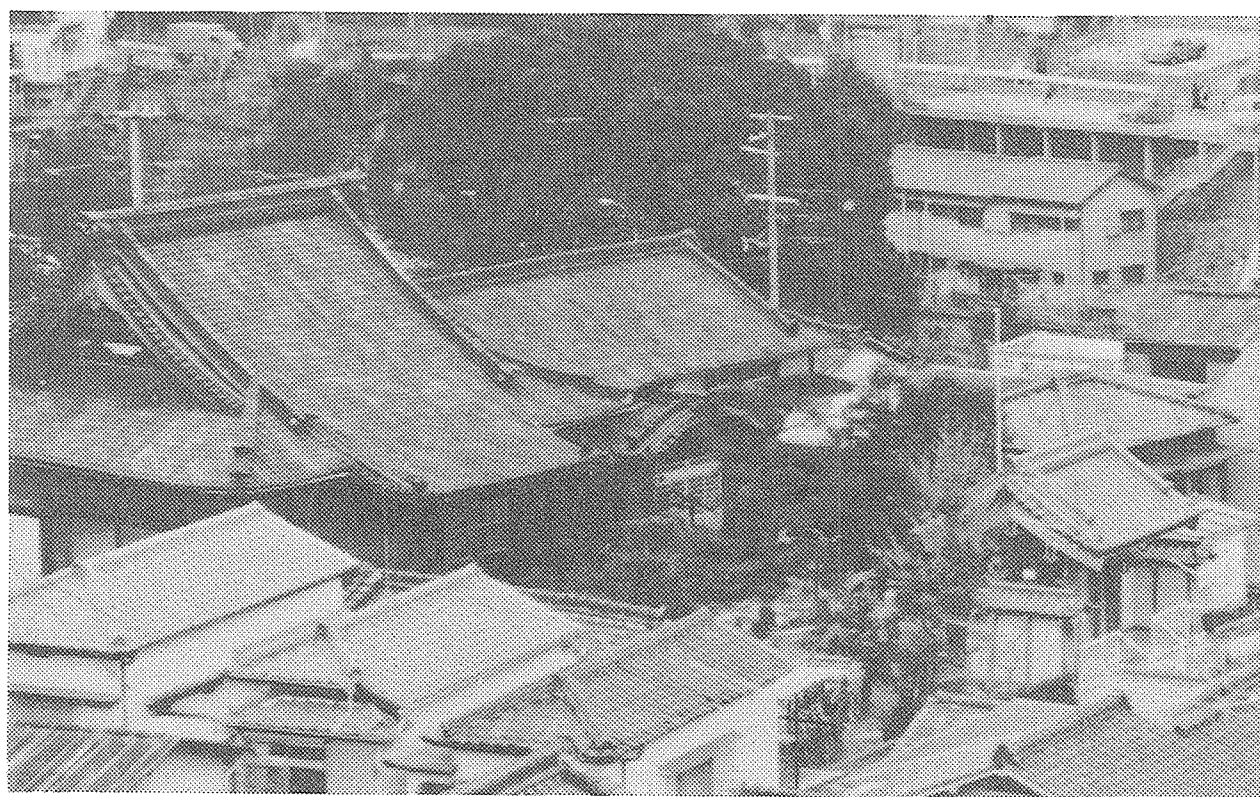
真言宗で延命地藏菩薩を本尊とする観音山常福寺が、明和年間に蓮華寺を吸収し、板卒塔婆を保管している。塔婆は鎌倉初期以前のものと考えられ、きわめて貴重な文化財である。

四、明 泉 寺

(明泉寺町二丁目・旧長田村)

長田から荻藻川をさかのぼると、丸山に明泉寺がある。天平年間に畿内を巡行した行基は、畿内に四十九の寺を建立したが、天照山明泉寺もそのひとつだという。

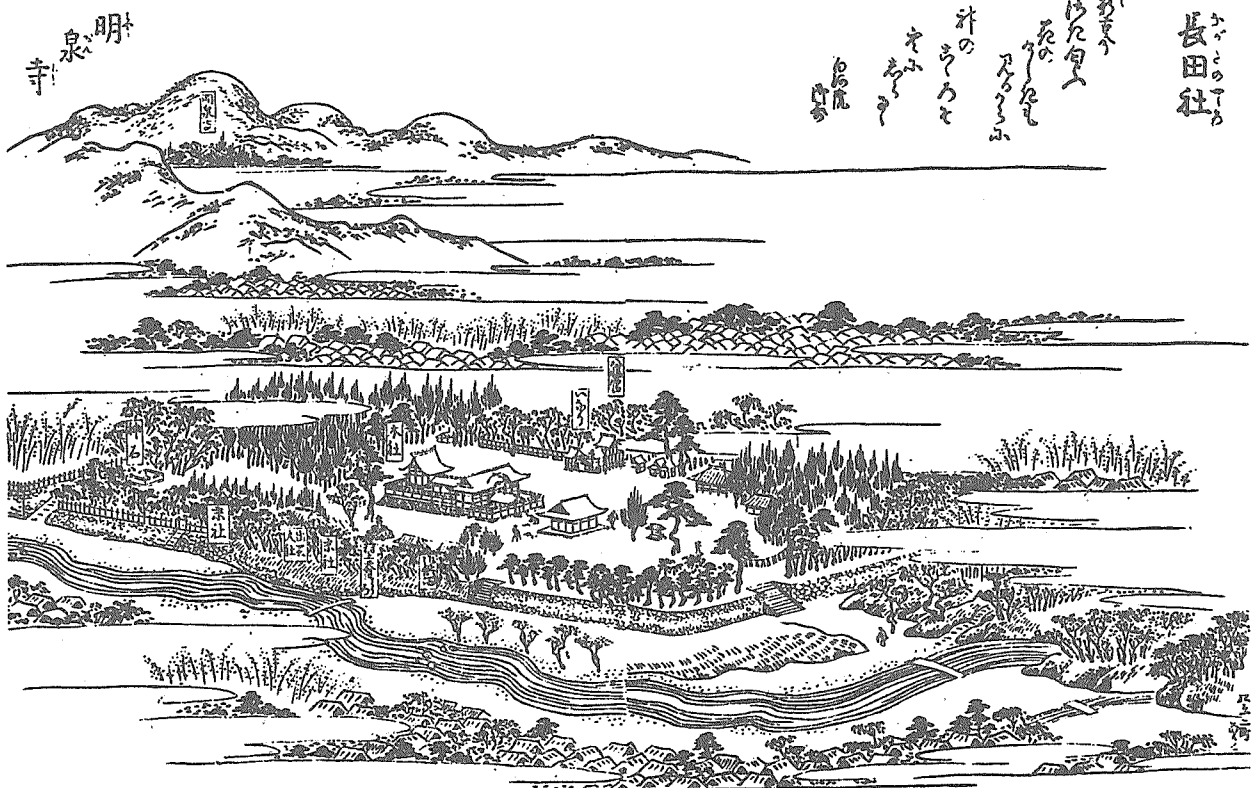
高取山の南麓に水不足で悩む農民のために蓮の池を作った行基が、池の水の源になる荻藻川の上流を



明 泉 寺

調べて歩いていたとき、山間にすばらしく景色の美しい霊地を見つけた。そこで自ら大日如来の像を彫刻して、安置し、そこに建立したのがこの寺だとい
う。

江戸時代には、この寺は「牛の寺」とも呼ばれ、農民が牛の健康を祈った。また、昔は子供の顔や頭に瘡ができる、兵庫の人々はこの寺に参ってその皮膚病が治るように祈った。そのとき、寺に納められている焼物の牛をいただいて帰り、治れば牛を二つ持ってお礼参りに登った。牛が草を食うのと、瘡とをかけ合わせた信仰である。この土の牛の額には、大日如来が彫られていた。



明泉寺

長田神社
 明泉寺
 牛の寺
 大日如来
 瘡
 皮膚病
 祈る

『摂津名所図会』に描かれた明泉寺と長田神社

元来、明泉寺は丸山大橋のすぐ下手、古明泉寺の地にあつたと伝えられ、寿永三年（一一八四年）の源平合戦に際しては、山越えて来る源氏に備えて、明泉寺に平盛俊が陣を張った。案の定、山越えの鴨越道を進んできた源義経は、その盛俊の陣に攻め下りた。この時、寺は焼かれ盛俊は討たれた。盛俊の墓は名倉町一丁目にある。

観応二年（一三五一年）、赤松光範は観如上人に命じて寺を復興した。さて、永和元年（一三七五年）の春、後円融天皇が病にかかられたが、この時、その観如上人の祈禱で十七日目に帝の夢の中に大日如来が現われ、病がいえられたために、喜ばれた天皇から山林を与えられて明泉寺は栄えたという。

五、真野山（旧東尻池村）

東尻池に真野山という小さな山があつて、松林ややぶになつていた。そこには女郎塚、船塚、囃塚などの塚があつたし、また輪田寺の跡もあつたという。この寺は天平年間に僧行基が畿内に四十九院を造つたその一つの船息院の旧地だというが、真野山も今は切り崩されて田畑となり、昔の姿はわからない。

菅原道真の話

一、匂の梅と真野の里（東尻池町一丁目、苧藻通三丁目、梅ヶ香町・旧東尻池村）



律令制がゆきづまって、藤原氏が大きな権力を握ってゆくと、この藤原氏牽制のために宇多天皇や醍醐天皇は菅原道真を重用した。彼の提案で八九四年には遣唐使が廃止され、ついに右大臣にまで登った道真であったが、昌泰四年（九〇一年）、政敵・藤原時平の中傷によって、都を追われ大宰権帥に左遷されることとなった。京から九州へのこの旅の途中、順風を待つために和田岬に船をとどめて上陸していた。このとき、西風にのって芳しい香りが道真のところきた



だよってきた。

「これは何ともいえぬ良い香りだが、いずこより匂ってくるのであろう。」

つい香りに誘われて、道真は和田の松原を西に進んでいった。ちょうど西方に菟藻川が海に注いでいるのが望まれた。

道真がこの川の東方に来てみると、一本の梅の木が今を盛りと花を咲かせていたのである。そこで道真は、

「風寒み雪にまがへて咲花の袖にぞうつれ匂ふ梅が香」と和歌を詠んだという。

荻藻川の川口あたりは真野^{まの}の里とよばれていた。古くは、この川は川口が大きな入江となっていて、真野の入江とよばれていたが、いつの頃からか、土砂が堆積して入江は埋もれ、入江の一部は真野池とよばれる池になっていた。この池は荻藻川の川尻にあるので、「尻池^{しりいけ}」とも呼ばれ、後に尻池村の村名ができたという。

東尻池町一丁目、荻藻中学校の東の工場の中に、小さな社がある。そこには菅原道真^{まげ}が祀^{まつ}られており、そばに「匂^{にお}の梅」の字と和歌を刻んだ碑が立っている。これにちなんで、近くに梅ヶ香町^{うめががかと}という名が残っている。



跡 旧 梅 の 匂

二、真野の継橋

(東尻池町二丁目・旧東尻池村)

真野の里には榛の木が多く茂っているので一帯は真野の榛原とよばれ、その昔、いつの頃か真野の里の南入口、宝満寺参道が苧藻川を渡るところに小さな継橋がかかっていた。

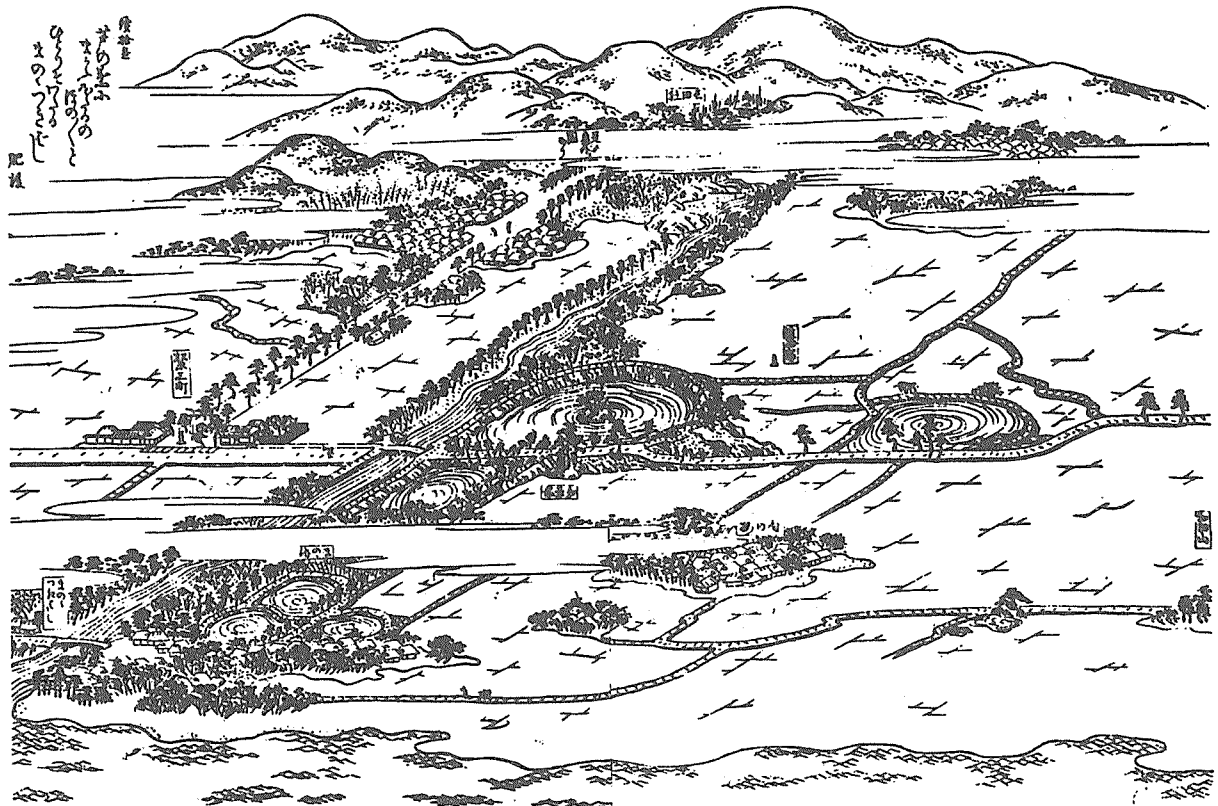
菅原道真は九州大宰府に左遷される途中、このあたりに立ち寄り、継橋の脇にあった和田氏の邸に宿泊したという。このことから、大輪田ノ泊の西の野に菅原(通)の地名が起こつたという。

菅原通の地名は、一説では

「白菅の真野のはき原 心にも思はぬ君が衣にぞする」

「真野の池の小菅を笠にぬはずして 人のあだ名を立つべきものか」

などの古歌にちなんだものであるという。



苧藻川川口の継橋。その東に真野池，川の西に長田神社参道が見える
(『撰津名所図会』より)

この継橋は明治に入って宝満寺の参詣道の前に納転され、その当時には四、五基の石を継いで作られていた。しかし、区画整理の後に宝満寺の中に二基、移されたという。

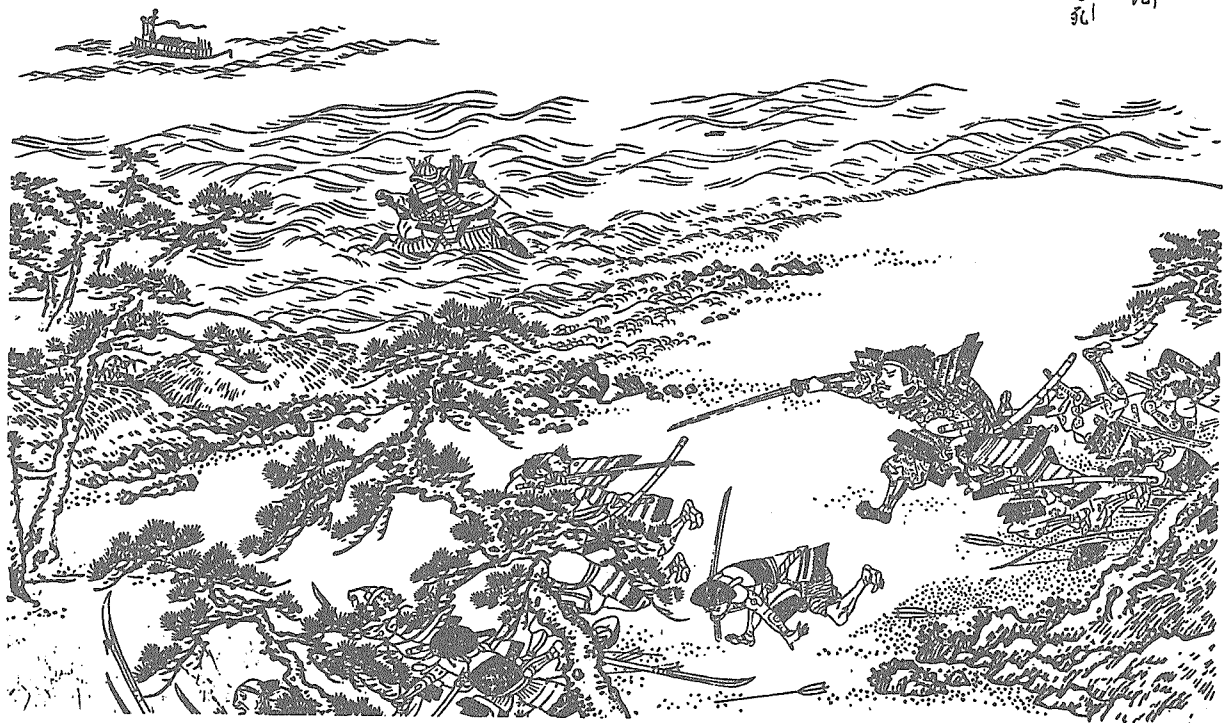
茅の輪神事

青茅^{かや}で作った約二メートル強の輪を、参拝者がくぐり抜け、無病息災を祈願するもので、長田神社では七月十七・十八日、駒ヶ林神社では七月十四・十五日に行われている。

新しい茅の強い香りが、身体を浄^{きよ}めてくれると信じられていた。

参拝者は、この茅^ちの輪を左右左と八の字を描いてくぐる。

源
平
合
戦
と
長
田



父知盛の身代りに討ち死にする平知章（『播州名所巡覧図絵』より）

源平合戦

一一八〇年の秋、東国の源頼朝や木曾の源義仲が反平氏の兵を挙げると、十一月、やむなく清盛は平安遷都を命じた。翌年、清盛が病死すると、義仲は京に進軍して来た。一一八三年、ついに平氏は西国へと都落ちし、義仲が京を抑えた。この義仲は京の貴族たちと対立し、後白河院は鎌倉の頼朝に義仲追討を命じた。頼朝は弟の範頼・義経に兵をあずけて京に向かわせた。この源氏の内紛をみた西国の平氏は一一八四年一月、ふたたび船で兵庫一帯に上陸。東の生田の森と西の一の谷に砦を築いて、神戸付近を京都奪回の根拠地とした。一方、義経らは義仲を破って京を抑えると、その余勢をかって、兵庫の平氏攻撃に向かった。範頼の軍勢は京から山陽道を下り、生田の森を直撃した。義経の軍勢は一旦、丹波を通り、加古川筋を南下して海沿いに西から須磨一の谷を攻撃したのである。

義経自身は手勢をひきつれて本隊と分かれ、三木のあたりで東の山中に入り、兵庫の背後に出る鴨越道^{ひもとこしえ}をひそかに進軍した。

一、失敗した人柱あつめ（旧西代村）

平安末期、保元・平治の乱ののち、太政大臣となつて権勢を握つた平清盛は、治承四年（一一八〇年）六月に福原遷都^{ふくはらせんと}を強行し、神戸の平野^{ひらの}一帯に移つてきた。

清盛は大輪田^{おほわだ}ノ泊^{のどまり}を日宋貿易の根拠地に利用しようと考えた。さて、大輪田ノ泊は西南の荒波を和田岬^{だみさき}が、北からの強風を六甲山地が防いでくれるが、東南からの風波には守るすべがなかつた。そこで彼は、大輪田ノ泊の南の海中に人工の島をつくつて波を防ごうと考えた。しかしそれはむずかしい工事^{かむ}で、島ができかけると波に洗われ、なかなか容易に進まなかつた。思いあぐねて、阿部素氏^{あべのすけ}という古い師に占わせると、この海底には龍神^{りゆうじん}がいるから、二十人の人柱を沈めて龍神にささげ、その上で工事をするべきだということであつた。そこで清盛は二十人の旅人をつかまえるために、蓮池^{はすいけ}の西方の山陽道に、役人をつかわし、関所を作つた。ところが、そのために旅人がまつたく通らなくなり、ここでの人柱あつめは失敗におわつたという。

二、忠度の胴塚（野田町八丁目・旧野田村）

一の谷を攻めた源氏の武士、岡部六弥太忠純は、ふと前方に立派な侍大将をみとめた。

「あれは名のある大将にちがいない。」

と忠純は、その侍を追いはじめた。ようやく追いつき組みついてみると、敵はなかなかの豪の者。二人は組み合せて馬から落ち、上になり下になり闘った。ついに忠純は組みしかれ、今にも首をおとされそうになった。そのとき、

「えいっ。」

と忠純の部下が後ろから近よりにぎまに刀をぬいて、敵の右腕をひじのところから切りおとした。



文武の達人平忠度の塚という胴塚

「うーむ。もはや最期か。ええい、さがれ。」

とその侍は、忠純を残った左手で投げとばし、

「最後の十念をとなえよう。南無阿弥陀仏………。光明遍照十方世界、念仏衆生攝取不捨。」

と静かに祈りはじめた。後ろにまわった忠純は

「えいつ。」

とその首を討ち落とす。しかしその侍大将が誰なのか、忠純にはわからなかった。

「名のある大將軍にちがいあるまいに。」

とその遺骸を調べていると、籠にむすびつけられた短冊に、

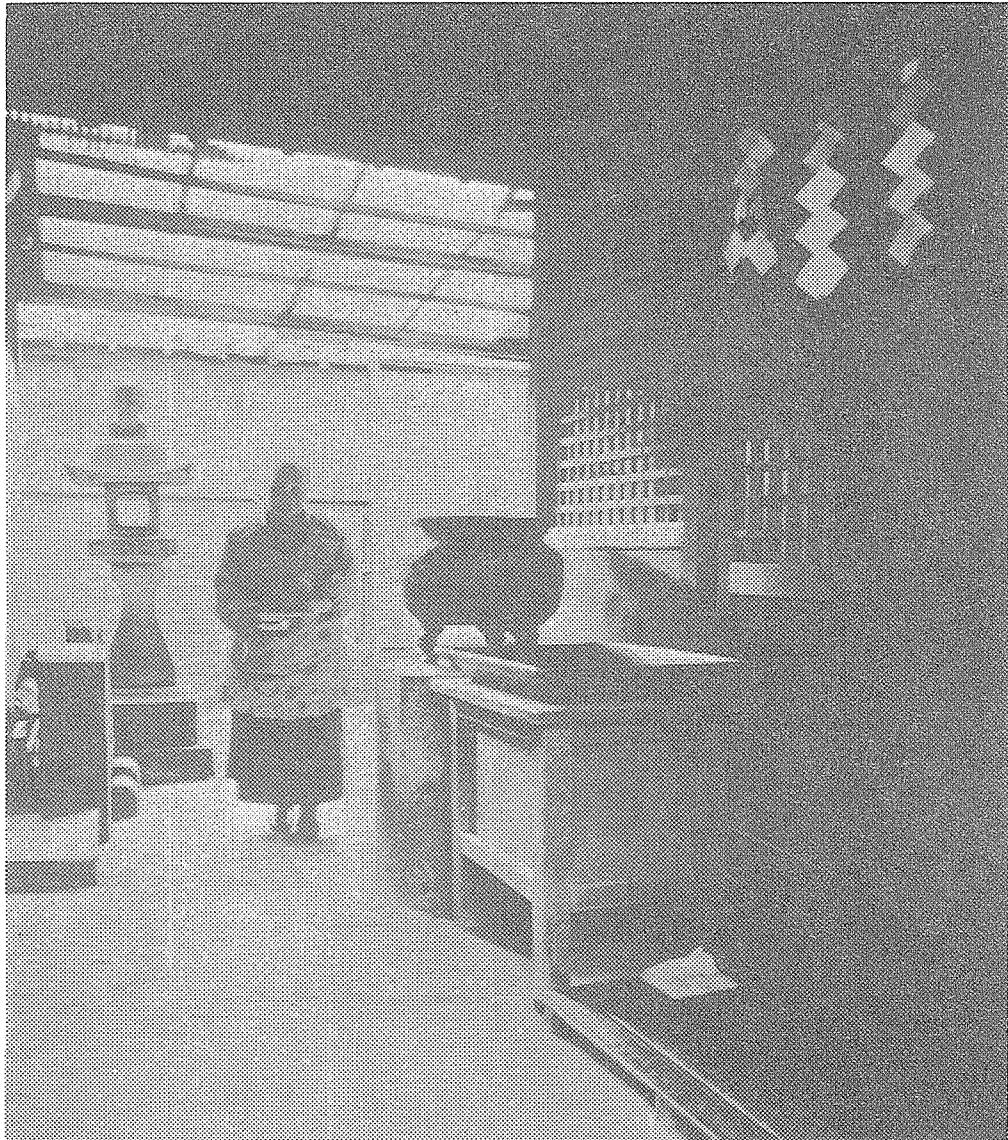
「行き暮れて木の下かけを宿とせば 花や今宵の主ならまし 忠度」

と書かれてあった。それは一谷の大將軍である平忠度だったのである。

野田町八丁目にある胴塚は、この忠度の胴体を埋めたものだという。

ノート

駒ヶ林町四丁目には切り落とされた忠度の右腕を埋めたという腕塚がある。また一説では一谷の敗戦で西方へと逃れ、明石市大蔵谷の両馬川畔で岡部六弥太によつて殺されたとも伝えられ、その地にも腕塚や胴塚がある。



人々の信仰を集める腕塚さん

三、腕塚

(駒ヶ林町四丁目・旧駒ヶ林村)

平清盛たいらのみもりの末弟、平忠度たなのりは腕力のすぐれた武将として知られていたが、同時に藤原俊成ふじなるとしな成に師事した歌人としても有名である。

彼は寿永三年(一一八四年)の一の谷いちのたにの合戦で岡部忠純おかべただすみの家臣に腕を切り落とされ、静かに念仏を唱えて忠純に首を討たれた。名乗りをしなかったため、誰とも知れなかったが、その籠かごに「行き暮れて木の下かげを宿とせば 花や今宵の主ならまし 忠度」

と言いた紙片が結びつけてあ

だったので、初めて忠度とわかったと伝えられている。

この忠度の死をいたんだ人々が彼の切りとられた右腕を埋めて腕塚とした。腕を痛めた人がここへ参ると痛みがとれるということで、遠方からも、訪れる人が絶えない。

なお、野田町八丁目には忠度の胴を埋めたと伝える胴塚がある。

ノート

『平家物語』の忠度都落ちの段では忠度が都落ちの途中一旦、京に引き返して俊成を訪ね、百余首の和歌一卷を託したとある。その中の一首、

「さざなみや志賀の都はあれにしを昔ながらの山桜かな」

は、よみ人知らずとして、後に千載和歌集の中に、選者俊成によっておさめられた。

四、駒止めの石（駒ヶ林三丁目・旧駒ヶ林村）

昭和の初め頃まで、駒ヶ林神社の境内に大きな石があり、「駒止めの石」と呼ばれていた。この石は、源平争乱の頃、平氏がそこに馬をとめたことから、そのように名付けられたと言われている。

五、義経の力団子（明泉寺町二丁目・旧長田村）

鴨越墓地の奥、高尾地蔵前には源義経が馬を休めたという駒つなぎの松があるが、丸山の明泉寺下の崖つぶちにも義経にちなむ大きな石があった。鴨越の坂落としの際、彼がその石にすわって休んで作戦を練り、餅を食べ、力をつけたのだという。これにちなんで明治の終わり頃から、義経の団子と名付けた団子を売る茶店が、義経がす



わったという石の脇に
開かれていた。

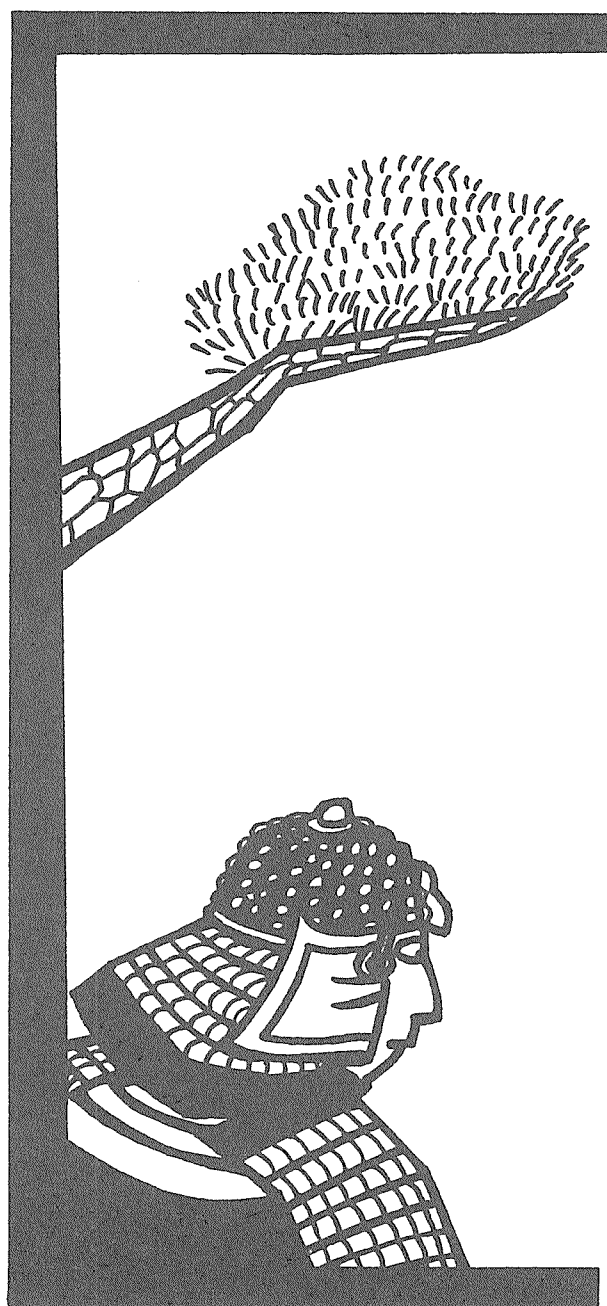
この団子屋も次々と
代が変わって、昭和の
初め頃に閉めてしまっ
た。

ノート

高尾地蔵は、古くから鶴越道の峠に祀られていた地蔵堂で、古い松と小さな泉がある。

六、盛俊卿の陣（旧長田村）

寿永三年（一一八四年）二月七日、平家軍は万一に備え、生田の森を守っていた平盛俊を通盛、教経らとともに鶴越のふもとにまわした。盛俊が陣を敷いたのは旧字古明泉寺（現、大日丘町）の地だつたという。





名倉町にある平盛俊卿塚

この陣に義経が攻めおりたのが、鶯越の坂落しである。

ノ
ー
ト

鶯越道は、六甲山系を横断して、山の北、丹生の山田庄と兵庫を結ぶ交通路であった。北区の東下あたりから山越えに藍那に出、そこから高尾山を経て今の鶯越墓園の表門に至る。ここから尾根づたいに夢野の長福寺のそばへおりて、湊川ぞいに兵庫へ出た。墓園の門前のところからは急な崖を西にお

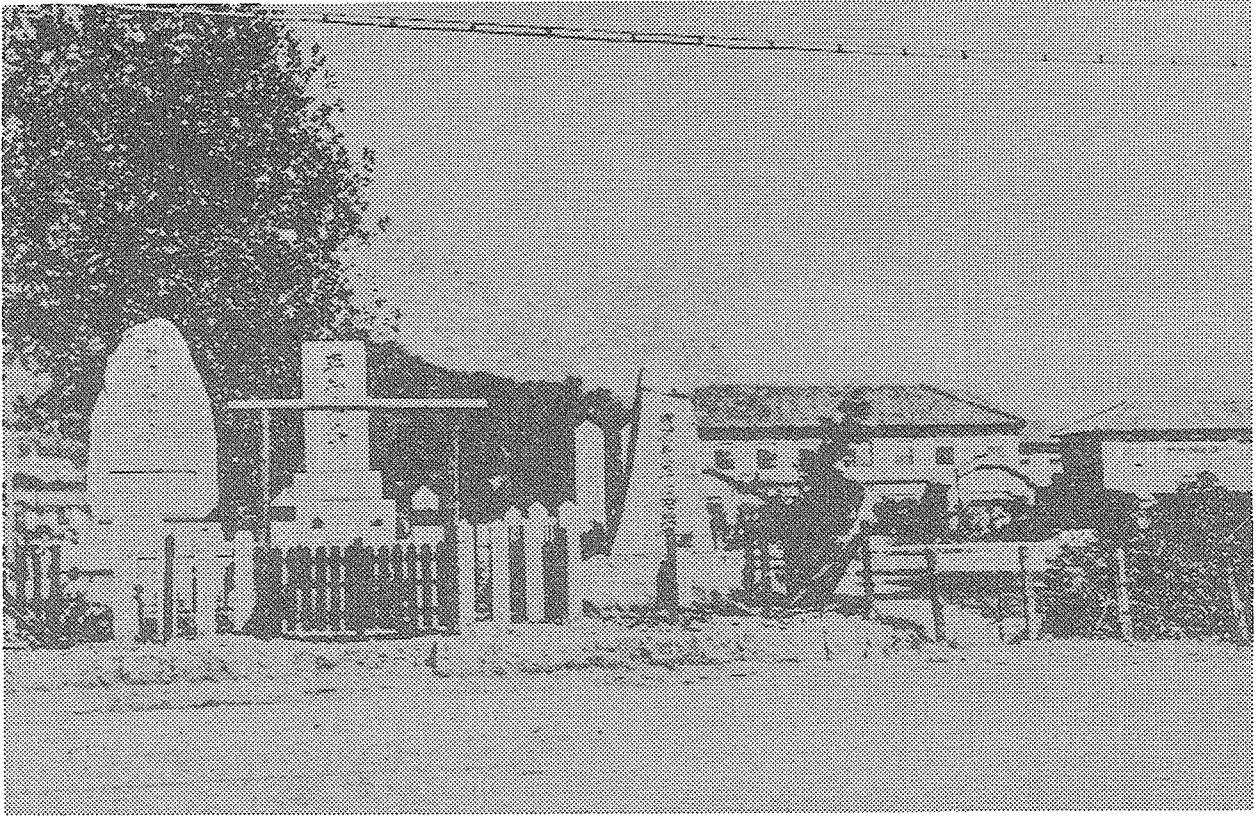
りると、荻藻川の谷で、これに沿えば長田へ出る。義経は自分の本隊と分かれてこのルートを通り、盛俊の陣に攻めおりたと思われる。

ところが義経自身とは別に、彼の本隊は加古川筋を南下し、海沿いに西から一の谷を攻撃した。このため、鶯越の坂落しを文学作品『平家物語』や『源平盛衰記』は、須磨一の谷の背後として描き、後世混乱をきたした。

義経の急襲で平家の豪者、盛俊も猪俣小平六によって討たれてしまったが、盛俊の塚が名倉町二丁目にある。小平六の石碑は、区役所の東、新湊川橋東詰にある。

七、源平勇士の碑（五番町八丁目・旧長田村）

村野工業高校のグラウンドと、道路をへだてたその南側とに、二つの大きな池があり「夫婦池」と呼ばれていた。池の側には、四、五本の松があり、そのかげに地藏尊があつて平道盛の墓だと言われていた。街道の南側には、父知盛の危急を救つて戦死した平知章の碑があつた。もとは知章の塚石は明泉寺の近くにあつたが、孝子の墓は世の手本になるように人目につくところへと言うので、その供養碑を享保年間に『摂津志』の著者並河誠所が街道筋に建てた。北側の池の中には源氏方の木村源吾重章、猪俣小平六の塚があつたが、池の埋め立てや街道の整備などで今は、通盛、小平六、木村源三則綱、源吾重章、知章の碑が並んで一カ所に建てられている。また知章の家来堅物太郎頼賢の碑は長田ビルと村野工業高校の間の路地に祀られている。



源平勇士の碑（昭和4年）



堅物太郎頼賢の碑

駒ケ林の獅子舞（旧駒ケ林村）

お盆の夜中に十八歳までの男の子が行った子供の行事で、昭和初期に中止された。

この獅子舞は各町ごとに行われ、夜中の二〜三時頃から「ハナ」をもらえそうな家を回った。集めた「ハナ」のほとんどはカシラ（十八歳の子供）やコガシラ（十七歳の子供）の小遣い銭になったので、小さな子はカシラになる日を楽しみにしていたという。

足利尊氏と宝満寺

一、宝満寺の縁起（東尻池町二丁目・旧東尻池村）

宝満寺は、今から千二百年も昔に、大輪田ノ泊に来ていた弘法大師が時の天皇の命令で建立したという。

大輪田ノ泊で仏教を広めていた弘法大師は、そのずっと西方に、すばらしい風景の野原を見つけた。そこで自ら大日如来の像を刻み、仏教を学びに唐に渡った時に手に入れていたお釈迦さまの遺骨や水晶の五重塔などの宝物を納めて、ここに宝満山金剛峯寺という寺を建てた。少し後に、弘法大師は高野山に金剛峯寺という名の寺を建てたため、こちらは金剛山宝満寺と寺の名を改めたという。

初め、兵庫区字寺山の地に築かれていたこの寺は、平清盛に



宝満寺の木造大日如来座像

保護されて栄えていたが、清盛が福原遷都を命じた時、都を守護する寺として今の東尻池の地に移されたという。しかし、寿永の源平合戦でひどく衰えてしまった。それを文永三年（一二六六年）に覺心禪師が禅宗に改め、昔のように復興させたという。



宝満寺の木造大日如来座像は、県指定の重要有形文化財である。

二、宝満寺と足利尊氏（東尻池町二丁目・旧東尻池村）

建武二年（一三三五年）の冬、後醍醐天皇の朝廷に謀反を起こした足利尊氏は、さんざん敗れて、翌春九州へ逃れた。

その逃走の途中、尊氏は兵庫に立ち寄り、和田岬の西方、東尻池の宝満寺の仏さまにお参りした。

「どうぞ、私の武運をお守り下さい。このたびは落ちのびてゆきますが、いつか大勝利を与えて都へ帰らせて下さい。」

と祈った。

やがて、九州に渡った尊氏は、筑紫の多々良浜で激しい戦いを展開した。そのとき、急に黒雲がわきあがって上空を覆うと、強い風が戦場に吹きつけた。



「これはどうしたことだ。強い風に目もあけておれぬわ。」

すると突然、尊氏の前に一人の少年が現われ、手に持っている矢竹を見せて言った。

「これは、敵方から無理矢理奪ってきたものだ。あなたも私に矢竹を一本くれぬか。」

不思議に思った尊氏が、矢竹を少年に与えると、たちまち少年の姿は見えなくなってしまった。しかしこのことがあって後、戦局は急に尊氏に有利となり、この浜辺で勝利をおさめた後、まもなく尊氏は九州一円を征することができたのである。

急速に勢力を挽回した尊氏は、翌年には九州を発ち、京に向かって攻めのぼり、再び兵庫に上陸した。

尊氏が須磨区大手の証誠神社しょうせいの南に陣をとっていたとき、宝満寺の僧志遠しおんがそこを訪れた。そこで尊氏は多々良浜の不思議な少年の話をしたところ、それを聞いた志遠は驚いて言った。

「尊氏殿。実は先日、私は寺の本尊を拝もうと厨子ずしをあけたのですが、仏さまの蓮の台座の下に一本の矢竹があるのを見つけました。はて、心当たりもないがと思い、それをとっておいたのです。」

そして一本の矢竹を尊氏に示した。

「おお、これはわしが少年に与えたもの。そうか、あのおとき以来、宝満寺の仏さまがわしを守って下さったのか。」

この後、全国を征した足利尊氏は宝満寺に多くの寺領を与え、「宝満護国禅寺」という額を納めたという。



「宝満護国禪寺」という額は戦災で焼失し、現存していない。

三、御蔵通のいわれ（旧東尻池村）

足利尊氏が湊川合戦の際に、本陣とした宝満寺は、その後、尊氏から広大な寺領を与えられ、大いに栄えた。

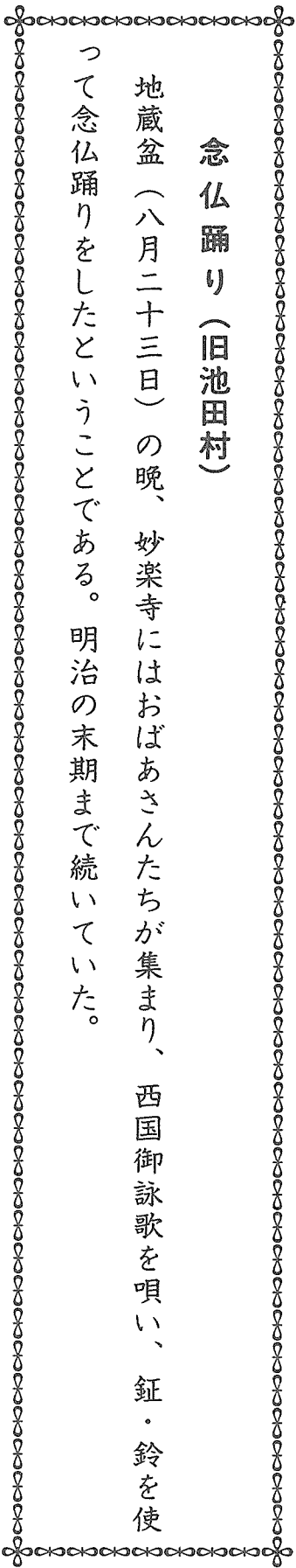
そのころ、宝満寺では所領から集められる米を蓄えるため、米倉を建立した。その米倉のあった場所が、御蔵通のいわれだという。



御蔵の地名は、江戸時代に藩主の年貢米を納めた穀倉があつたからだともいわれている。

念仏踊り（旧池田村）

地蔵盆（八月二十三日）の晩、妙楽寺にはおばあさんたちが集まり、西国御詠歌を唄い、鉦・鈴を使って念仏踊りをしたということである。明治の末期まで続いていた。



社
寺
の
伝
説

一、房王寺

(房王寺町・旧長田村)

会下山の西北に房王寺という地名がある。平城天皇の時代に、芦屋に住んでいた阿保親王の手で建立され、一帯に伽藍が立ちならび、支院末寺がひしめいていたという。

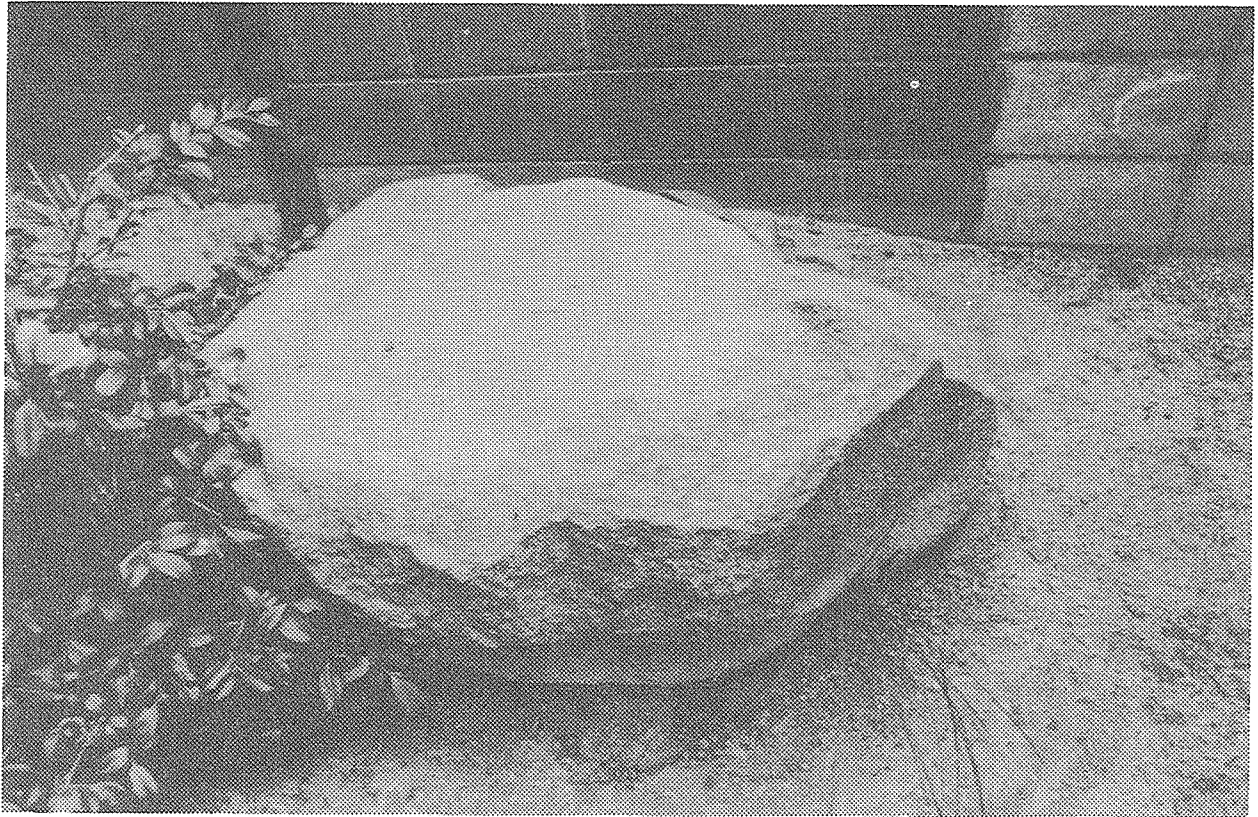
今の須磨寺も、昔は房王寺の支院だったと伝えられるが、源平の合戦の頃にはすでに房王寺は廃絶してしまっていた。



房王寺のすぐ西南にある室内の地名などから、一帯が摂津国八部郡の郡役所があったところだと考えられている。奈良から平安時代の古瓦が室内小学校に、また、柱の礎石が丸山中学校に保管されている。



室内小学校にある古い瓦



丸山中学校にある柱の礎石

子供の遊び（旧長田・池田村）

七夕の晩、長田村と池田村の子供たちが、源平の戦いを真似て、

「けんかせんか、ようせんか。」

と囃しながら太鼓や提灯を持ってけんかをしたという。

二、常福寺の持ち上げ地蔵（大谷町三丁目・旧西代村）



常福寺の持ち上げ地蔵（写真左）

常福寺境内の地蔵尊のわきに、
「持ち上げ地蔵さん」と呼ばれて
いる一石五輪塔がある。この
五輪塔を持ち上げるとご利益が
あるといい、特に子供に恵まれ
ない夫婦がよくお願いして持ち
上げると、子宝に恵まれるとい
う。

三、粉寺の観音様（旧野田村）

和銅二年（七〇九年）のことである。ある夜、奇妙な光が野田の沖合のまっくらな海上に現われた。

不思議に思つて人々が波打ち際に集まつてみると、やがて一人の翁が、その光を背負つて海からあがってきたという。

よく見ると、背後の光の中に観音様の像があつた。そこで海の近くにお堂を建てて、その観音様を祀ることになり、その寺を海運山正福寺と名付けた。



この寺は源平の合戦にまきこまれて焼失したため、観音様は寺の北側にあつた粉盛堂こなもりどうという十王堂じゅうおうどうに移され、村人が木の皮を粉にして観音様に供えたため、粉寺こなでらの観音様と呼ばれるようになった。後に再建された正福寺も、明治の頃まで続いていたが、村人たちは時々、夜の海から龍燈りゅうどうが観音様のところへ行くのを見たという。

ノート

昔、不思議な光が見えると、海底の龍宮から送られてくる灯ともだと説かれた。

四、高 福 寺（西尻池町四丁目・旧西尻池村）

今から五百年も前、西尻池にしりひけには大日寺だいにちでら、伝でん（田）福寺たふくじ、薬師寺やくしじ、極楽寺ごくらくじ、高福寺こうふくじといったお寺があつたが、それぞれの寺の信者たちは互いにいがみあい、争つていたという。中には何とか村をひとつにまとめようと考えて、頭をいためる人々もあつた。そこで高福寺を村の中心の寺と決め、他の寺はそのもつで互いに協力しあつていこうということになつた。

大日寺と薬師寺では、村々の連帯を強めあうために毎年村人が講を開いていたという。

ノート

この講は戦前まで続けられていた。伝福寺、薬師寺は現存していない。

五、妙 楽 寺

(池田寺町・旧池田村)

七百年以上も昔、後嵯峨天皇の寛元四年(一二四六年)に、宋の国の僧、蘭溪道隆大覚禪師が大宰府から京に上る途中、兵庫に上陸した。

港の西はずれに景色の美しい土地を見つけ、その石の上に衣を敷いて休んでいると、どこからともなく良いにおいがして、妙なる音楽が聞こえてきた。やがて、天照大神や八幡の大神などが現われ、この



高 福 寺

地に法縁（神仏との結びつき）が熟していることを告げたという。そこで禅師は、この地に寺を開き、白華山妙楽寺と名付けた。

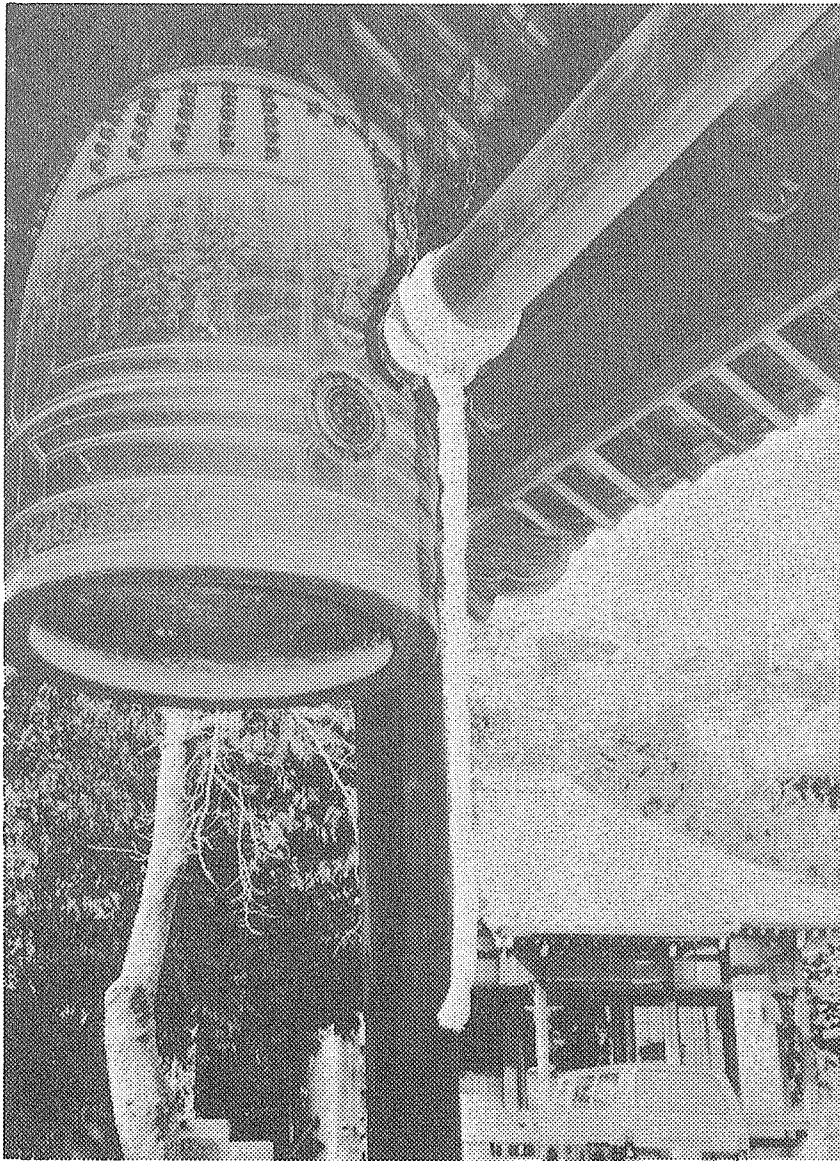
これが現在、池田小学校の東側にある妙楽寺の起こりだと伝えられている。

かつては、妙楽寺のふもとに正宗院、通玄庵（配下の寺）がいくつも建ち並び、隆盛を誇ったという。しかし、応仁の乱（一四六七～七七年）の兵火にあい、その後も他村との争いの際に焼打ちにあつたりして衰えていったという。

ノート

妙楽寺の裏山が観音山で、別名寺山とも言われた。つつじや楊梅の木がたくさんあり、しばはりというハツタケのようなきのこも採れ、池田村の人々が山遊びをしたところだという。

この観音山には、昭和二十四～五年頃まで大きな石をごろごろと重ねた経塚（経文を地中に埋めて



妙 楽 寺



駒ヶ林神社

盛り上げた塚）が残っていた。

六、駒ヶ林神社

（駒ヶ林町三丁目・旧駒ヶ林村）

古代、難波^{なにわ}には鴻臚館^{こうろかん}という役所があつて、外交や国防を司っていた。大陸からやってくる人々が瀬戸内海を旅してくると、駒ヶ林^{こまがばやし}のこの地まで鴻臚館の役人がきて、旅人たちを調べた。そして、ここから陸上を都まで行かせるものと、水路で難波に行かせるもの、または入国を断るものに分けたという。

その役所に祀^{まつ}られていた神社が駒ヶ林神社のおこりだという。一時、このあたりを井戸町と称していたのは、「庁^{ちやう}の井」（役所の井戸）があつたからだとも伝えられている。

ノート

駒ヶ林神社の創建は古代にさかのぼるといわれるが、記録が焼失して不明である。

七、長福寺

(長田町四丁目・旧長田村)

寛喜二年(一二三〇年)南華禪師が開山。虚空蔵菩薩を本尊とする臨済宗の寺で、建武年中には、赤松円心がこの本尊を厚く信仰したという。

ノート

旧暦三月十三日に毎年本尊の開帳を行い、「十三参り」といって、十三歳になった子供を連れて参る人だにぎわった。維新後、長い間、住職がいなかったが、明治三十八年に再興した。その後、戦争にあつて門だけが残っていたが、今は再建されている。



長福寺の十三参り

八、長田の薬師（西山町一丁目・旧長田村）

普門山福聚寺は永和二年（一三七六年）月菴禪師が開いたが、永禄年間に兵火で焼かれ慶長年間に改修したといわれている。



福聚寺の薬師三尊像

遠い昔、長田の里の天神山へおりられた神が、後に薬師さんのあるにぎやかな地に、降りてこられたといういい伝えをもっているが、明治初年の神仏分離のときに、薬師如来を福聚寺に移してしまった。

長田神社の有名な追儼式は、もともとこの薬師堂で行われていたもので、明治二十年頃まで絶えていたのを後に復活し、行事だけが神社に残ったのである。村の古い記録によると「毎年

正月十六日薬師堂にて鬼七匹、面をかけ踊り候」とあつて、かがり火をたくため、たきぎ十二荷、竹八把、鬼の装束を染めるための楊梅の木一荷、牛王をつくるためのヌルデの木十八本、ほかに柴四十荷などを前年の十二月中に一里山で採つてきて用意する。薬師堂の縁で踊る鬼は、似合いの装束に宝剣をもつて踊る。牛王でつくつたお札は、天下泰平、千秋万歳樂を祈禱して氏子に授け、氏子はこれを苗代に立てる習わしであつたと伝えられている。

明治四十三年からは、毎年二月節分の日の午後に行われているが、鬼役の人達が禱家で精進潔齋し、当日海辺で身を清めることは今も変わりはない。

九、鬼ヶ平と鹿松峠（旧西代村）

兵庫から北、夢野へ出て、その北の山に登り、今の鶴越墓園から藍那、山田へ抜ける道は鶴越道と呼ばれ、海辺と山間、三木方面をむすぶ古い交通路であつた。この道を鶴越墓園のあたりで西に折れて明泉寺へおり、高取山の北ふもとを越えて妙法寺川の谷におり、そこからさらに多井畑を通つて塩屋に通じる交通路があつて、江戸時代には古道越えと呼ばれていた。この古道越えが高取山の北ふもとと荻藻川の谷と妙法寺川の谷の分水嶺を越えるあたりに、うっそうと木の茂つた鹿松峠といふところがあつた。



今からおよそ千年ほど昔、永延年間の話である。この峠に日夜、鬼人が出没して兵庫から塩屋へ抜けようとする旅人たちを襲い、悪事をはたらいていた。西国に行こうとする旅人たちにとって、鬼人は悩みのたねだった。

「やいつ、やい。その旅人め、身ぐるみ脱いで、持ち物を置いて、とつとと失せろ。」

鬼人たちのふるまいは、目に余るものがあつた。そこで国司は、この鬼人退治を朝廷に願い出た。時の一条天皇は、武力で鬼人を退治するように、平兼盛に命じられた。しかし兼盛は、腕力よりも仏の力で鎮めた方がよいと進言した。

そこで天皇は、藤原伊尹の三男でその頃高野山で仏教の修行をしていた英雄丸をお呼びになり、「兵庫の西の鹿松峠に鬼人が出て、旅人を悩ましている。そなたの仏教の力で、どうか鬼人を退治してほしい。」

と命じられた。

英雄丸は、高野山からはるばる鹿松峠にやってきて、峠の近くにお堂を建てて日夜お経を唱え、仏さまに鬼人の退散を祈り続けた。いく日もの祈禱の末、とうとう鬼人は鹿松峠から姿を消してしまつた。

旅人たちの喜びは大変なものであつた。それからというもの、古道越えは毎日安全な旅ができるようになった。

英雄丸は後に証樂上人と呼ばれるようになり、この証樂上人の建てたお堂が須磨区大手町にある勝

福寺の起こりだと伝えられている。また、高取山の西のふもとにある禅昌寺の東に「鬼ヶ平」という地名があつて、そこが鬼人の住んでいたところだと伝えられている。

一説によると、鬼人が現われて

「私は熊野権限の化身である。私を鎮めようと思うなら、この近くに私を祀れ。」

と命じられ、祀られたのが大手の権現さま（証誠神社）の起こりだともいう。

ノート

勝福寺には、平清盛が築島完成の供養の際に使って寄進したと伝えられる金銅密教法具（国の重要文化財）がある。この寺で、かつて一月七日に行われていた追儺の鬼踊りは、この鬼人退治の姿だとも伝えられている。

奈良時代まで、山陽道は須磨から鉢伏南麓の赤石櫛淵（今の須磨浦公園）の地。海と山が迫り櫛の歯状の出入りの多い海岸線から、この地名があつた（を避けて、多井畑・下畑・塩屋と通じていたが、平安朝には須磨浦の地を往き来するようになった。そこで多井畑を通っていた道は、平家物語などにも古道と記されているが、これが多井畑からさらに東の山中に延ばされ、鶴越道に合流するようになって中世には山陽道の脇道となっていたのであろう。

十、満福寺（海運町四丁目・旧野田村）

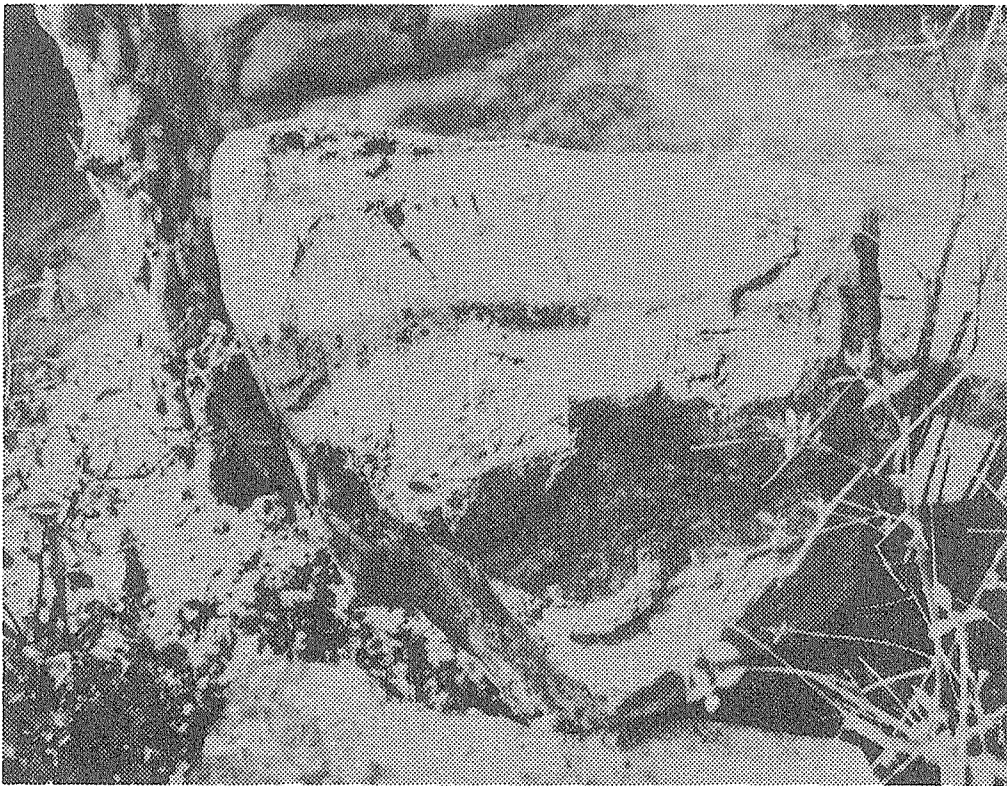
医王山満福寺は、平清盛が建てたと伝えられているが明らかではなく、記録によると天文五年（一五三六年）創建とある。

このあたりには、満福寺、長福寺、正福寺と「福」のつく寺が三つあったが、満福寺以外の寺は廃寺となった。

境内には、もと正福寺にあったという自然石の仏足石（釈迦の足裏の形をした石）があり、左足形の横には釈迦如来の礼賛文が刻まれている。

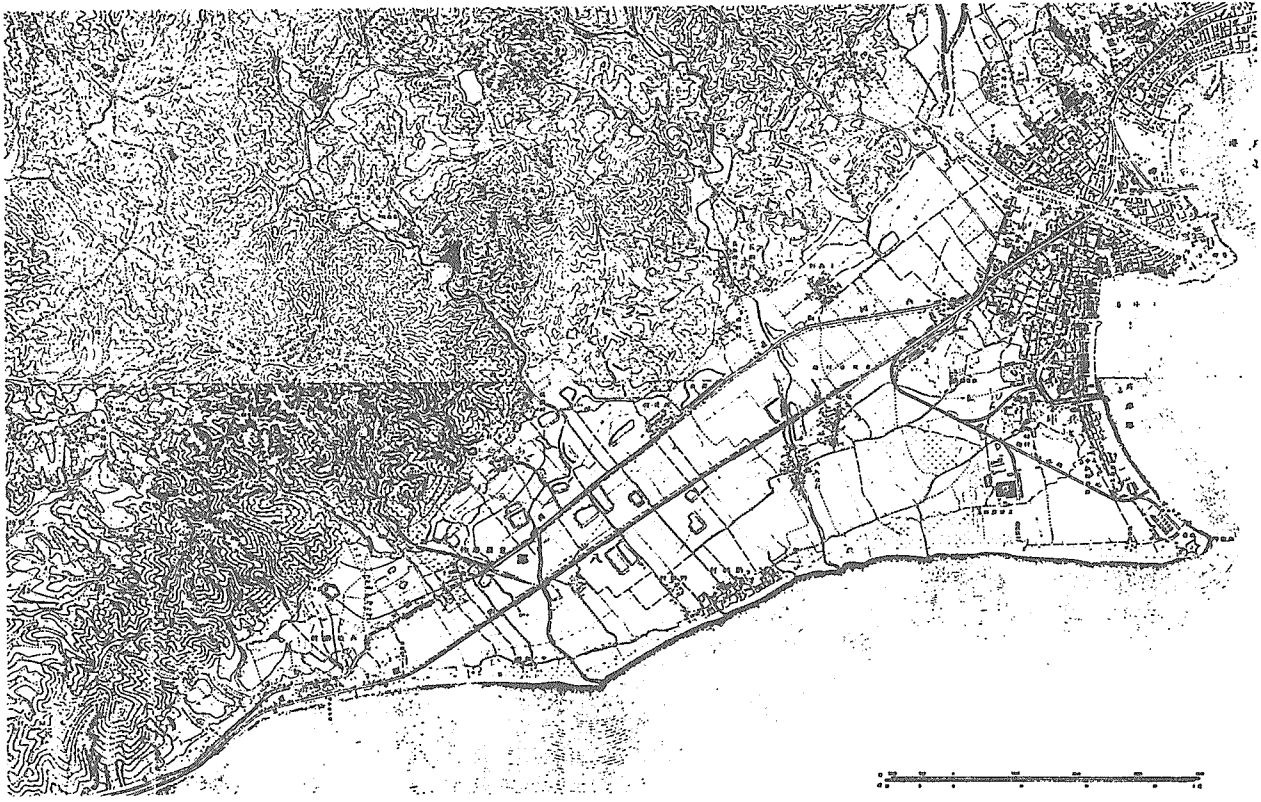
ノート

ここでいう長福寺は前掲（八八頁）の長福寺とは別である。



満福寺の仏足石

けものたちの話



明治19年の長田地方（建設省国土地理院陸地測量部
2万分の1地形図）

けものたちがいた頃の池田付近（旧池田村）

明治の終わり頃までは、高取山麓にもいろいろな動物がやってきていた。

鶴（コウノトリのことか？）は、畑のうねをゆつくりとまたいで歩いていた。

木を切るため山に入ると、猿がよくいたずらをした。木を切っている間に弁当を盗んだり、石を投げると投げ返して来たりしたという。

今の観音山あたりには、親子の狐がやって来たり、山を歩いていると足元から急に雉が飛び上がった。たこともよくあった。

畑を荒す猪は、夜、水おけをこすって大きな音をたてて追い払った。

ノ
ー
ト

大正の頃までは、長田神社参道の両脇は樹齢数百年とい

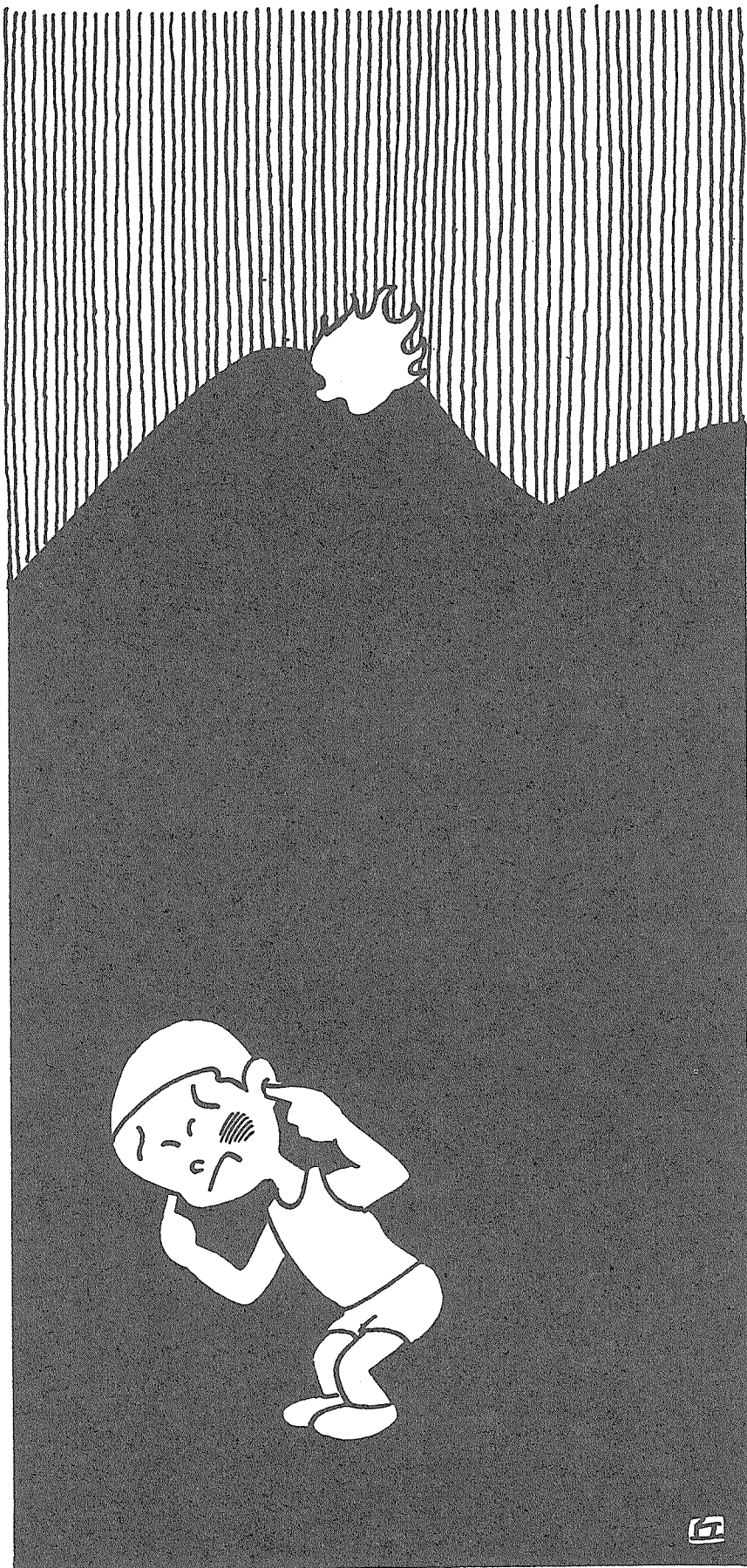
うような老松が立ち並ぶ、立派な松並木であったがいつの間にか枯れてしまっている。石の鳥居は西国街道に面して立っていたが、今は道路拡張のため、少し北側に移されたらしい。この鳥居の東側にあった松は、子供なら七、八人が手をつないでやっと囲めるくらいの大木だったという。また、この鳥居の横には茶店があり、街道を往来する人々がしばしば足を休めた。



江戸時代の長田神社前の茶店と旅人
 (『播州名所巡覧図絵』より)

一、かんのん山のきつね（東丸山町三丁目・旧長田村）

東丸山町に妙昌寺というお寺がある。昭和十一年に兵庫方面からの移転で寺ができ、この山もかんのん山と呼ぶようになったが、尻池の人たちは「とんびの巣」と呼んでいた。夕方になると鳶がこの



山へ帰って行くのだと伝えられていた。

昭和の初め頃まで、この「とんびの巢」によく狐きつねが出た。暗くなると、この山には大きな丸い火の玉が見えた。それは狐の火だといい、また恐くて目を閉じている者にも「ギャーギャー」と鳴くきつねの声はよく聞こえた。

二、きつねのいたずら（長田町三丁目・旧長田村）

荻藻川かろもと長田神社の土壁との間には、昔からけやきの繁った小道があった。空を覆うように生えたけやきの森は昼でも暗く、夜はなおさら真つ暗闇だった。

夜遅く提灯をつけてここを通りかかると、提灯の火がフツと消えて、その後必ずパラパラと砂が飛んできた。それはこのあたりに住む狐きつねのいたずらだったという。

また、狐は今の池田小学校裏の観音山かんのんやまにもやってきて、二声三声、「コーン、コーン」と鳴くことがあったという。

三、西尻池のきつね（西尻池町四丁目・旧西尻池村）

大正時代の中頃の話である。

西尻池にしりいけの若い母親が幼い子供を、夜半、小便に立たせた。当時の農家の便所は、母屋から離れた庭先にあつたため子供は恐がった。その夜は便所に行く途中、遠くの田畑まではつきり見えるほど、月が明るかった。

見ると、西方のあぜ道を提灯を手にゆらゆらとこちらに歩いてくる人影があつた。最初はそれを夜番の人だと思つて見ていたが、その人影は住吉神社の前の塚まで来た時、突然空中高く跳びあがつたかと思つと、塚の中へすつと消えていったという。

ノート

住吉神社は西尻池町二丁目にあり、西尻池村が氏子地。

数珠くり（旧野田村）

野田村では夏になると病気がはやるというので、おばあさんたちが集まって、念仏にあわせて大きな数珠じゆずをくつたという。数珠の珠の直径は五センチメートルほどあり、数珠を広げると、縁台床几の大きさほどあつた。

四、荻藻川河口のきつね塚（荻藻通七丁目・旧西尻池村）

荻藻川^{かろも}の河口付近に、小さな丘があつた。そこには狐^{きつね}が祀^{まつ}られており、きつねの塚と言われていた。現在、尻池^{しりいけ}南部公会堂の敷地内にある小さな稲荷^{いなり}神社でも狐^{きつね}が祀^{まつ}られているが、昔はたくさん狐^{きつね}が農業の神さまとして祀^{まつ}られていた。



尻池南部公会堂にある稲荷神社

ノート

大昔から農業を営んでいた私たちの祖先が、田畑に出て最もよく出会った身近な獣が狐だったのであろう。商業が発達するまでは、稲荷の神はその名の通り稲を実らせる農業の神であつた。その使いが狐だと信じられていたのである。

五、きつねに会った話（旧西尻池村）

ある男が神戸の北の山中の村で、用事で遅くなって家路を急いだことがあった。もう日がとつぷりと暮れてしまい、暗くなった山道を歩いていると、後ろからカラコロ、カラコロと下駄の音がついてきた。

「はて、こんな時刻に女一人で山の中を歩いているのかしらん。」
カラコロ、カラコロ。

「ははあ、さてはこの辺にいる狐きつねに違いない。」

振り返ってみると、美しい娘の姿がちらちら見えた。

（ようし、ひとつ捕えてやろう）

そう考えた男は、

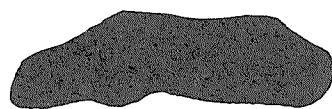
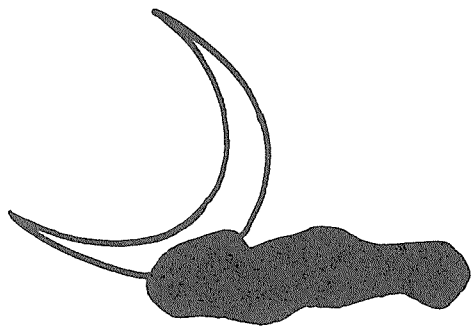
「娘さん、もう遅いから家まで送って行ってあげよ。」

と突然声をかけると、娘の手を強く握って、村をめざしてすたすた歩き出した。後ろも振り向かずに、カ一杯手を握って娘をひきずった男は、自分の家に入ると、

「おい、おもしろいものを連れて戻ったぞ。」

と、家族に声をかけた。

家の者が戸口の所にやってくる、男はしっかりと木の枝を握って立っていたという。





六、双子池の河童（海運町二・三丁目、本庄町二・三丁目・旧野田村）

野田には、大正末期まで双子池という大きな池があり、その水が周囲の田を潤していた。その池の表面は藻が繁茂して、一見するとちようど美しい野原のようだった。

この池には河童が住んでいたという。

昔、野田の村人が宴会からの帰り道、真夜中に酔っぱらってこの池のほとりを通りかかった。ところが歩いてても歩いてても家に帰れない。とうとうそのうちに夜が明けてしまった。ハッと気が付くと、なんと自分はただ池の周りをぐるぐる歩くと歩き回っていただけで、おまけにお土産にもらった折詰の中身もきれいになくなっていったという。

人々は河童に化かされたのだと話し合った。

ノート

水の乏しい瀬戸内一帯の農民は、多くのため池を作った。村一番の大きな池を大池、底の浅い平らな池は皿池、深くて底の急な池をスリバチ池と呼び、大小並んだ二つの池は夫婦池、同じような大きさで並んだ池を双子池などと、どここの村でも名付けている。ためても水のもれる池には籠池などという名も付いていた。野田の双子池は大正末期から昭和の初めにかけて埋め立てられ、現在の海運町、本庄町の二・三丁目となっている。

七、高神滝の大蛇（旧西代村）

高取山たかとりの山腹、静かな谷間にある高神こうじんの滝は、高取山の神社に参拝する人々が身を浄きよめるための禊みそぎの場である。

百年ほど昔、ふもとの岡本平左衛門おかもとへいざえもんという人物が、ある夜、高取山の夢を見た。

「はて、大きな岩の上で白い大蛇が寝ておった。その岩の下から、美しい清水が流れ出していたが……。」

山に登って、夢で見た岩を見つけた平左衛門は、そこに行場ぎょうばを作った。それが、この高神の滝だという。

ノート

行場を作ったのは明治三十五年のことだという。高取山には、さらに西方の平和台方面からの登り



高神の滝

道にタイシヤ滝という行場もある。

八、蛇持の池（旧池田村）

今の高取台中学の東側に、蛇持の上池・蛇持の下池という二つの池があつた。この池には大きな蛇が住んでいて、それが池のヌシだといわれていた。ある村人は、この池でヌシの大蛇を見て、恐ろしさのあまり、村へ帰つてからもふるえが止まらず死んでしまったという。

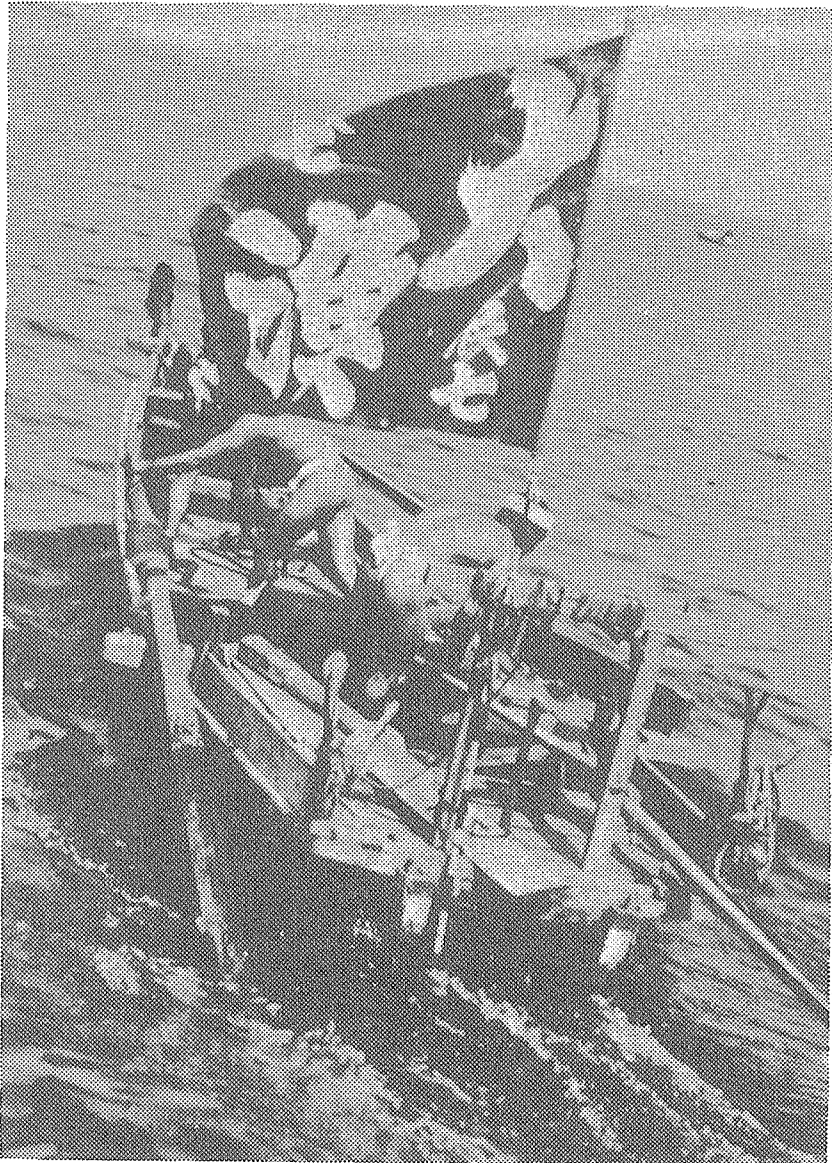
九、五位ノ池のサギ（五位ノ池町・旧西代村）

五位ノ池町という町名は、昔あつた大きな池の名にちなんでいる。この池は西代村の田畑に水をそそぐため池であつた。

南北朝時代の頃、後醍醐天皇が京都の神泉苑の池で遊ぶサギに目を止められ、役人に捕えるようにお命じになつた。役人が捕えようとするので、とっさに「天皇のご命令だぞ」と叫ぶと、サギはたちまち池に舞い戻り、羽根を垂れたという。そこで天皇は、このサギ

に五位の位いをお与えになったので、それからはゴイサギと呼ばれるようになったという。
このゴイサギがよく集まっていたところから、この池を五位ノ池と呼ぶようになったという。

十、駒ヶ林の海坊主（旧駒ヶ林村）



昔の駒ヶ林の漁船

明治時代のことである。

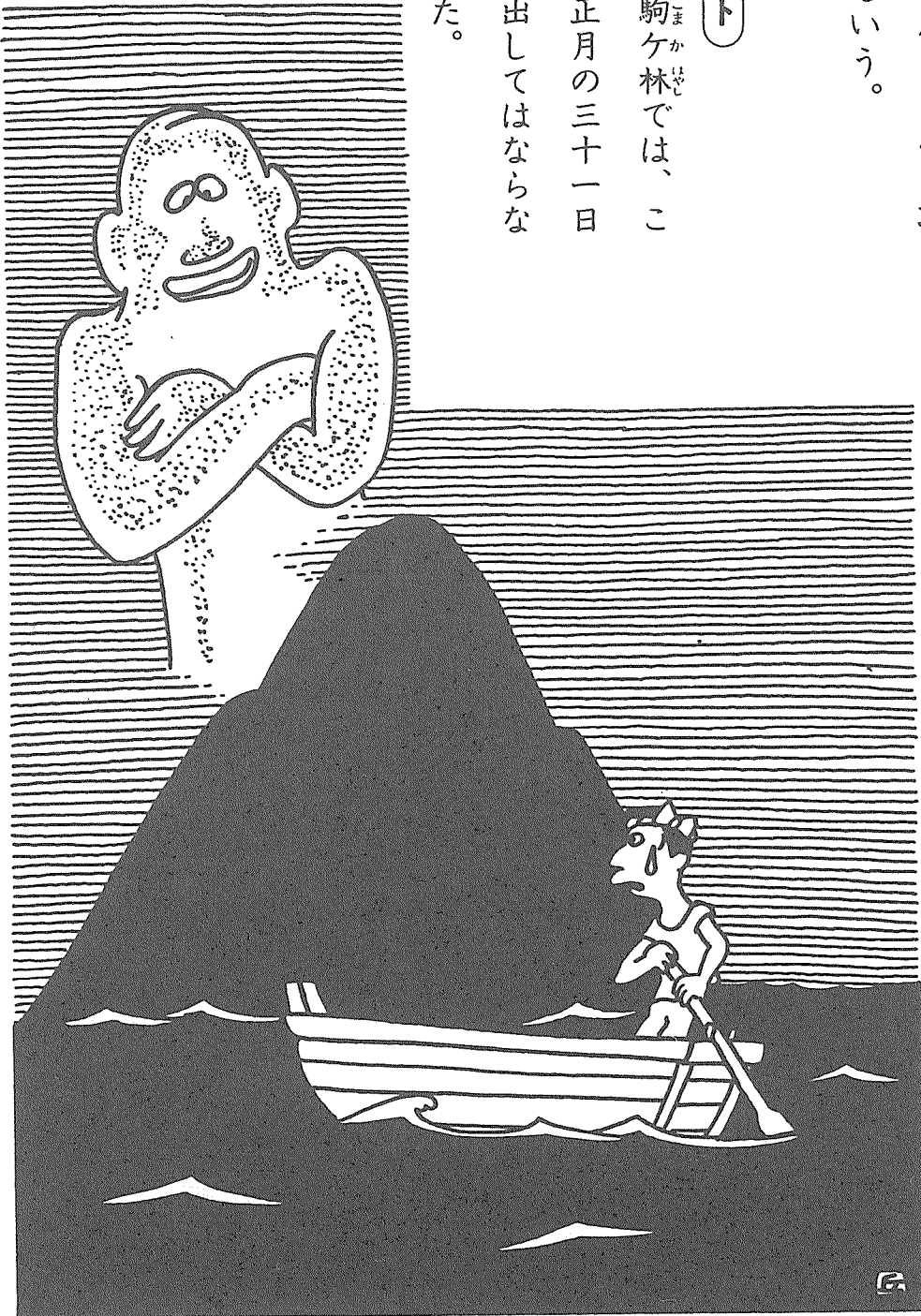
ある男が一月三十一日に船を出して、海上を進んで行った。

すると突然、海上に大きな山のようなものが現われた。驚いてその山を避けようと思ったが、船をいくら横にまわしても思うようにその山を避けられない。とうとう観念して、そのまま山に向って船を突き進めると、不思議にも山は消え、無事、港ま

で帰り着くことができたという。
それ以来、一月三十一日に
海に出るとお化けに会うとい
うようになったが、それは海
坊主なのだともいう。

ノ
ー
ト

漁業で栄えた駒ヶ林^{こまかぎ}では、こ
のように旧暦の正月の三十一日
には絶対に船を出してはならな
いと言われていた。



池や川にまつわる話

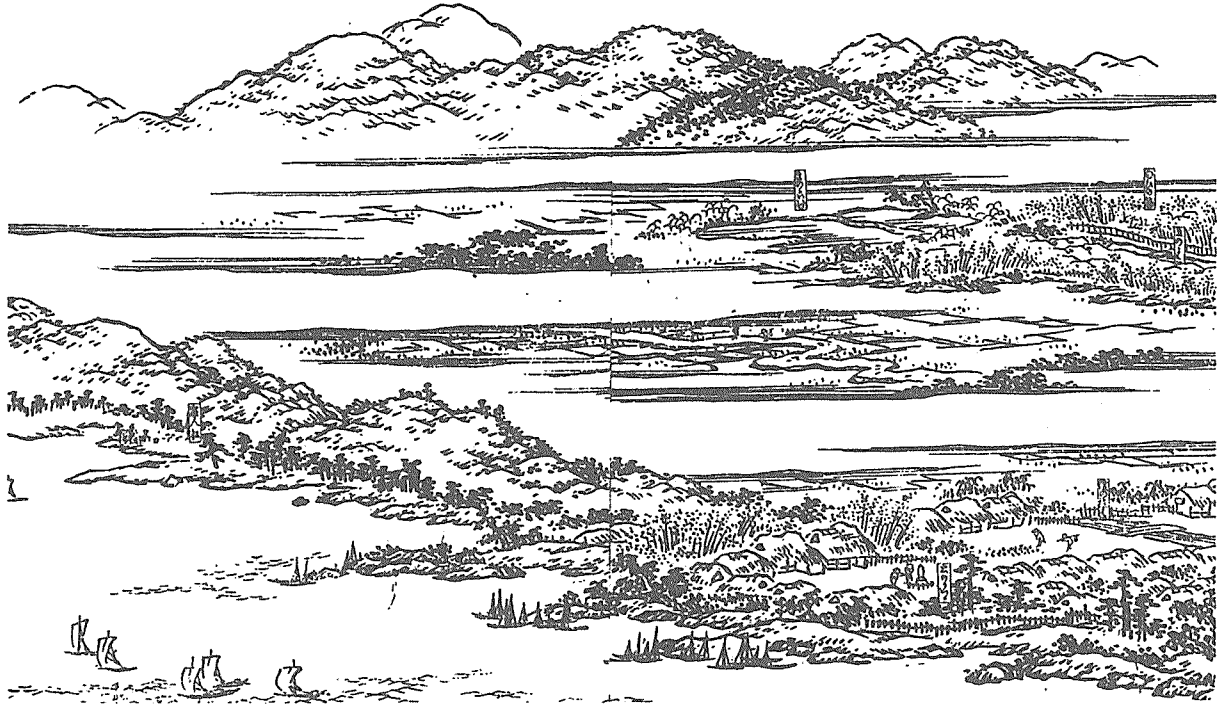
池のたくさんあった池田村（旧池田村）

池田村には、蓮池はすいけのほかにも、たくさんのため池があった。現在ある学校のなかには、それらの池を埋め立てて作ったものが多い。蓮池はすいけ小学校は蓮池のあと、長田高校は谷御池たご（谷川池）のあと、常盤女子高校も福ヶ池という池のあとであり、西代にじだい中学校も池を埋め立ててつくられた。このほかにも蛇持じやもちの池などがあり、これらの池はすべて灌漑かんがい用のため池だった。

池田村の人たちは、それらの池によくコイを放していた。毎年一つずつ池の水を抜いては、大きくなつたコイを捕え、村人全員で料理して食べたという。池をさらえたときには、コイやフナだけでなく、ときにはスベツタ（ウナギの子）なども捕えることができた。また、十数年ぶりにさらえたような池には、大人でもかかえきれないくらい大きくなつたコイがいた。

一、東尻池村のいわれ（旧東尻池村）

高取山南麓たかとりのこの地方は、大きな河川もなく、農業用のため池がたくさんあった。荻藻川かろもぞいにも多くの池があつたが、その中でも真野池まのという池は、山側から数えると最後（川尻）にあつたので、尻



200年前の真野池（『播州名所巡覧図絵』より）

池と呼ばれた。この池の付近は、大化の改新の頃から苧藻川を境に西と東に集落が分かれていたので、東の集落を東尻池村、西の集落を西尻池村といった。昔、大和から明石に向う途中、柿本人麻呂がこの池のほとりの字中井といふところで、乗っていた馬の足を洗ったと伝えている。

二、七つ井戸（旧西代村）

西代の東に七つ池とか七つ井戸とか呼ばれる小さな泉があった。平安時代須磨にわび住していた光源氏が、馬に乗ってこのあたりで遊んだとき、馬のかかとをひたして休めたところだとも、源平合戦のとき、源氏の七人の勇者がかけめぐって戦ったのちに、馬の足をひたして休めたところだともいう。また、ここで馬の足をひたして休めたのは、源義経だ

とも伝えられている。



「嫁に行くのは西代いやや、遠い莊山へ水くみに」という俚謡が残っているが、西代では、水くみが重要で苦しい労働であった。字莊山に西代の七つ井戸とよばれる井戸の一つがあった。このほかにも井戸は字八幡西、字大日前と字上水笠との境、字西替地などにもあった。

三、水 笠 川 (旧西尻池村)

蓮池から西尻池村が用水を引いていた水路が水笠川である。この川は、現在の御屋敷通二丁目と三丁目の間の通りをまっすぐ南下し、西尻池村西部の田畑を潤していた。この水笠川が水笠通の名の由来である。

石にまつわる話

一、長田の夜泣き石（長田町三丁目・旧長田村）

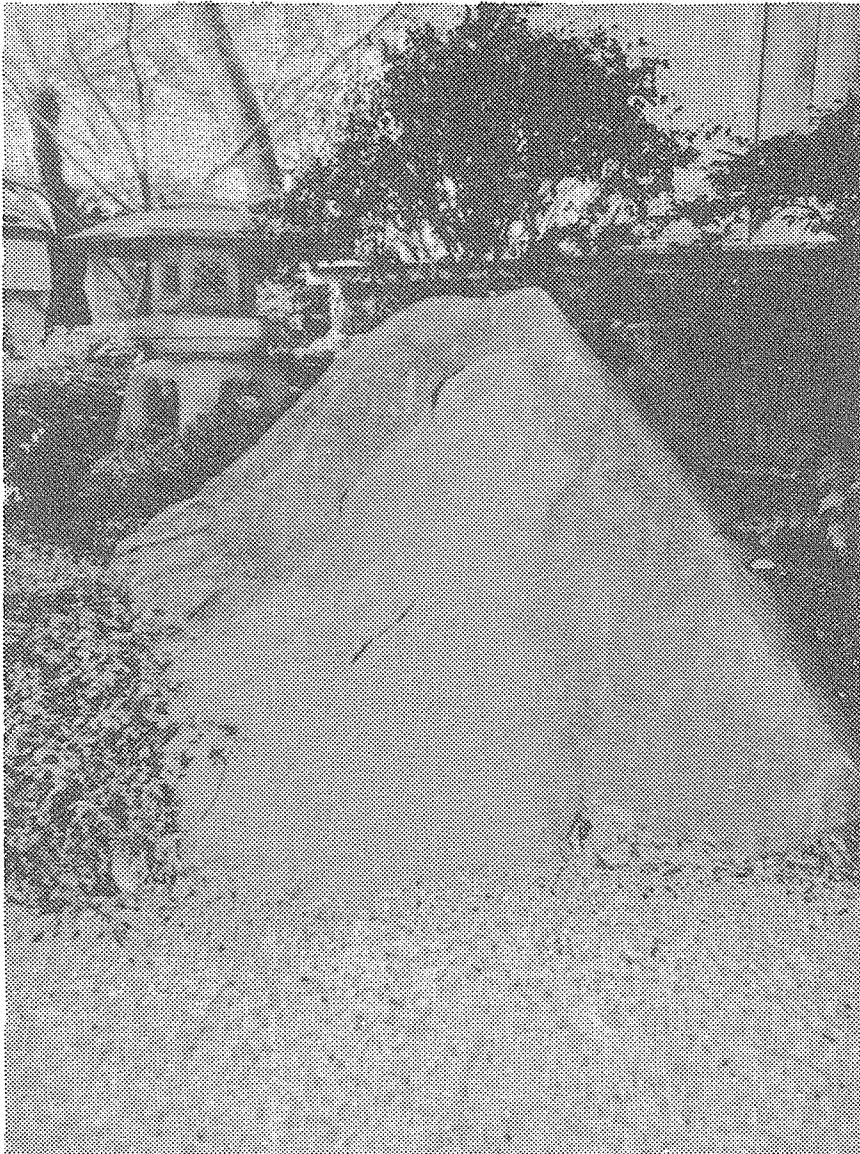
長田から荊藻川をさかのぼって明泉寺の谷を北に進み、白川に通じる長坂越えと呼ばれる山道があった。この長坂の道端に円すい形の富士山のような姿をした石があった。

「この石を、長田神社の庭石にしよう。」

と長田の村人は、苦心してその石を運びおろし、神社に納めた。贈られた長田神社の当時の神主は、

「神社にはたくさん庭石があるから、この見事な石はわが家にもらって帰ることにしよう。」

と、平野の自宅に持ち帰った。その夜のことであつた。夜も更けた頃、神主の家では、どこからともなく、すすり泣くような声だったのである。



長田の夜泣き石

「庭で誰かが泣いているような声がするが……。」

「シクシク、長田へ帰りた。シクシク、長田へ……。」

庭を見ても、誰もいない。いく夜もそんなことが続いた。

ついに神主は夜通し庭で見張りをすることにした。そしてその夜も、泣き声が聞こえた。

「シクシク。シクシク、長田へ帰ろう……。」

どこから聞こえてくるのか調べてみると、庭に置いた富士山の形の石から聞こえてくるようであった。

見ると、石の表面がじつとりとぬれていた。

翌朝、さっそく神主は村人に頼んで石を長田へ運んだ。これを夜泣き石と呼んで、神社の境内に安置した。

ノート

この夜泣き石と称する石は、今も長田神社の社務所の裏にある。夜泣き石の伝説は各地にあるが、石について、灘の水車新田では夜な夜な這い出してくる蛙石、明石金ヶ崎には成長して大きくなる黒岩伝説などがある。

二、六字名号石（六地藏）（駒ケ林町一丁目・旧駒ケ林村）

文政六年（一八二三年）、駒ケ林村の地に來た徳本上人は、その当時轉越に出没して旅人を悩ませていた患者を、仏教の力によつて六字名号石をたて、その下に封じ込めたという。この名号石には二つの不思議な話が伝わっている。

明治の末頃、六字名号石の裏手（北側）に大きな空家があつて、近所の子供たちの遊び場となつていた。ある日、子供たちが遊んでいると、バリバリと突然大きな音がして家が傾き始めた。もともと名号石の方に傾いていた古い家だったので、みんなは大急ぎで外に避難した。しかし、どういうわけか家は名号石の方には倒れず、北側の井戸の上に崩れ落ち、名号石は無事であつたという。

また同じ頃のことだが、人々があまりにこの石を信心するので、ある男が名号石の前にわざと杭を打とうとした。まわりの者はばちがあたるとその人を止めたのだが、本人はそんなことには一向に耳を貸さず、午前中に杭を打ち、昼食をとり家に帰つた。その男は午後になつても、なかなか杭のところまで戻つてこなかつた。みんなが心配していると、あれほど元気だつた男が家に帰つてから急に苦しみだし、その日のうちに死んでしまった。

このように、その名号石は靈驗あらたかで、この名号石のおかげで駒ケ林ではいまだかつて大きな海難事故がなかつたという。

ノート

徳本上人は、浄土宗の僧で諸国を行脚あんぎゃしてわかりやすく仏教を伝えた。彼独特の萬名号つたなまごうと呼ばれる書体の六字名号碑が、彼の行脚した各地に建てられている。

三、大阪城の石（旧駒ヶ林村）

駒ヶ林こまがぼしの浜の沖で海に潜ると、海底に二畳敷ぐらいの大きな御影石のみかげいしが二つ沈んでいたという。その石は桃山時代ももやま、大阪城築城の折にどこからか海上を運ばれてきて、ここで沈んでしまったものだといわれていた。

ノート

今ではその場所も埋め立てられて、石のありかもわからない。

四、西代のチリンさん（旧西代村）

西代せんだいの民家の中に、「チリンさん」と呼ばれている石がある。このチリンさんを大切にお祀りまつり

すると一門が栄えるというが、逆に粗末に扱うと家が没落したり、家を継ぐ男の子が欲しくともできなかつたり、とかく良くないことが起こると言われていたので、大切にお祀りしてきたという。

ノート

チリンさんは「地神ちじんさん」で、各地で屋敷内に祀られていた土地の神。

高取神社の獅子舞

高取神社の春祭りには獅子舞ししまいが舞われた。子供用の獅子から大人用の獅子まで、多いときで五頭出ていたという。

子供獅子舞はかわいいと評判がよく、ほかの神社からも来演の依頼があつたらしい。

木にまつわる話

一、西代村の楠さん（西代通二丁目・旧西代村）

今から百五十年ほど昔、天保年間のことである。領内を巡視に来ていた代官は、夜半に驚いてとび起きた。彼の泊った民家が火事を起こしたのである。代官は驚いて帰ってしまったが、それから毎夜、西代村のあちこちでよく火事が起こった。



西代の楠さん

「どうしたことだろう。」

「わしの家も焼けてしまった。」

とうとう西代村のほとんどの家が焼けてしまった。そのうち、

誰言うともなく、

「あれは楠の大木の根元に住んでいる狐のしわざじゃ。」

「欲深い庄屋さまが、あの木を切り倒して樟脳を取ろうと、木の太い幹に斧を打ちこまれたからじゃ。」

「それで根元に巣くっていた

狐が住み家を失なうので、しかえしに村人の家を焼いているのじゃな。」

庄屋が楠を切るのを止めると、ブツツリと火事はなくなった。それ以来、その楠の大木は西代の守り神と信じられ、「楠さん」と呼ばれるようになり、誰もこの木を切ろうとしなくなった。

木の根元には、お稲荷さまが祀られ、誰からともなく、

「楠さんは村の守り神だ。この木を切ると、西代に火事が起こる。」

と言われるようになった。

ずっと後になって、道路を広げようとしたときも、この木に斧やのこぎりを入れようとした人々は、わけのわからない熱にうなされたり、血を吐いてもだえ死んだという。

ノート

西代通二丁目の道路わきのこの楠の大木は、樹齢数百年といい、道路整備の際も切られなかったために、この部分だけ道路が首のように狭くなっている。樟と楠は本来は別種だが、しばしば混同される。

雨乞い

鉦・太鼓で囃子をとりながら、柴を集めて晩に高取山に登り、高取神社の灯明の火をもらい、燃やしたという。

そのとき、「天に汁気はないかいな。あつてもものうても、降ってくれ。」などと唄ったという。

二、柳の木（旧駒ケ林村）

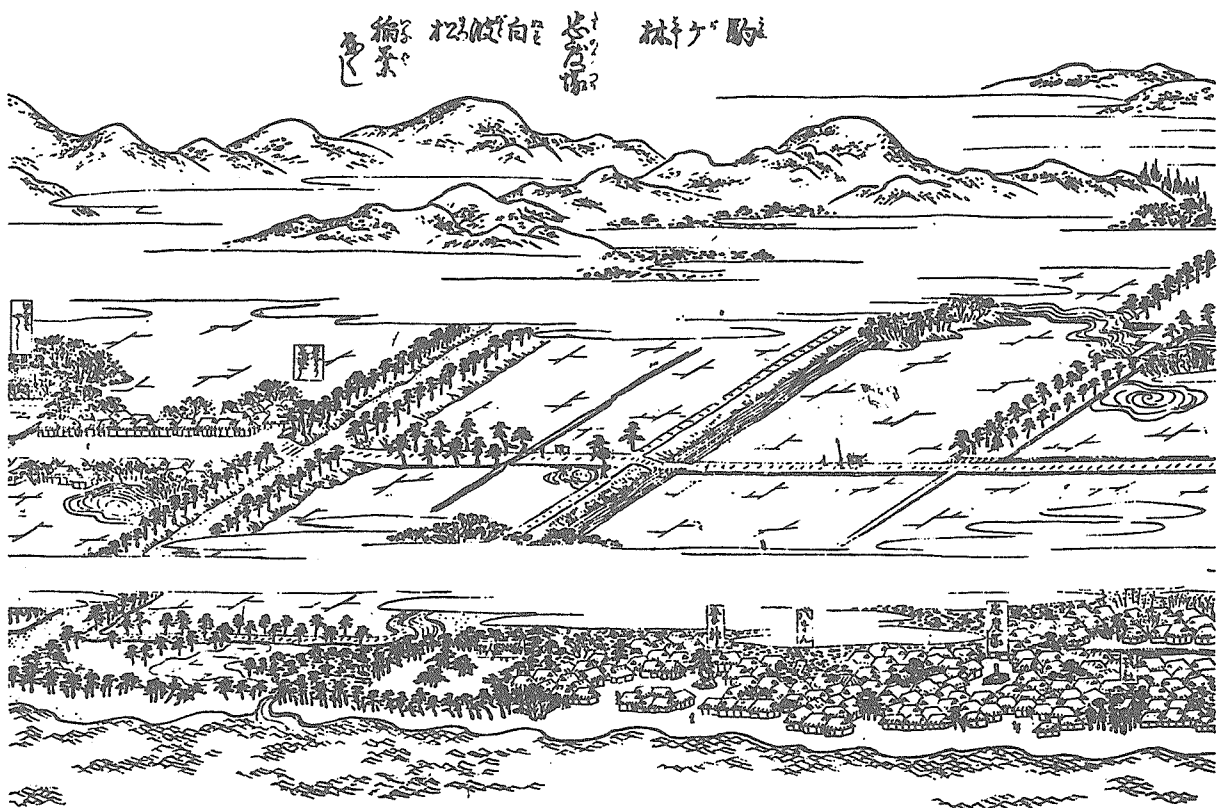
明治の初め頃、駒ケ林の民家に一本の巨大な柳の木が生えていた。当時、駒ケ林からは美しい砂浜づたいに大阪まで歩いて行けたそうだが、大阪からの帰途、人々はいつも駒ケ林のこの柳の木をめざして帰ったという。

三、源氏松

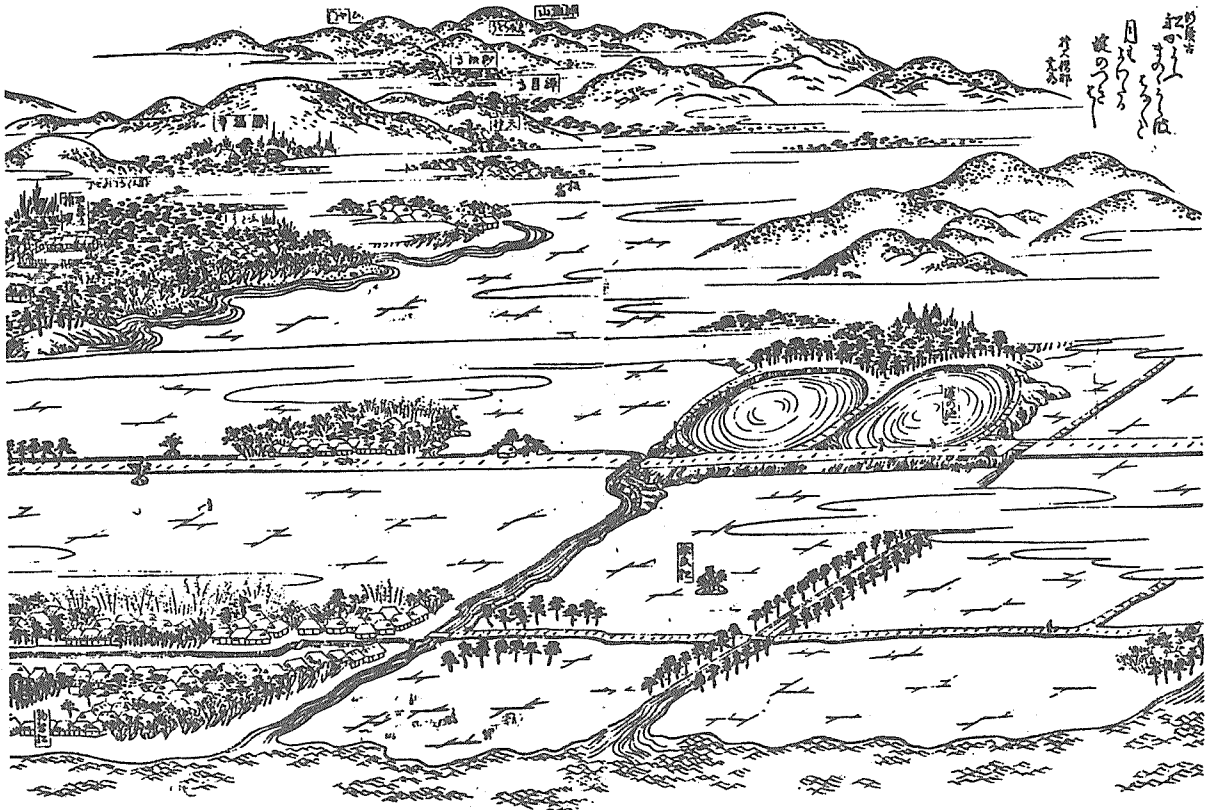
（駒ケ林町二丁目・旧駒ケ林村）

駒ケ林村出在家町（現在の二丁目）の田ん圃の中には「源氏の松」と呼ばれる大きな松の木があった。それは光源氏が須磨にわび住まいしていた時に、この地へ来て自ら植えたものだと言われていた。

また一説には、一の谷合戦のときに、この松の下



200年前の長田地方。浜辺に東から忠度塚，駒ケ林神社，盗人松が見える。（『摂津名所図会』より）



200年前の長田地方。源氏松が見え、西国街道沿いに、蓮池が描かれている。(『摂津名所図会』より)

で源氏の武者が勢ぞろいしたところから源氏の松と呼ぶのだとも言われている。

この松は江戸時代には根元が二尋(約二・六メートル)もあり、一本の木なのに雄松と雌松の二種類の葉が生えていたため、二葉の松と呼んだり、葉が茶せんのようにしなやかだったので茶せん松と呼んだりもしていた。

ノート

須磨から和田岬にかけては、白砂の美しい海辺に、緑濃い松林があり多くの名松が生えていた。この二葉の松もそのひとつで、これが二葉町の名の起りである。

四、盗人松(旧野田村)

野田から西、須磨の海辺に続く美しい松林の中に幹の太さが約五メートルもの大きな松の木があった。



その松は波打ち際にあつたため、引き潮になるとその根が姿を現わし、からみ合つた太い根と根の間を人間がくぐり抜けられるようになっていた。

さて、いつの頃からか、この松は「盗人松」と呼ばれていた。それは、よく盗賊が盗みをする前に引き潮を待ち、この松の根元をくぐっていたからだという。この松の根と根の間を身体のごこの部分も根に触れずにくぐり抜けられれば、その晩の盗みは成功するとされていた。

ノート

中国で後漢の時代、白波谷という地に潜んでいた張角らの一味を白波賊と呼んだ。そこから盗人の陰語として、白波という言葉を使っていた。この松の根元には断えず白波が押し寄せていたことから、盗人松と呼ばれるようになったと考えられる。

五、伏拝みの松（山下町四丁目・旧西代村）

昔、山下町四丁目のあたりに八幡神社があつて、その名残りとして地名に字八幡前、字八幡西などが残っている。この字八幡前に、「伏拝みの松」と呼ばれる松があつた。

室町時代の禅僧月庵禅師は、修行にゆきづまったので明の国に修行に行こうと思ひ、兵庫の津にやって来た。月庵禅師は、そこで中国に渡ることを但馬の国にいる師のところから知らせた。すると、

師匠からはひとこと、

「足元を見よ。」

という答えが返ってきた。

「足元を見なさいとは、どういうことだろう。」

月庵禅師は悩んでしまった。ある夜、月庵の夢の中に熊野権現くまのごんげんが現われ、

「私がそなたの師匠の口を借りて、自分の足元を見よと言ったのだ。兵庫の西の高い山のふもとに、修行にとても良い土地がある。」

と言つて消えてしまった。

それから月庵禅師は毎日、高取山の西の峰で修行をするようになった。そうしたある日、ふもとの一画いちわに神々こゝろしく輝いている土地があった。

「権限さまが教えて下さったのは、この土地に違いない。ここに寺を建てよう。」

月庵禅師がここに建てたのが、高取山西麓の禅昌寺ぜんしやうじだという。この時、この土地を教えてくれた熊野権現を寺の守護神として祀りまつ、月庵は寺から七、八丁離れた字八幡前の松のところで毎朝、熊野の方に向かつて権現さまを拝んだという。それでこの松を「伏拝ふしおがみの松」と言うようになった。

ノート

禅昌寺の縁起では寺の創建は延文年間えんぶんねんかん（一三五六年〜一三六一年）のことだという。月庵宗光げんこうは、美濃の人で、唐に渡つて黄檗山おうはくざんで臨濟禅りんざいぜんを修めて帰国した。

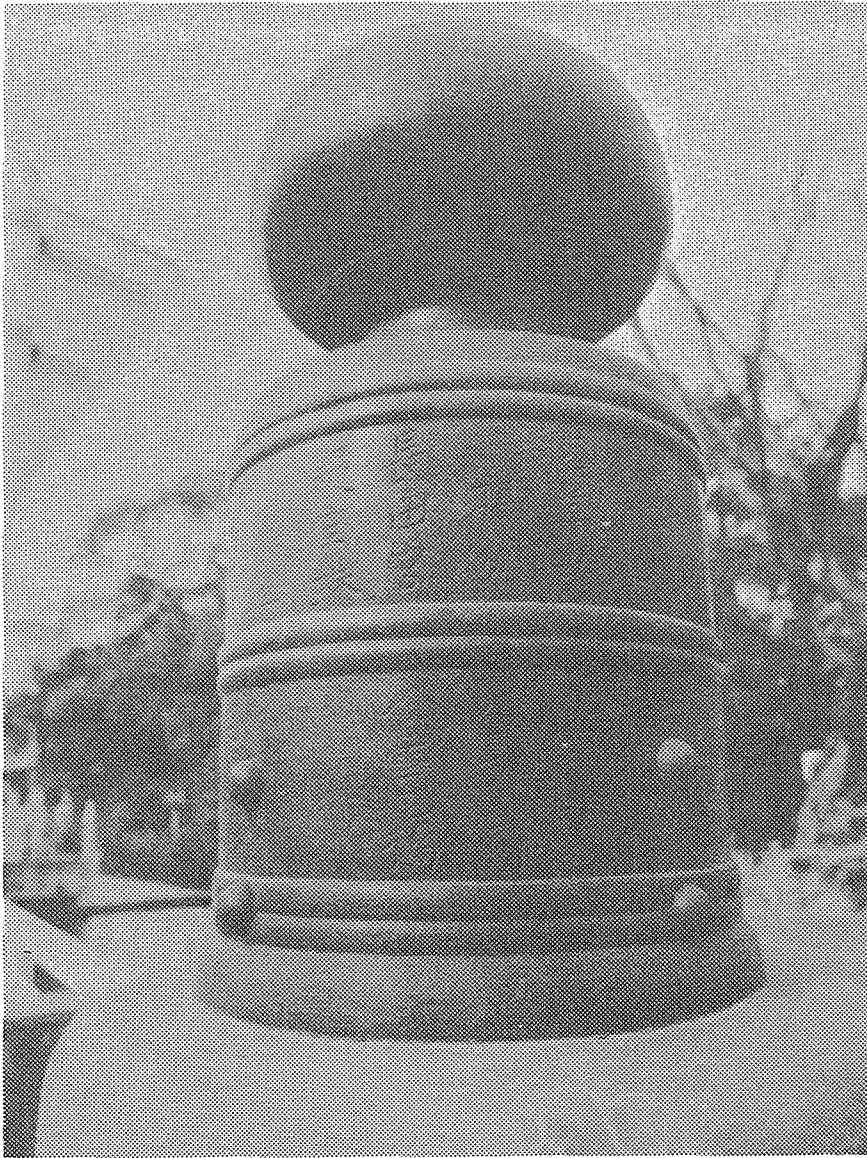


5

橋にまつわる話

一、淀の継ぎ橋（駒ケ林町一丁目・旧駒ケ林村）

駒ケ林村東ノ町（一丁目あたり）には、昭和の初め頃まで、東西に流れる幅一メートルほどの小川があつて、そこにはめずらしい橋が架かつていた。数個の長方形の石を少しずつ、ずらせながら架けてあり、淀の継ぎ橋と呼ばれていた。



八雲橋の欄干

ノ
ー
ト

継ぎ橋は、ところどころに柱を立て、上に板を継ぎ渡し、いくつも橋を継ぎ足したように見える橋。

二、八雲橋の欄干

（長田町三丁目・旧長田村）

長田神社の社前で荇藻川にかかつている橋が八雲橋だ。明治の終わり頃まで、高取山や口一

里の山から流れ出るこの川は幅も広く水も澄んでいて、鰻や魚が多く住んでいた。そしてこの橋の下手で分水されて、西に流れる水は谷御池（上池田）からの落水と一緒に西代の蓮池に流れ込んでいた。

明治三十六年、このあたりを襲った大雨があつて、荊藻川にも泥水があふれ、ついに八雲橋は激流に流されてしまった。雨もあがつて、人々が洪水のあとしまつをしていると、見知らぬ人々が立派な橋の欄干を運んで来た。

「これは、この地の八雲橋の欄干でしょう。」

「おお、大水で流れてしまったものです。どこから届けてくださったのですか。」

「私たちは、海の向こう淡路から来た者です。淡路の浜に立派な欄干が流れつき、それに八雲橋の銘が刻んであつたので、届けに参つたのです。」

こうして八雲橋は架けなおされたという。

また、現在、神社の西側には高壁と川の間細い道があるが、明治の初め頃にはこの道はなく、飛び石を踏んで通っていたという。その頃の長田には真陽小学校（二葉町）しかなく、高取山の方から来る子供たちは川の飛び石を踏んで来なければ、かなりのまわり道だったので雨が降ると大変であつた。

また、冬の冷たい風の中では、川つぶちのほうに西風があたらず暖かだったという。

三、滝

見

橋（明泉寺町三丁目、長田天神町五・六丁目・旧長田村）

大日寺だい にちでらのバス停からまっすぐ北に進んで行くと、長田天神町てんじんへ曲がる途中、荻藻川かきもに滝見橋たきみばしという橋が架かっている。

古くからここは滝ヶ谷たきがたにと呼ばれ、かなりの山奥であったところから夏でもひんやりとしていた。昔の橋は木製で、牛がやつと通れるくらい小さく、真下に見下ろす川は、細く深い流れであった。

かつては、ここにいくつかの巨岩があつて、川は細い水筋だったが滝のように落ちていた。その滝の東の上手には不動明王ふどうみょうおうが祀まつつてあつた。しかし昭和十三年の水害のときにお不動さんも土砂に埋もれてしまった。滝のあつた川筋もいく度かの豪雨にあつて段差もなくなり、滝はなくなつてしまった。

か

く

ね

里

一、火 吹 き 竹（堀切町・旧長田村）

明治三十年ごろの長田村は、神社周辺を中心に戸数約百六十戸。神社裏手の長福寺をすぎると、北へは明泉寺まで畑が続くばかりであった。明泉寺の付近には、わずか十六戸の農家しかなく、そこから奥には人家がなかった。

それでも古くから口一里山、奥一里山といって長田・池田・西尻池・東尻池ら四カ村共有の入会地があったから、村人たちは山をけずって細い細い道をつけた。この山道は山を割るようにして堀切をつけたので堀切とか、細くて長い様子が似ているところから火吹き竹と呼んだりした。

火吹き竹を通ってフンバ（はつたけ）を採りに行ったり、冬の間には口一里へ柴刈りに行ったりしたが、冬は特に峠のあたりは風がきつく、こごえるほどに冷たかったという。

一里山など入会地の山番が花山町にいたが、長者町のあたりは長者が平とよんで平家の落人が生活していたころからついた名だともいわれる。

この他、鹿松峠や源平平、桧川あたりにも平家の落ち武者のかくれ里があったという。

二、小屋の谷（旧西代村）

高取山の地方は昔から何度も戦乱にまきこまれた。源平合戦、南北朝の乱。そのたびに田畑は荒らされ、家は焼かれた。

ときには命さえ危険にさらされることもあった農民たちは、高取山の山中に戦いが終わるまで、ひっそりと隠れていたといい、その跡に宇小屋の谷という地名がついた。

ノート

宇小屋の谷は、須磨区大手町や西須磨の背山にもあり、同様の伝説が残っている。薪炭草刈りなどの山の仕事のための小屋があつたのだろうか。

三、長者町（高取山町・旧西代村）

昔、高取山腹に住んでいた海賊は、はるかに沖を通る船を見つけてはそれを襲い、奪った金品をこっそり高取山の谷間にかくしていた。この豊かな海賊が住んでいたところを人々は長者が原とよぶようになった。それが高取山中にある汐見茶屋のあたりの平らな土地だとも言われている。

昔
の
行
事

一、野 施 行 (旧野田村、西尻池村、池田村)

野田村では、昭和の初め頃まで、二月のある夕方に子供達が五、六人集まって提灯を持ち、

「センギヨウ、センギヨウ、ノセンギヨウ。」

と唱えながら田のあぜ道に油揚げや団子を置いて歩く行事があった。

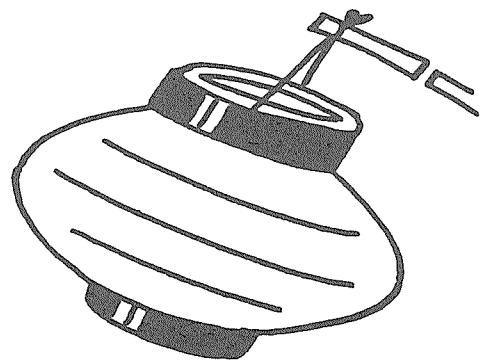
これは、田畑や野の動物(狐や狸)に、食べ物を与えて、豊作を祈願するものであった。

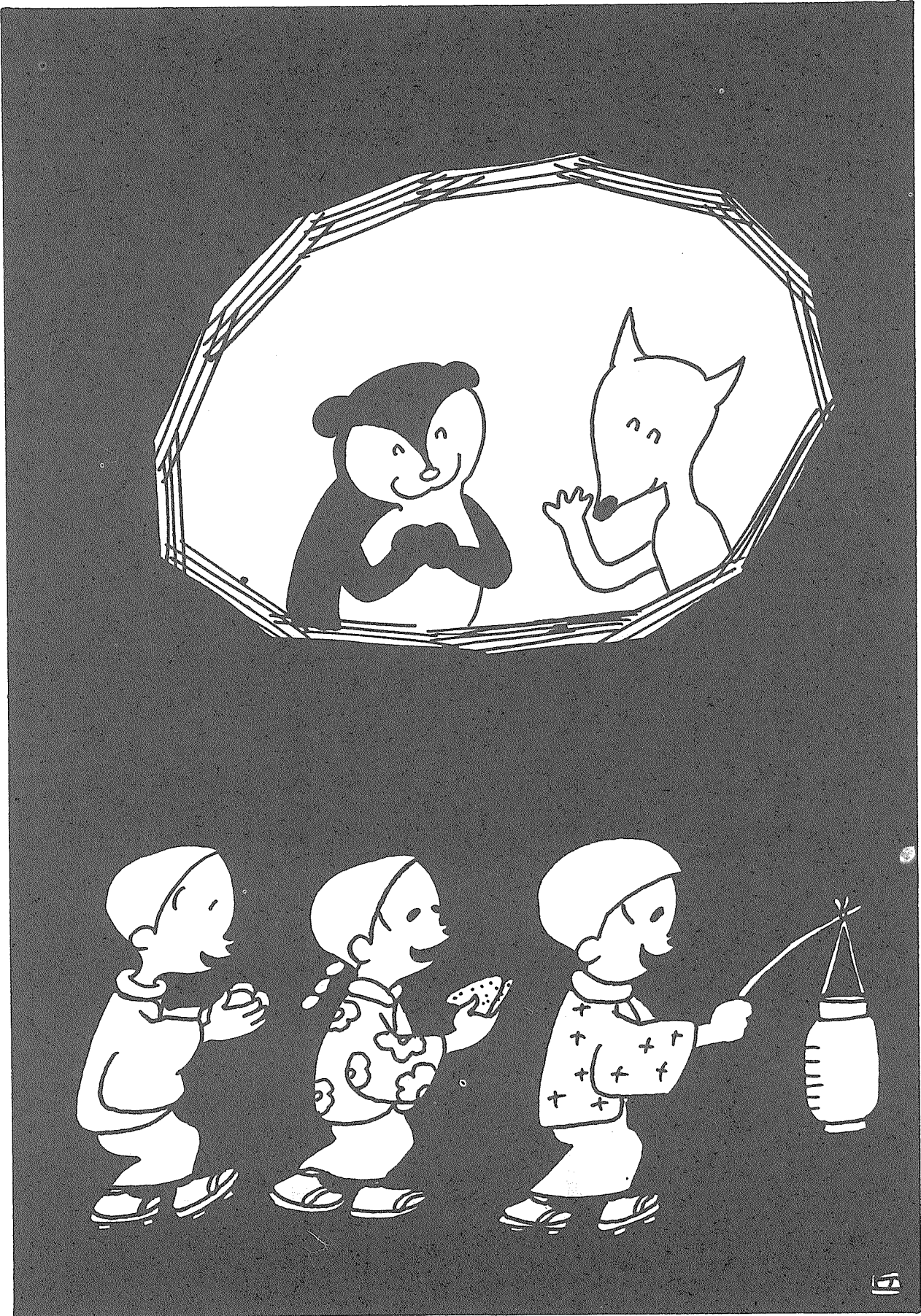
西尻池村でも「野施行」と呼ばれる行事が昭和の初め頃まであった。

毎年、寒の入りになると、西尻池村の人々は、笹に赤い短冊を数枚ぶらさげて高取山の稲荷神社へ行列をなして参詣した。そして油揚げや餅などを供えてくるのであるが、そうするとしばらくして狐が現われて、それを持っていくと言われていた。

また池田村にも同じような話がある。

昔は、寒になると稲荷の神を信仰する人たちが神戸中から集まって数人ずつに別れ、高取山に寒行にやってきました。夜遅く、提灯に火をつけ、油揚げやこわ飯、もち豆を供えつつ、「野施行(のーせーんぎょー)」と唱えながら高取山を登っていくのである。稲の豊作を祈り、野にいる動物に施しをするのが目的で、今でも寒にはいると、高取山には揚げや餅が供えてある。





二、常福寺のてつきりさん（大谷町三丁目・旧西代村）

春の彼岸の入りになると、西代村の子供達は大忙しであった。お墓まいりに供える椿、しゃしゃき、ねこやなぎなどを、子供達が高取山まで取りに行つて、村の一軒一軒に配つてまわることになつていたからだ。

子供達は小さな「米地藏」を入れたフツコ（ワラで編んだ運搬用の道具）をかついで、村中をまわつた。その中に花を渡したお礼としてお米を一、二合、あるいはお金を入れてもらうのである。こうして村中をまわるとき、子供達は常福寺から借りてきた「てつきりさん」と呼ぶ地藏さまを、首に繩をかけて引きずりまわした。泥がいつぱいたまっている溝の中に投げ込んで、

「てつきりさんが喜んどの。笑いよる。」

と言いながら引きずりまわすのである。てつきりさんというのは「手切りさん」で、乱暴に引きずりまわされて両手がすり切れてしまったためにその名が付いたという。



明治の終わり頃まで、この行事は続けられていた。お地藏さまに悪さをしながら祈る風習は、垂水区舞子町のたたき地藏、西区平野町のしぼり地藏、明石市の油かけ地藏などよく見られる。

三、わんない（旧西尻池村）

村の子供達は、毎年八月の初め、虫送りをした。旧荻藻川かろしの川原に集まって、太鼓や鐘を鳴らし、松明たきまつに火をつけ提灯を持って、

「虫送りに実盛や供ばかり通るわー。」

「わんないくるわい、わいわいわい……。」

というかけ声とともに、伝福寺でんぷくじまで行列を連ねた。

他の村の人は、自分たちの村の稲を焼かれると困るといって、柄杓えしきを持って火を消しに来たという。夕刻、七時から十時頃まで、その夜は子供達でにぎやかであった。

この行事は昭和の初め頃まで続けられていた。

四、亥の子（旧西尻池村）

毎年、十一月の最初の亥いの日の夕刻、西尻池村にしりいけの子供達はわらをたばねて、鬼の金棒のようなものを作り、それで地面をたたきながら家々をまわって餅もちをねだった。

「いのこいのこいの子の晩に餅くれる家は、ここの庭に井戸堀りそめて水が湧かずに金が湧く。」



また、子供たちは、

「いのこの餅はついてもおえん、おえんの兄はまだ嫁はやい、ひとつ祝いましょう。」

と歌い囃しながら新婚家庭を襲撃した。ときには戸や窓をたたき割って、水をかけられたり、逆にお菓子をもらったりして楽しい一日を過ごしたという。

また、この日は箕に土を盛り、枘に煮込みご飯を入れて供え、灯明を上げて祭った。

そしてまた、この日が炉開きの日とされて、この日、こたつに初めて火を入れた。冬の始まりである。

五、いれあげ（旧西尻池村）

昔、旧荻藻川が増水すると、「いれあげ」が行われた。これは荻藻川から水路の通じている神楽池や真野池、皿池に水を引き込むことである。

大雨が降り、荻藻川が増水すると村役の者が太鼓で西尻池村の人々を呼び出し、土俵や材木で川を堰き止め、池と川を結んだ水路に水を流し込んで川の水を池に導くのである。

明治の末頃から後には、田畑の減少等のためか、この行事は行われなくなった。

六、駒ケ林八幡宮の祭（駒ケ林町三丁目・旧駒ケ林村）

昭和の初め頃まで、駒ケ林では八幡宮の祭が盛大に行われていた。

毎年、五月十五日には、昼はみこしが出て夜は屋台が出たそうである。このみこしは、その年の祭の寄付の少なかつた家や嫌われている家をめぐって飛び込んだのだが、この時ばかりは家をこわされても文句を言えなかつた。そこで乱暴な若者は、

「祭の時に、おみこしさんが飛び込むぞ。」

と言つて脅したそうである。

祭時の行列には、猿田彦の天狗の後、神主が馬に乗つて続いたという。この時、天狗にまたいでもらうと、身体の弱い子供が強くなると言われ、母親はわざと自分の子を道に寝ころがしたそうである。

七、ザコネ堂（駒ケ林町五丁目・旧駒ケ林村）

駒ケ林町五丁目にあつたザコネ堂には、村の若い男女が集まつて来た。柱を枕にして、ともに夜を過ごし、ここで知り合つた者同士で夫婦になることも少なくなかつたという。また、旅人が雨宿りをすることもあつた。

ノート

昔、各地の若者宿は交際の場であり、社会教育の場でもあった。駒ケ林のザコネ堂も、そのようなものであろう。

八、葬式のあとで（旧駒ケ林村）

葬式のあと、人々は火葬場から帰ると普通なら塩をかけて身を清めるところだが、駒ケ林ではそうはしなかった。

家の前に大きなタイヤを出しておき、その中に片足を入れてタイヤをまたぐのである。それが清めになるということであつた。

ノート

明治時代には、会下山の東部に火葬場があり、告別式が終わると、人々はその「エンヤマ」に行った。その途中の道―上沢通二丁目から北の川崎病院へ向かう道―が「ソウレン道」であつた。兵庫からのソウレン道は、やがて火葬場が房王寺町に移転してからも、葬式に利用されていたが、斎場が鶴越に移つてからは、その名も消えつつある。

九、駒ヶ林に伝わる昔の風習

(旧駒ヶ林村)

駒ヶ林では昭和の初め頃まで、子供が生まれてから三日間は、男も女も汚れているといい、海は神聖だと考えられていたから、漁に出てはいけないうさされてきた。

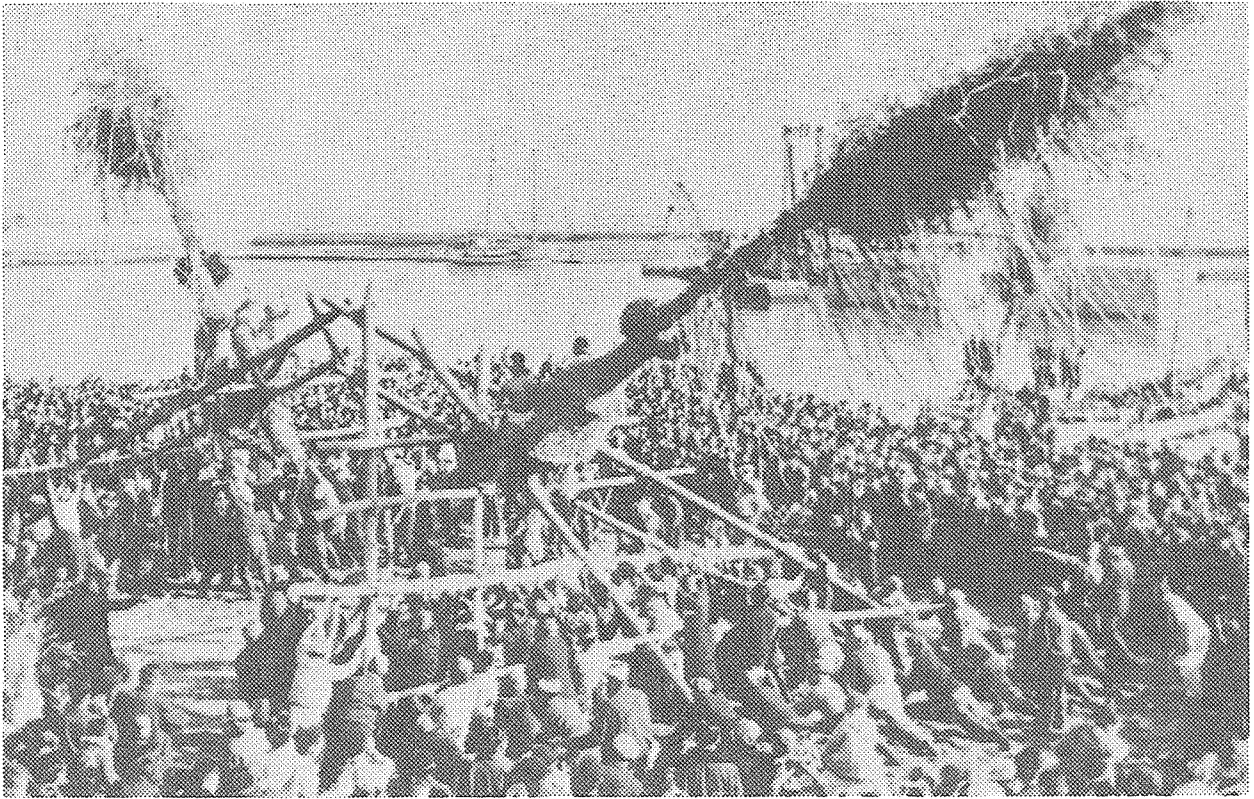
また、誰かがなくなつた家の者は、百カ日、神社の鳥居をくぐつてはならないともされていた。

十、駒ヶ林なまり(旧駒ヶ林村)

駒ヶ林には古くから独特の方言がある。こわれるを「めがれる」と言い、向こう側を「あっちべら」と言う。うどんを「うろん」、ぜんざいを「れんらい」、水を「おる」、坊主を「ぼうる」などラ行が



昔の駒ヶ林の浜



左 義 長

よく使われた。

また、この地域の言葉には京風のなまりがあると
言われた。その理由は、以前、駒ヶ林の女性は乳母
として宮使えをしていたためだとか、平家の落人が
住みついたためであると言われていた。

十一、左 義 長（旧駒ヶ林村）

毎年一月十五日、駒ヶ林^{こまがばやし}では「サギツチヨ」とか
「トンド」と呼ばれる行事が行われた。この行事は、
三基の「お山」で倒し合いの勝負をするものである。
「お山」とは、丸太の木材を組んでかつぎ棒とし、
その上にササやワラ、サカキなどで飾った青竹を立
てたもので、全盛期には高さ十メートルもあった。
三基のうち一基は行司役で、他の二基は東の村と
西の村に分かれて村の漁師が百人ほどでかついだ。

この二基が浜辺で倒し合いを争うのであり、勝った方の村はその年、網入れの優先権をもつことになるので、争いは壮絶をきわめ、ときには血を見ることもあった。このため、「駒ヶ林のけんか祭り」とも言われていた。

村の東と西に分かれて争うので、この時には、いくら仲の良い夫婦でもお互いの出身が東西に分かれる場合は、嫁は一時的に実家に帰されたという。

この行事を見物するため、当日は各地からの非常な人出で浜辺はうずまった。しかし、浜が次第に埋め立てられ、する場所がなくなり、昭和三十四年を最後に中止することになった。

ノート

この左義長は永延^{えいえん}二年（九八八年）に始められたと伝えられ、慶長^{けicho}（一五九六年）以後の記録が残っている。

左義長は、駒ヶ林の西の野田^{のだ}でも行われていた。お山の作り方や規模は駒ヶ林のものに似ていたが、二基のお山をぶつけて争うことはなかった。

史話・むかし話

一、行商の人々（長田区南部・旧西尻池村）

明治、大正、昭和初期にかけて、街々では様々な行商人たちが活躍した。

オツチニの薬売りは、手風琴（アコーディオン）を鳴らし、軍歌「戦友」の節で

「ここは奥さんどこですか 熟れて遠き下関 赤いまんじゅう白まんじゅう ひとつ食べたらうまかった 馬から落ちていたかった いたけりやお医者に診てもらえ お医者の薬は効かなんだ オツチニの薬はよう効いた オツチニ オツチニ」と歌った。詰襟つめえりの軍服に、黄色のラインの入った制帽をかぶり、各種の薬を売り歩いた。

また赤蛙あせ売りは、白地に黒ラインの入った細いズボンをはき、紹しょうの上着に兵児帯へいこおびをしめてパナマ帽をかぶり、魚籠かごに赤蛙の日干しを入れて売っていた。

その他、日露戦争の傷痍軍人たちが売って回ったのが「征露丸」である。赤地に「大阪天王寺てんのうじのせめん菓子」と染めぬいたハツピを着て、太鼓を鳴らしながら歩いた天王寺のせめん菓子屋などもあった（せめん菓子とは、子供の虫下しである）。

また、早朝には、煮豆、あさり、せと貝、なまこ、午後には金魚、オバケ、いわし、夕刻には豆腐というように、時刻によって行商人の種類がかわったものである。さらに伊勢神楽いせかぐらのような、日本古来の曲芸を見せるものもあった。玄米パンなどは、子供がアルバイトで売り歩いたりもしていた。

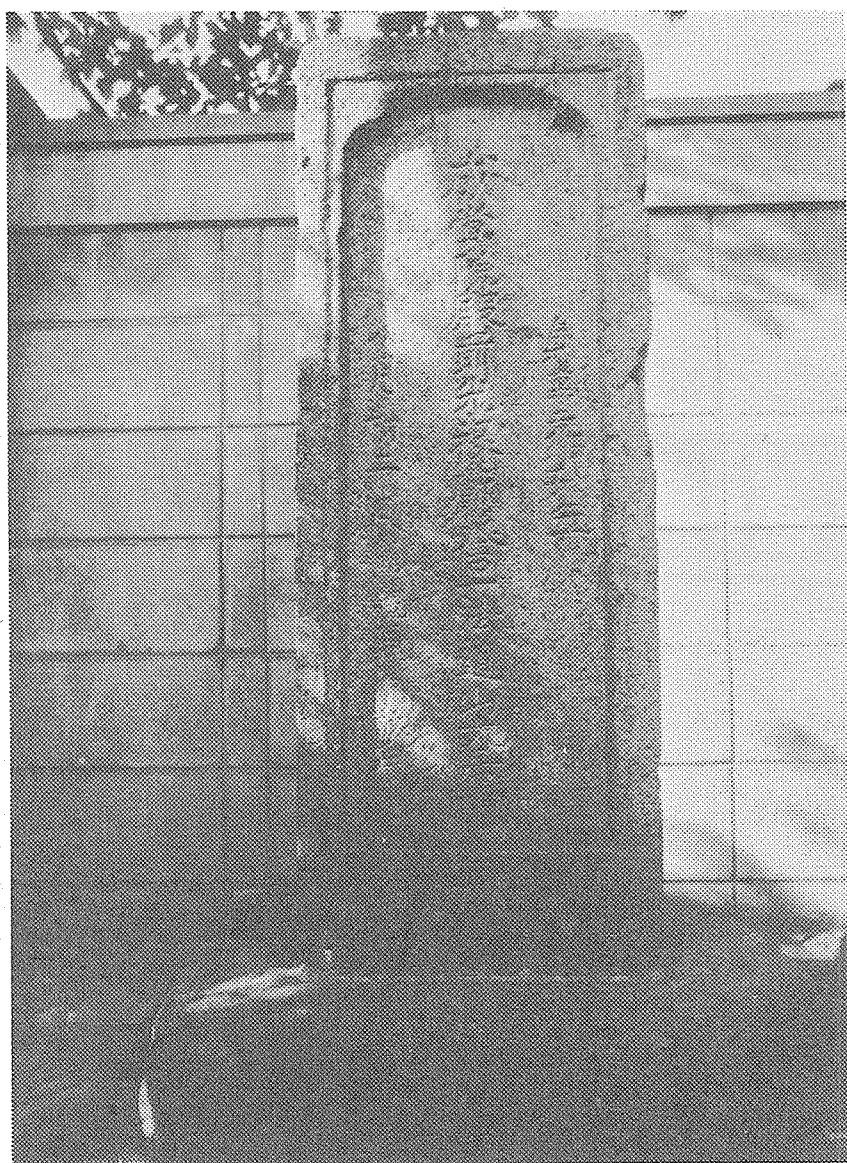
二、青山幸利公報謝碑（旧東尻池村）

江戸時代初期、摂津国にはいく度も凶作が続いた。その時、尼崎領主であった青山幸利は善政をしき、池田・長田・東尻池・西尻池・駒ヶ林の村々で年貢を免除して、村民の窮乏を救ったという。のちに、村の人々は青山幸利と家老の天野八郎兵衛をたたえて各地に碑を建てたが、その碑が東尻池の宝満寺に残っている。

三、水争い

（旧東尻池村）

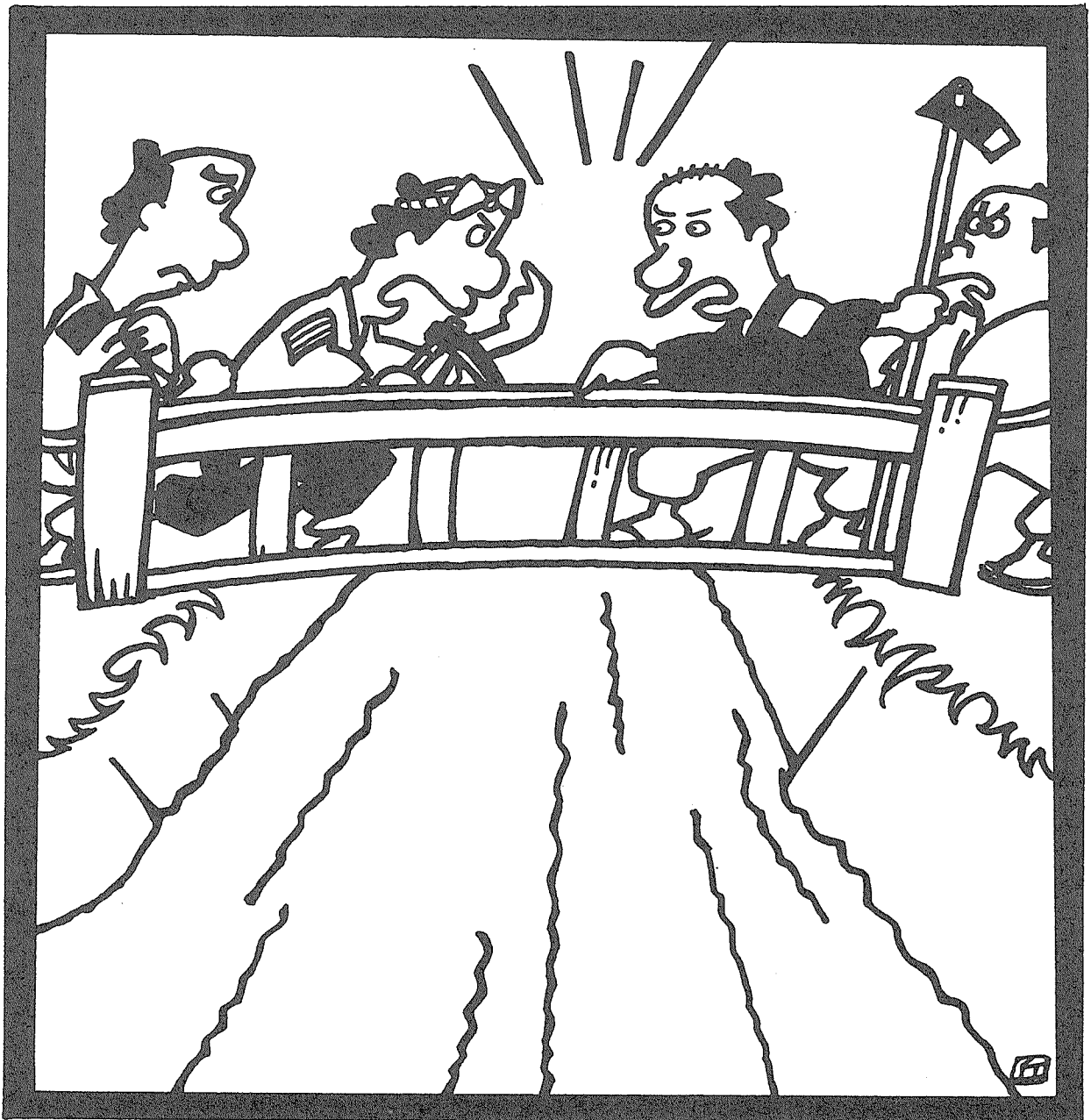
江戸時代中期、東尻池村と長田村や池田村との間に、荻藻川の水をめぐって水争いが起こった。しかし、幕府の直轄領だった東尻池村の勢力が強く、結局、長田・池田両村の負けとなって



青山幸利公報謝碑

しまった。

東尻池村がまず、川の水を自分達の田畑に使ったあとに、ようやく長田・池田村の人達が水を使うこととの裁定を下されたため、長田・池田村の人々は齒がみをしてくやしがあったという。



四、吉田新田（旧東尻池村）

天保四年、東尻池村の和田山にあつた山林を西宮の油屋喜右衛門という人が開拓し始めた。そしてようやく天保十二年に三十町歩の田畑を開くことに成功したので、幕府に願ひ出た。そこは、その喜右衛門の姓・吉田にちなんで東尻池の新開地として吉田新田と命名された。

五、金平町のいわれ（旧東尻池村）

現在では兵庫区になつてゐる金平町とは、元は東尻池の一部で、末正久左衛門と並んで東尻池村の筆頭庄屋であつた宗国金平が開いた土地だつたことから、それにちなんで付けられた地名である。

六、もりぞう (旧西尻池村)

昔々、山の中に一軒の大きなわら屋根の家があった。その家には一人ぼっちのお婆さんが住んでいた。

どんよりと雲の垂れこめたある晩、その家に一匹の狼が忍び込んだ。

狼「おい、俺は大層腹ぺこだ。お前をとって食ってやるぞ。どうだ、怖いか。」

婆「あつ、狼……。お前なんか怖くはないわい。」

狼「何、俺が怖くないと？」

婆「そうとも、ちつとも怖くない。」

狼「なんで俺が怖くないんだ。」

婆「お前よりも、もつともつと怖いものがあるんだわ。そいつが今夜あたりここへやって来るわい。」

狼「何、俺よりも怖いものがあるんだと？ いっ、いったいそれは何者だ。」

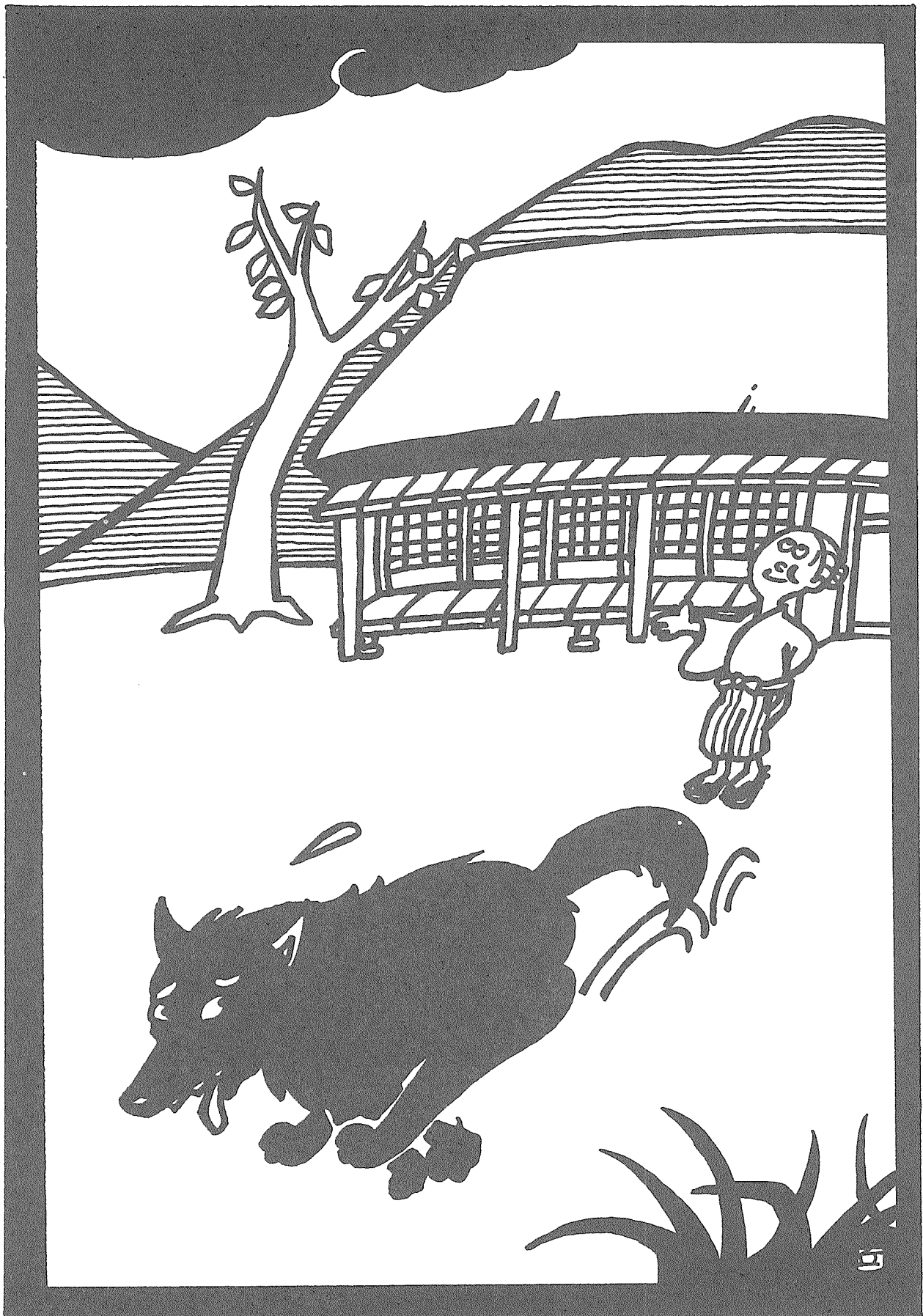
婆「それはな、『もりぞう』というのじゃ。」

狼「『もりぞう』だって。そいつはそんなに怖いやつか。」

婆「そうとも。それはもう、怖いわ怖いわ。」

狼「……………」。

婆「もうそろそろ、『もりぞう』が来そうじゃ……。そろそろ、そろそろやって来たようじゃぞ。」



途端に狼はあわてて逃げ出して行った。

垂れこめた空の雲間から、ポツポツと雨が降り始めた。

『もりぞう』というのは、実は雨もりのことだったのである。



わら屋根の古い家にとって雨もりは、とても困ったことだった。「古家のもり（漏り）」などという名で各地に伝わる昔話である。

話者および地区別調査担当者（敬称略・順不同）

長田

調査者・渡部永子

当津麗子（昭和九年生）

継本愛子（明治四十年生）

話者

小高勝（明治三十九年生）

藻川淳二（明治三十七年生）

多田宇市（明治三十七年生）

小高左近（大正五年生）

西本重一（明治三十八年生）

野田

調査者・大脇順子

駒ヶ林

調査者・深尾玲子

白泉英昭（昭和十七年生）

話者

調査者・大脇順子

話者

白泉みや子（大正六年生）

大前昌代（明治四十一年生）

中山信一（大正十一年生）

木梨きよ子（大正八年生）

大前敬雄（明治三十九年生）

来田正一（大正十一年生）

中島正雄（明治三十五年生）

藤井敬雄（明治三十九年生）

浜崎種市（明治四十一年生）

池田

調査者・高志直正

西尻池

調査者・天田晃司

来田正光（大正十一年生）

話者

話者

調査者・天田晃司

来田昭子（昭和二年生）

黒川清一（明治三十七年生）

内田豊清（大正三年生）

友光喜代子（大正七年生）

山口清一（明治三十九年生）

高橋幸子（大正十二年生）

中西政太郎（明治四十五年生）

藤末専精（大正七年生）

道羅繁雄（明治三十九年生）

高木宝瑞（大正十一年生）

谷口一男（大正九年生）

藻川淳二（明治三十七年生）

西代

調査者・位原庸太

宮崎実（大正四年生）

話者

東尻池

調査者・高橋富雄

岡田悦蔵（明治二十三年生）

話者

岡本伊一（昭和八年生）

龜山泰嶺（大正十四年生）

平野和美（昭和二年生）

龜山泰嶺（大正十四年生）

参考文献抄

撰津国風土記逸文	源平盛衰記	神戸の史跡	神戸市教育委員会	昭和五十年
日本書紀	太平記	神戸の町名	有井基	昭和五十年
平家物語		神戸の伝説	橘川真一	昭和五十年
撰陽群談		ながたの歴史	田辺眞人	昭和五十一年
兵庫名所記		兵庫の伝説	落合重信	昭和五十二年
撰津志		雑誌など	有井敏子	
播磨名所巡覧記		婦人神戸 一一三、一三〇号	陸井敏子	
撰津名所図会		「町名物語」	宮崎修二朗	昭和五十五年
播州名所巡覧図絵		グラフ神戸 四六・四七号	足立巻一	
西撰大観	仲彦三郎	「伝説の六甲山系」		
武庫郡誌	武庫郡教育会	教育こうべ 一一二、一五九号		
須磨史蹟	須磨尋常小学校	「伝説と歴史の神戸」		
六甲	竹中靖一	六甲史話		
武庫川・六甲山附近	辰井隆	歴史と神戸 九十号		
口碑伝説集	宮崎修二朗	神戸史談 二二四号		
兵庫の民話	徳山静子	駒ヶ林神社縁起書		
回顧七十五年	道畑佐市	天照山明泉寺の縁起		
郷土の民話―神戸編―	同志編集委員会			
郷土の城ものがたり	同志編集委員会			
―神戸編―	同志編集委員会			
すまのむかしばなし	田辺眞人			
	間島保夫			
	真野保夫			
	丘あつし			

絵

丘あつし

昭和17年生まれ。日本漫画家協会会員。

現住所 神戸市長田区長田町9丁目2-9

調査者（順不同・敬称略）

渡部 永子（深江生活文化史料館幹事）

位原 庸太（私立須磨女子高校教諭）

高橋 富雄（兵庫県立芦屋南高校教諭）

高志 直正（兵庫県立播磨養護学校教諭）

深尾 玲子（会社員）

天田 晃司（神戸市立舞子中学校教諭）

大脇 順子（宝塚市立宝梅中学校教諭）

伊東 玲子（関西学院大学文学部学生）

編著者紹介

田辺真人（たなべ・まこと）

昭和22年、神戸生まれ。関西学院大学文学部
史学科卒。

現在兵庫県立御影高等学校教諭、深江生活文
化史料館長、神戸史学会所属。

著書に『神戸の伝説』『歴史の須磨』『東灘歴史
散歩』など。

現住所 神戸市須磨区菅の台7丁目25-6

ながたの民話 © 許可なく転載・複製を禁ずる。

昭和58年3月31日 初版第1刷発行
平成5年3月31日 第3刷発行

編著者 田 辺 真 人

発 行 長 田 区 役 所

〒653 神戸市長田区大道通1丁目14番地
☎ (078) 691-5121 (代)

印 刷 梶 原 出 版 印 刷

